相の中に於て坐す、嗚呼美事ぢや、麻谷便はち女人拜を作す、是れは難有い南陽の忠國師さまと云ふ機ぢや、二人の作略面白い、一人は鑼を打ち、一人は鼓を打つ、泉云く、恁麼ならば則ち去らず、是れ什麼、法窟の爪牙、奪命の神符ぢや、祖師門下に此の些子を傳へてある、故に佛法今に盛なり、歸宗云く、是れ什麼の心行ぞ、是れまで來て不去とは、何の戲言ぞ、什麼をいひ道ひ遣る、圓悟こゝに著語して、歸宗綏いなせ南泉を一掌せぬ、孟八郎の漢拔け作男ぢやと、連節を歌ふたぞ、此の則は、向上の拈弄ぢや、後學初機は、手古に及び兼ぬるぞ、三人の作略孰れも甲乙は無いが、南泉の恁麼則不去は、實に膽肚を抉りて、堪らん處があるぞ、見ゐるか怎ぢや、雪竇は此樣子を提げて、由基箭猿を射る、樹を透る、何ぞ太だ直なると、三人途を殊にすとも、矢壺は違ひぬと述べたして、古今弓箭の名人、千箇萬箇是れ誰か曾て的に中つたぞ、南泉、歸宗、麻谷、ならではの意ぢや、三人同道して恁麼ならば、曹溪に去らずと、呼號して、歸らうとしたなぜ曹溪の路上に登陟を休めたぞ、復云く、曹溪の路は、洵に一筋の坦平である、が什麼に彼三人は登陟を休めたぞ、雪竇の名劒を綾に操る、美事なものぢや、千七百則の關門と云ふか、胸中百萬の軍馬を繫いである、ぞ、是等の則を手に入れねば、東山下の風采は更なり、祖道の源泉を探ることが、能きぬぞ。

百六十八　臨濟同普化赴施主家

舉、臨濟一日、同普化赴施主家齋次、師問毛吞巨海芥納須彌、爲是神通妙用、本體如然、普化踏倒飯牀、師云、太麤生、普化云、這裏是什麼所在、說麤說細、師來日、又同普化赴齋、問、今日供養、何似昨日、普化依然踏倒飯牀、師云、得即得、太麤生、普化云、喈漢、佛法說什麼麤細、師乃吐舌、

拈云、珠轉玉旋、百鍊精金、再出紅爐、普化依然踏倒飯牀、臨濟吐舌、得得得、一人高高峯頂、立不露頂、一人深深海底、行不濕脚、

此の則は、臨濟普化と同じく、齋に赴むく、次でぢやから、施主家での問答ぢや、毛吞巨海芥納須彌は、維摩經の文句ぢやが、臨濟は爰で、普化を見んとして、拈弄したのぢや、是れ神通妙用か、又は本より此通りのことか、普化飯牀を踏倒す、白圭瑕なし、美事なものぢや、師云く、太麤生と、前箭は輕く、後箭は深し、普化云く、這裏是れ什麼の所在ぞ、麤と說き、細と說くと、百鍊の精金、再たび紅爐を出て來るとは、爰ぢや、立派の働きを看よ、翌日又普化と同じく、施主齋に赴むく、次で、臨濟は今日の供養は、昨日のと御馳走は、怎ぢやと問ふ、普化依然として、飯牀を踏倒す、珠の盤に走るが如し、師云く、开れは好いが、太麤生、

普化云く、喝漢め、佛法に什麽の讎とか細とかあるものか、此末後の句が見苦しい、師乃ち舌を吐く、恐懼の貌ぢや、什麽に因てか、舌を吐くぞ、臨濟普化の商量、兩鋭相對して、中に影像あることなしぢや、左顧瑕なし、右眄既に老たりぢや、斯んなことは、眞似では不可ない、圓悟云く、普化に非ずんば、臨濟に抗することを能はず、所謂水の水に入るが如く、金の金に博するが如し、然れども、是の如しと雖も、檢點すれば、則ち二俱に失利、とは、圓悟の見識ぢや、山僧は二俱に無瑕の珠と、道はん、試みに緇素を、甄別して看よ。

百六十九　仰山問三聖

舉、仰山問三聖、汝名什麽、聖云、慧寂、仰山云、慧寂是我、聖云、我名慧然、仰山呵呵大笑、拈云、吹毛未舉前、直須鷹取、運擬不了、則千斷萬斷、仰山乎三聖乎、爲主爲賓、賓主難辯處、賓主歷然、欲得不笑、豈可得乎、

圓悟云く、天關を旋らし、地軸を翻へし、虎兕を擒し、龍蛇を辨ずるの手脚、ありて、始めて句々投ぜ、機々應ずとは、仰山三聖の謂なり、此の則は賓主互換の機用ぢや、瞥然として、眼を眨すれば、則ち見失ふぞ、仰山慈向、大刀を翳して、汝が名は什麽と、斬り掛た、主か賓を看る、明投合ぢや、圓悟は仰山名賓相奪ふ賊を勾して、家を破らしむと、下語した、爰は

人境兩俱奪の境界ぢや、聖云く、慧寂、是れは賓が主を看る、喝、投合ぢや、三聖は、作家ぢや、仰山の舌頭を、坐斷して、旗を奪ひ、鼓を奪ふ働きは、美事ぢや、互ひに機先を制して、把住するかと、思へば、俄かに、雲行きが變はつて、來た、仰山云く、慧寂は是れ、我と、明投合、放行ぢや、流石の仰山、甘い、各自に封疆を守りて、手を著けさせぬ、三聖云く、我名は慧然と、天關を旋らし、地軸を翻へすの働らきぢや、尊公が、慧寂なら、某甲は、慧然ぢやと、白拈賊、奪ひ去り、奪ひ來りて、賓主却つて、本分を守る、仰山呵々大笑す、笑ふより外はあるまい、雪竇は、雙收雙放、若爲宗と、頌した、仰山と三聖の相見は、二龍の珠を、爭ふ如くして、爾うして、騎虎の機を、逞うしたるも、畢竟、無造作にして、無功用ぢや、此一笑は、何處へ、落ちたか、絶功の的意は、悲風を、動かすの、樣子があると、贊歎の餘り、頌したぞ。

百七十　五祖默默默

舉、五祖上堂云、默默默、無上菩提、從此得、賺殺人、便下座、

默默默、坐在者裏、無上菩提、決不可得、五千餘卷、不從默來、維摩臥病、不從默來、莫道賺人、底從此得、畢竟如何、靜處婆婆訶、

五祖上堂、默默默、是れ什麽、默つなが好いと、思ふたら、沒交渉ぢや、五祖の腹を見よ、惡く

すると、無相平等の暗坑に墮するを、人を賺殺するは、默より來ると思ふも、亦沒交渉ぢや。若し山僧ならば然らず、默默默、無上菩提は、此より得ず、人を賺殺することも、亦得ずと云はんのみ、五祖と相去る多少を、甄別して看よ。

百七十一　報恩上堂汝等被聲色所轉

舉。報恩上堂。汝諸人盡被聲色所轉。何不鼓聲未動來。法堂前行一兩遭。雖然報恩更點火照。

僩面在。

虛堂停囚長智。大得人憎。山僧卽不然。何故。自屎覓臭。

此上堂は、希代の名作ぢ。汝等は兎角外境に轉せられて鐘鼓が鳴つたら、法堂に出頭することのみより知らぬ。若し聲色の所轉を被らざる者ならば、鼓聲の未だ動かざるに方りて、法堂前に來つて、行こと一兩遭、能きる筈ぢや。然りと雖も、浮かと乘れぬぢ。果然下の語を見よ。若し鼓聲の鳴らざる前に來つた者あらば、是れ曲者で、油斷ならぬから、乃公は火を點して、能く汝が面を照して、見んとす。なぜか。若し家搜索でもされては、大變だからと。東山下の暗號令か、什麼かしらんが、虛堂の凄い腕前を看よ。

百七十二　眞如九日謝首座侍者

舉。眞如九日。謝竹房首座。孟知客。淵侍者上堂。秋風吹客衣。問君知不知。孟嘉猶缺落帽。淵明望斷白衣。眞如臂長袖短。一杯聊應佳期。良久且喜竹房人解醉。免教黃菊笑東籬。

秋風吹客衣。問君總不知。湘之南潭之北。砧聲時及授衣。孟嘉未至落帽。竹房邀賞菊期。良久淵明爲媒。且醉舞南山今夕嫁東籬。

這は重九節の折りしも、竹房首座、孟知客、淵侍者の三人とも、重九の日に緣の有るものなれば、謝勞殊に面白い。秋風が客衣を吹く、君に問ふ、身に沁たか沁ぬか、怎ぢや。今日は重九ぢやが、孟嘉は帽を落す程の戲けにも至らぬ。淵明も白衣を望み斷つて、苦茶一杯を侑むる者もない。眞如乃公も臂長く、袖短かく、醜拙を形はすも、今日は節句ぢやで、一杯祝せん。良久して且喜い、竹房の人が醉を解して、呉れたて、東籬の黃菊に、笑はれなんだは、何に寄りの、仕合せぢやと、嗚呼面白い、上堂ぢや。斯んな微細なる言句は、東山下で無ければ、吐けぬぞ。眞如は實に、紅旗閃爍の雲門宗を興いたる、名將ぢや。

百七十三　大德拈慈明冬至牓

舉。大德慈明多至膀師拈云。東弗于岱日下東。西瞿耶尼月氏西。解笑者多。解哂者少。若也今晚放參。一多二東。叉手當胸。

瑞阜也下注脚。今日多至雪下。和尚有箇美饌。以饗大衆。果然和氣滿堂。亦奚說首座今晚放參。亦奚說解笑與不解哂多少哉。

慈明多至の膀。是れ什麽の繁驢概ぞ。山僧は一見して、注解せず、蟲の木を銜て、偶爾として、文を成すと。叫。大德拈じて云く、東弗于岱は、日下の東、へーい、西瞿耶尼は、月氏の西、へーい、笑を解する者は多く、哂を解する者は少し。吁々面白い。此意が見ゐたら、慈明も見ゐる。若し叉首座今晚放參ならば、一多二東、叉手當胸と、山僧は然らずをつと嬉しい日曜の翌日が、大祭日に當る。二日半日は、兩脚を展ばして、游ぶべい。

百七十四　佛光上堂終日茫茫

舉。佛光上堂。終日茫茫。那事無妨。東湧西沒。七圓八方。珠走盤兮。不接自轉。鳥飛空兮。任意翔翔。龍門無宿客。官路有私商。擊拂子下座。

龍門無宿客。官路有私商。走盤珠宛轉。任意鳥翱翔。東湧兮西沒。七圓兮八方。茫茫走作客。驢馬事何妨。忽有一人罵斥云。一句合頭語。萬劫繫驢概。山僧卽道好箇來問。吾豫點痒處。

以招彌抓著。

此上堂。佛光自由三昧。法に於て自在なる境界ぢや。終日驢事馬事に忙がはしく。官に接し。官を送り。聲聞長者婦女の來るに。接得して。事を妨げぬ惡い可愛い。圓くなり。方になり。珠盤に走るに。此方より撥せざるに。轉却して廻はる。鳥の空中に飛ぶや。地獄があらうと。極樂があらうと。些とも頓著せぬ。龍門に宿客なく。滔々と落る瀑の中には。泊ることは。不能ぬ。官路私商あり。併しながら。妙なもので。その中に。宿泊の能きる處もある。些何。佛光の秘訣ぢや。此上堂正中來。兼中至の境界を得た者で無いと。受用すること能きぬ。我れ法王と爲り。法に於て自在は。爰に於て。手に入れよ。

百七十五　息耕開爐上堂

舉。息耕開爐上堂。舉。丹霞燒木佛。師云。丹霞如蟲銜木。院主偶爾成文。報恩今日開爐。且無木佛可燒。只有些無明火。常在諸人面前。日短夜長。各自照顧。

瑞阜開爐也。無木佛可燒。而有著木炭。賴使院主。免得眉鬚墮落。三更起坐。撥寒灰。拾得少許舍利。雖然寒甚。急急抽身。猶怕不及。叫。

息耕開爐に就て。丹霞の機緣を引證したぞ。丹霞燒佛の事は。名高いが。師の拈弄に因る。

と、何でもない、丹霞は蟲の木を禦むが如し、院主は偶爾として、文を成すと、是れ什麽、丹霞の燒佛は、無心の中から出たぞ、院主は仕合にも、癩病に罹りて、眉が落ちたと、面白い、古人も世尊拈華、如蟲禦木、迦葉微笑、偶爾成文と、云ふたは、虚堂と一摸に脱出した報恩乃公の開爐には、木佛の燒くものはないが、些の無明の火とは、怎ぢや、黑暗々地と見るな、常露現前して、初冬となれば、日は短かく、夜は長い、各自に照顧せよ、只是れ氣を付けよ、是れ虚堂の毒氣ぢやぞ、乃公も無明の火があり、其火は怎うか、日は短かく、夜は長い、時間の空過することに、取ては沒交渉ぢや。

百七十六　五祖上堂適來思量

舉。五祖上堂云。適來思量。得一則因緣。而今早忘了也。却是拄杖記得。乃拈起拄杖云。拄杖子也忘了。遂卓一下云。同坑無異土。咄。

忘了忘了。忽然記得。記得箇什麽。三十年前。也被老鼠咬破七條。無學道底。五祖莫道同坑無異土。咄。飯裏有沙。

五祖の秘訣が出たぞ、能く忘れる、和尚ぢや、拄杖子は、爾うでなからう、乃ち拄杖を拈起して、己奴主も、また忘れた、其筈ぢや、同穴の狐狸ぢや、爰は忘れ屋の集會所ぢや、はゝは

は、斯んな死戲ごとは、一寸真似は、能きぬぞ。

百七十七　梁武請傅大士

舉。梁武帝請傅大士講金剛經。大士便於座上揮案一下。武帝愕然。誌公問。陛下還會麽。帝云不會。誌公云。大士講經竟。

拈云。傅大士揮案一下。卽講經竟。是則是矣。雖然帝固非這中人。使之愕然而何益。山僧卽不然。旣是陞座講經。須具威儀。依例對卷曰。如是我聞。乃至信受奉行。當時若通這消息。則見龍顏大悅。群情亦暢。大士當初。旣爲誌公老所瞞。被指注講經竟。乃休可惜許。噫。座邊無木上座乎。

梁武帝、常に金剛經を讀て、而して今傅大士の座上に於て、揮案一下に逢ふ、帝、喰ひ著けぬ、金剛經を差し付けられて、愕然たるは、無理はない、誌公も手緩い、今些と接得の仕方も有りさうなものなるに、陛下還つて會する、惜いことぢや、然れども、誌公また這の中の人、前に達磨を武帝に紹介し、今又傅大士を紹介す、塌薩阿勞ぢや、此魂膽は、雪竇が能く看取して、雙林に向つて、此身を寄せず、却つて梁土に於て、塵埃を惹く、惹塵埃の三字は、傅大士の面目を寫して、覩るが如し、當時

幾乎のことに誌公を得なかつたら、達磨と同じく、栖々として、國を去る人ぢやが、漸つとのことで湯茶を濁したぞと、面白いことぢや。

百七十八　臨濟問院主

舉。臨濟問院主。什麽處來。主云。州中糶黄米去來。師云。糶得盡麽。主云。糶得盡。師以杖面前畫一畫云。還糶得這箇麽。主便喝。師便打。典座至。師舉前話。典座云。院主不會和尚意。師云。倆作麽生。典座便禮拜。師亦打。

拈云。只是兩打。一打著。一不打著。就中難提掇處句子。在院主乎。在典座乎。將在臨濟乎。若能甄別去。大開東閣供養倆。

這は臨濟が院主に問ふの則ぢや。師云く、持て往いた丈けは皆賣れたが怎ぢや。此箇手に掛つた院主も這の中の人皆賣れましたと云ふ。師杖を以て、面前に畫一畫して、這箇を賣り得てんや。主便ち喝す。師便ち打す。此話を典座に移した。典座禮拜は美事ぢや。師の亦打つも好い。爰に節角も、請訛も無いか。山僧は一打著、一不打著と云ふ。何處を見て道ふたぞ。人々の腕前で看よ。

百七十九　四面冬至上堂

舉。四面冬至上堂云。少年天子。此日拜郊。林泉之士。遠望歌謠。萬歲萬歲。便下座。

普天率土。國威赫赫。四海八蠻。皆仰錦旗。皇帝萬歲萬歲。何故。我見燈明佛。本光瑞如此。此冬至祝聖上堂は、何處が主眼ぞ。少年の天子御即位召され、大嘗會を行はせられ、此日を以て、郊を拜し、上帝を祭らる、無限目出度事なれば、山林の衲僧も、此盛典を遥かに祝賀して、御世萬歲を歌謠し奉ると云ふて、便ち下座、斯う云ふことを、尋常人が、云ふたら、什麽でも無いが、五祖の口から、述べると、一々金玉ぢや、五千餘卷の經にも、勝る一句ぢや。雲門宗の神髓を、枉げ出したぞ。之を支那の故事として、何にとも感せぬ樣な者では、日本國民とは、稱せられぬぞ。

百八十　息耕冬至小參

舉。息耕冬至小參。釋迦已滅。彌勒未生。恁麽時節。東去也得。西去也得。無端少林壁觀。雪庭墮臂。引得一地裏人。如荷一百二十斤重擔。上羊嶺嶺一般。及乎詰其端由。依舊不出箇仲冬殿寒。布裩赫赤。報恩久默。斯要。不務速說。

息耕恁麽說話。大似把鬚投荷。且道。少林面壁。雪庭墮臂。要且無繩自縛。況乎鏡清臥單。皓老布裨。何臭皮袋。看來。箇箇抱贓叫屈。吾這裏也不免依樣畫葫蘆。何故。一東二冬。叉手當胸。

此冬至小參。は、虛堂の上堂中、尤も節角、誦訛の則ぢやで、容易にするな。釋迦已に滅して二千年。彌勒は五十六億七千萬歲の後に在り、二佛の中間、やんら目出度や、春の氣色、東西南北、勝手次第ぢやと、歌ひつ舞つしたか、然るに端なく、爾うは不可ぬ、達磨爺翁が出で、少林寺に壁觀したの、雪庭裏に臂を墮したのと、厄介なことを、言ひ出して、一地裏の人を引得て、百二十斤の重擔を荷ふて、高山に上る如く、接心とか、參詳とか、面倒臭いことを、道ひ出した、扨て、其端緒來由を、難詰して見るに、仲冬嚴寒で、あるから、例の皓老は、布裨の赫赤も、洗はぬ、鏡清は、臥單を、敷いたまゝ、展べぬと云ふに、過ぎぬ、乃公も是れまで、久しく、斯要を、默して、務めて、速說しなかつたが、今日は、もう、堪忍袋の紐が、切れたと、是れ、什麽、說いたのか、說ぬのか、何にやら、角やら、臭ひものに、蓋した樣な、こと、を、云ふ、和尙ぢや、が、何處やら、妙がある、何處が、妙かと、詰ひ言ひ立てた處が、虛堂の、妙處ぢや、哩、吽。

百八十一　眞如上堂入荒田不揀

舉。眞如上堂。入荒田不揀。信手拈來。無有差錯。麻三斤。乾屎橛。庭前柏樹子。丈林山下竹筋鞭。喝一喝。只知事逐眼前過。不覺老從頭上來。

眞如年老。心孤。無事起。事何不引盡這語。眞如只知進前。而不圖退步。吽。不覺道。麽。狼。狽。其胡。載。寒。其尾。濟。

是れは、眞如の、暗號、合ぢや、面白い、萬頃の荒田に、入つて、何處、眺めても、草木國土、悉皆成佛ぢや、草一本でも、そで、無い、者は、ない、衆生は、本來、成佛だ、犬猫を、捕へて、釋迦彌陀と、云ふて、も、差閊はない、麻三斤の、乾屎橛の、柏樹子や、竹筋鞭や、喝一喝、まだある、此方は、忙はしう、て、朝から、晩まで、只、事の、眼前を、逐ふて、過る、白髮、皤々たる、老翁と、成つた、哩、是れ、什麽、這の、活きて、躍る、眞如を、捕へて、見よ、生き、肝を、拔いて、見せた、處は、妙ぢや、老僧、住持、事繁し、抔とは、亦、樣子の、變つたもので、斯う、云ふこと、は、老鍊の、上でなければ、道へぬぢや、嗚呼、面白い。

百八十二　龍寶歲旦雪下上堂

舉。龍寶歲旦雪下。上堂。昨夜舊年風。今朝新歲雪。雪帶舊年寒。風和新歲節。阿呵呵。我家好驅

儺向後絶災禍絶災禍東西南北皆可可龍寶從茲爐竈大

龍寶和尚萬福舊年風新年雪舊年寒新年節事事吉祥瑞阜也庶歌云去年貧有錐無地

今年貧無錐無地分燭無隣引月光吟風有響破窓紙與大燒相去多少

龍寶歳旦雪下る上堂非常なる御機嫌ぢや昨夜舊年の風今朝新歳の雪雪は舊年の寒を帶び風は新歳の節を和す阿呵々我家の好驅儺是れ什麽昨年の風と今年の雪と恁云ふ處が好驅儺ぢや鹿林は立春大吉祥と下語したは面白いあア目出度ムる向後災禍を絶す鬼は外東西南北皆可々福は内龍寶茲より爐竈大ならん斯う目出度で世界中の人を殘らず接待せねばならぬ炊事場を取り廣げ竈を增さねばならぬ龍寶は富貴盡しぢやがこゝを能く見徹せぬと蹉過するぞ

百八十三　佛光冬夜小參

舉佛光冬夜小參拄杖頭邊破蒲團上正與麽時也有一線半線諸訛我此一衆盡是參玄上客各各眉下帶眼不道無人緇素得出只恐無人包裹得去若一一爆綻出來非但洞山果子分文不直累他皓老布裩醜拙尤多事無一向罪不重科莫拄杖拋向江南與江北從教馬戴及驢駝

佛光國師拈拄杖頭邊破蒲團上八字來附許多注解就中有一線半線諸訛正眼看來人人眉下不着眼各各唇下有鼻孔也無人緇素得出若有人包裹得去有事可通無理所滯千拙萬能一得一失馬載驢駝亦不易拋向佛光檢覈甚過如何蓋覆將去休休休近日王令稍嚴

佛光冬夜小參ぢや拄杖頭邊破蒲團上此八字で佛光を看よ已下は餘波ぢや若し一々爆綻し出し來ばとは恁ぢや蒲團上で豆の爆彈した如く無明が破れたら洞山の菓子は二文錢にも價せず皓老の布裩も醜拙尤も甚し併ながら萬事一方向では不可ぬ衆罪も重ねて科せられぬ拄杖に跨りて西の海へさらりと打ち遣れと馬に載せ樣と車で引うと儘のかわよ此結末の句子が手に入つたら難透の語話も左程苦勞はないぞ

百八十四　虛堂示衆喫菓子

舉報恩舉五祖演和尚示衆但只喫果子誰管樹曲彔報恩果子貴賤價數高低也要諸人一一知得

五祖但喫果子誰管樹曲彔報恩果子貴賤價直高低一一知得兩箇老漢喫果用心盡矣山僧卽不然樹曲彔固不足管果子價數何要知得一任他罵無厭消要只逢果喫果逢茶

喫茶耳矣。

これは虚堂、冬夜の小參に、五祖の示衆を、拈弄したのぢや、冬夜に縁ある喫菓を擧げたが、中々齒も、立つもので無いぞ、五祖は但只菓子を、喫さいすれば好い、樹の曲彔を管せんと、虚堂云く、者の無脈消の老翁、與麽に來處を、知らざるを得たり、報恩は兒孫なれども、然らず菓子の貴賤價數の高低を、一々知得した上でないと食はぬと、此二大老の示衆を見よ、弟たり難く、兄たり難くぢや、恁麽な狠戾根性も、餘り多くはないぞ、鵠林云く、兩個の惡情悰、一箇は碧嚥胡の、板齒を闕くを知つて、神光の左臂を、失ふを見す、一個は陝府の鐵牛を、滌ぐを解して、嘉州の大像を、奈何することなし、點檢し看來れば、膩粗を、大夫に致さずと、面白い評ぢや、兩個の惡情悰の、肝腸を見徹せねば、此段の因縁は見ぬ、同坑に異土なし、一窟の狐狸ぢや、而して鵠林も、亦能く魔魅するぞ、油斷すな。

百八十五　四面有一道姑入山

擧。四面有一道姑入山禮拜。請上堂云。道可道非常道。眞可笑。姮娥一夜繡鴛鴦。解把金針呈巧妙。將並老黃梅兒孫一何拙。如今箇箇口吒呀。問著烏龜喚作鼈。四面今日與君決列乍生雪。寃家寃家。眞向背地裏吐舌。

四面上堂垂示。血滴滴地。從皓韻起。古體變格。初頌道姑沒量漢。而結與此人。將並老。後面屑韻。初頌黃梅兒孫零落。而與道姑。雪這恥辱。寃家寃家。眞背地裏吐舌字。字句紙面活躍。如金剛杵。如象王鼻。此道姑、劉鐵磨之亞流也。四面若徹廻天手。則幾乎見奪旗鼓。

支那には、道教を奉ずる婆子を、道姑と稱す、一日山に入つて、上堂を請ふた、そこで五祖上堂、道の道とすべきは、常道に非ずとは、道經の語ぢやはゝゝう笑しくて堪へられぬ、何に故か、姮娥の美人、一夜鴛鴦を繡た、道姑が乃公に參禪したぞ、金針を把て巧妙に繡ひ立つることを解得した、將に並びに老ひんとすと、鴛鴦の雙翼を並べた如く、乃公も一處に、暮したいと思ふ、一轉して、韻を換へた、斯う云ふ、篤志の道姑あるに、吾が祖師門下の、黃梅の兒孫、一に何ぞ拙劣なるぞ、如今衲子と、稱する者、箇々口は吒呀と、饒舌するも、問著すれば、烏龜を喚んで、鼈と爲す、嘘八百である、乃公は今日、君と決斷猛烈の、氣を出して、怎かして、耻辱を雪ぎたい、寃家々々、これ箇の婆め、親の讎敵、逃さぬぞ、背地裏に、舌を吐くなかれと、云ふ意ぢや、至篇天に倚る長劍ぢや、此等の上堂、手に入ると、五祖の室に入つたと、云ふも可い、併しながら、解り苦い、此道姑は、沒量漢と見る、五祖も大分、鼻油を引いて、頌せられたぞ。

百八十六　巖頭問僧

舉。巖頭問僧。什麽處來。僧云。西京來。頭云。黃巢過後。還收得劒麽。僧云。收得。巖頭引頸近前云。僧云。師頭落也。巖頭呵呵大笑。僧後到雪峯。峯問。什麽處來。僧云。巖頭來。峯云。有何言句。僧舉前話。雪峯打三十棒趕出。

拈云。黃巢過後。收得劒麽。僧云。收得。巖頭能解弄死蛇。引到云。因也是養子之緣。這僧不解巖頭笑裏有刀。將頭落底頭去。舉似雪峯。峯便三十棒趕出。果然當時。峯棒折那。這箇公案。等閑觸著。則傷手。犯鋒。猶有雪竇頌中結云。得便宜是落便宜。且道。落便宜底是那箇。竇這一語。塗毒鼓。使聞者死。急著眼看。

這箇の公案は、黃巢の賊が、西京を掠む時に方りて、折りしも箇の僧來つたので巖頭は黃巢過て後還つて劒を收得するや否やと問ひ掛けた、義經が死んで、友切丸の名劒は、怎したと云意ぢや、箇の僧轉身を解せずして、收得すと、手を傷け、鋒を犯した、此死馬に鞭つも、益なきも、巖頭は慈悲深い、頸を引て、近前して云く、因爰で箇の僧、一働らきなければ、ならぬに、死蛇ぢや、師の頭落るなりと、もう活るとが能きぬ、巖頭も呵々大笑した、何を笑ふか、此笑の寒きを見よ、僧後ちに雪峯に到る、峯問ふ、什麽處より來る、僧云く

巖頭、峯云く、何の言句かある、僧前話を舉す、雪峯打こと三十棒して趕出す、先づこれで、死人の葬式を了した、此の則は、巖頭、雪峯、二大老が、明合暗合、雙放雙收の手段は、只是れ死蛇を弄して、活龍と爲さんとの意ぢや、兎角學者、明頭來、明暗頭來の事に、渉れば、一向に失却す、箇の僧の如き者なり、そこで洞家は、五位の穿鑿で、明暗雙々に至らしむ、東山下の密令は、難透の話を以て、悟後修行に力を得せしめ、佛界悟りの臭味を脫却して、魔界差別の法門に躍り出でしめ、事々無碍の活境界を得せしむ。

百八十七　臨濟因聞第二代德山垂示

舉。臨濟因聞第二代德山垂示云。道得也三十棒。道不得也三十棒。師令樂普去問。道得爲什麽。也三十棒。待伊打汝。接住棒。送一送。看他作麽生。普到彼如敎而問。德山便打。普接住送一送。德山便歸方丈。普回舉似師。師云。我從來疑著這漢。雖然如是。汝還見德山麽。普擬議。師便打。

拈云。德山臨濟。同其志。異其謀。君適西秦。我適東魯。雖然布政於中國。先聖後聖。其揆一矣。德山便歸方丈。始隨芳草去。又逐落花回。臨濟云。汝還見德山麽。平原秋樹色。沙麓暮鐘聲。二師手段。相携登樓。難弟難兄。畢竟如何。穆穆皇皇。宜君宜王。

臨濟は德山の道得三十棒、道不得三十棒を疑はれ、侍者樂普をして、道得るも、什麼として、また三十棒なると問はしむ、普彼の處に到りて、敎への如く問ふ、德山便ち打つ、普棒を接取して、送一送、向へ撞いて〳〵、撞きまくる、德山便ち、方丈に歸る、嗚呼美事な、德山の働きぢや、樂普却回して、臨濟に此事を擧似す、師云く、我れ從來這の漢を、疑著して、好かぬ奴ぢやと、思ふて居た、然れども、汝還つて、德山を見るや、爰で臨濟の、大機大用を看よ、普擬議す、師便ち打つ、是れ恁ぢや、普の擬議は、無理はない、意外なる、臨濟の訊ねぢやで、然れども、師便ち打つ、箇の一棒は、何處を見て、打つたか、參。

百八十八　五祖僧問如何是佛

擧、五祖僧問、如何是佛、師云、露胸跣足、學云、如何法、師云、大赦不放、學云、如何是僧、師云、釣魚船上謝三郎、乃云、我本無心有所希求、今此寶藏、自然而至、世間之寶、能變窮爲富、此之一寶、能轉凡成聖、且道、如今是凡是聖、太平道總不是、何故、苦瓠連根苦、甜瓠徹蔕甜、瑞阜三寶不然、如何是佛、水至清則魚不住、如何是法、一言既出駟馬難追、如何是僧、趙孟所與、趙孟能奪、五祖說出世間寶、轉凡成聖、吾王庫內無如是寶、如何能轉凡成聖、仔細看來、將謂侯白元是侯黑、

佛法僧の三寶ぢや、敎家の說とは、雲泥の相違である、學問ふ、如何なるか是れ佛、五祖云く、露胸跣足、これが佛か、五祖の語言三昧に、自由とは、爰ぢや、學云く、如何なるか是れ法、師云く、大赦にも放さず、法令嚴肅で、點滴も施さぬ、縱ひ大赦でも、己奴が樣なものは、出獄も能きぬぞ、學云く、如何なるか是れ僧、師云く、釣魚船上の謝三郎、魚釣りの三助ぢや、これが僧か、成る程玄沙も、本は謝三郎ぢや、法心國師も、元是れ眞壁の平四郎ぢや、乃云已下は、提網ぢや、我れ本と心に、希求の念が無きに、今此寶藏が、自然に至るとは、敎說ぢやが、衲僧が取り扱ふ段には、活きて來る、世間の寶は、困窮を變じて、富貴と爲す、此無爲の寶は、凡を轉じて、聖と爲す、孰れか凡、孰れか聖、と云ふに、乃公は凡も聖も、總に不是、口眞似するもので、無い眞劍に遣れ、何故ぞ、苦瓠は根に連つて苦なり、甘瓜は蔕に徹して甜なり、これは講釋では、不可ぬ、人々の力で看よ。

百八十九　虛堂謝執事上堂

擧、報恩謝執事上堂、一跳一踉、師子嚬呻、一新一舊、和氣如春、報恩尺不如寸、贏得癡坐、何也、家裏有人、

家裏有人、主翁癡坐、叢林盛事、莫大於是焉、漢高用人之智、而治天下、虛堂蓋叢林之沛公

也。

執事の交迭に就ての上堂ぢや、一新一舊交代したが、騎れも師子の嚬呻の全威を振ふて、且つ和氣藹然たるは、春の如し。報恩乃公は、主人ぢやが、尺は執事の寸に如かず、併しながら、仕合せなことには、吾家に好知事が出來た故に、乃公は只凝坐して、都て何事も、一任するぢやと、言外に人を使ふは、虚堂ぢや、寸鐵人を殺すは、報恩ぢや、此意を見ぬと、此錄は面白くない。

百九十　南泉心不是佛

舉。南泉示衆云。心不是佛。智不是道。眞如拈云。心不是佛。智不是道。碧眼黃頭果然失笑。

瑞阜和云。心不是佛。智不是道。碧眼黃頭果然失笑。

心是れ佛に非ず、智是れ道に非ず、是れ南泉の示衆ぢや、然れども南泉に此語なし、南泉を謗る勿れ、眞如の合頭も、面白い、碧眼黃頭果然として失照と、失照の二字殊に好い臺座後光までも奪却られて、釋迦も達磨も、貴重の家寶を、棒に拋つたとさア、山僧は只是れ、一字を換却して、碧眼黃頭果然として、失笑ぢや、照でない笑ぢや、心是れ佛に非ず、智是れ道に非ず、好笑々々、何處か好笑しい、腹筋よれる、釋迦も達磨も、好笑しくて吹き出

すであらう。

百九十一　大德拈風穴語默涉離微

舉。大德上堂舉。僧問風穴。語默涉離微如何。通不犯穴云。常憶江南三月裏。鷓鴣啼處百花香。

諸人要見風穴麼。只識取常憶二字。其如未然離微體淨品。

常憶二字。要見風穴。則沒交涉。以離微體淨品。要見大德。祖庭猶隔天涯。畢竟如何。只願君王相顧意。臨臺幾度畫蛾眉。

箇の僧は、戰に慣れたる、作家ぢや、風穴に問ふ、言中に響あり、語默語は今時にして、偏位明ぢや、默は那邊にして、正位暗ぢや、離微離は默の至極、微は語の至極に涉る、如何が不犯を通せん、語でも默でも、離微に涉つて、まだ法に悟りの臭味が、除かざるは、恁しい會通して、犯さぬ傷のつかぬ樣に、能きませうかとなり、穴云く常に憶ふ、江南三月の裏、鷓鴣啼く處、百花香しと、箇の僧七十二斤の鐵鎚を、劈面に揮ふて、風穴を一齊に粉碎せんと、掛つたか、風穴は之を受け流がして、輕妙なる手際は、天狗の鼻の孔に、蜻蜓が住つた樣で、如何な箇の僧も、呆然たらざるを得ず、そこで龍寶の批判を見よ、諸人風穴を、見んと要せば、常憶の兩字を、識取せよと、是れ〳〵、斯ういふ氣の利いた拈語は、國師に限る。

ぢや、若し其未だ然らずんば、離微體淨品と、前箭は輕く、後箭は深し、實に名句ぢや、三千年に、一度しか開かぬ、優曇婆羅華ぢや、然れども、三日の後ち、亡僧を送らされば、便ち是れ好手と、山僧は道はんのみ、咄。

百九十二　南泉斬貓兒

舉。南泉一日。東西兩堂爭貓兒。南泉見。遂提起云。道得卽不斬。衆無對。泉斬貓兒爲兩段。南泉復舉前話。問趙州。州便脫草鞋於頭上戴出。南泉云。子若在。恰救得貓兒。拈云。向上一路。千聖不傳。鎖鑰在手。殺活臨機。正令當行。全體作用。底作麼生。道。急著眼看。他旣斬貓兒了。晚間舉似趙州。州便脫草鞋於頭上戴出。泉云。子若在。却救得貓兒。看古人受用。機中藏句。雖然可惜許。賊過後張弓。圓悟道。其實南泉。當時元不斬。此話不在斬不斬處。咄。死貓兒。與狗子去。狗亦不喫。山僧每看碧巖。至此話。而寒毛卓豎。此事實在境界矣。於言句下。尋覓死貓。有何了期。雪竇頌。我愛一刀兩段任偏頗之句。卽是與南泉趙州。把手共行者矣。

此南泉斬貓兒の則は、能く圓悟の垂示を見よ、意路到らず、正に好し、提撕するに、言詮及ばず、宜しく急に眼を著くべし、若しまた電轉し、星飛ばゞ、便ち湫を傾むけ、嶽を倒すべし。

と、說き得て、切實なり、南泉一日、東西兩堂、貓兒を爭ふ、南泉見て、遂に提起して云く、道得は卽ち斬らず、南泉擧示の下に於て、直に薦取せよ、第二頭に下らば、則ち沒交涉ぢや、衆對ふることなし、泉貓兒を斬つて、兩段と爲す、山僧下語して云く、咄、這の盜人の皮め、地獄へ眞つ逆さまに墮るぞ、南泉復た前話を擧して、趙州に問ふ、州便ち草鞋を脫して、頭上に於て戴いて出づ、南泉云く、子若し在らば、恰かも貓兒を救ひ得んと、這の一絡索、南泉歌へば、趙州舞ひ、唱拍相隨がふ、知音の者少し、古來往々、此則を批評して、多くは正鵠を失して、的中のもの甚だ稀れなり、此事實に說明に非ずして、境界に在り、境界にして、到らずんば、百千の講說も施す所なきのみ、山僧は點滴も施さぬ、學者の悟門を恐れてなり。

百九十三　太平謝莊主

舉。太平謝莊主。上堂云。一不做二不休。不風流處也風流。若要公私濟辨。好看露地白牛。

太平謝莊主、風流溫藉、若夫露地白牛、步步清風、行處穩、不將寸草甜唇牙。露地の白牛を見たとて、公私濟辨は不可ぬぞ、然れども五祖は其莊主の器量を見て、道はれたる者なるべし、若夫れ、一不做二不休、底の猛漢ならば、露地の白牛に眼を著けて、

必ず願輪に鞭ちて度生に身を一任せよ。

百九十四　臨濟入京敎化

擧。臨濟入京敎化云。家常添鉢。到一家門首。婆云。太無厭生。濟云。飯也未得。何言太無厭生。婆便閉却門。息耕拈云。蠅見血。鶻捉鳩。拳來踢報。膠漆相投。難提掇處轉風流。

臨濟如割鷄用牛刀。婆子如以金換鍮。兩兩也不[illegible]多。貴買賤賣。看來一得一失。

臨濟入京の事は、林間錄上には、斷際禪師の機用と爲す、此敎化は、肝腎ぢや、京に入て、托鉢毎家に、添鉢と云ふ、一家の門首に到る、婆云く、健啖め箇の太無厭生と、際云く、飯もまだ、未だ得ざるに、何ぞ太無厭生と言ふや、婆便ち門を閉却す。是れ什麼、虛堂は專ら爰に、眼を著けて、評判したぞ、いかに慳貪邪見の婆子として、斯くも氣強く、門扉を鎖して、入れなんだ、此婆何にか、臨濟に氣に、入らぬ處あつてか、开は兎に角も、虛堂は云く、蠅は血を見たなら、乾盡さねば止かぬ。鶻は鳩を見たらば、筋力を勞せず、向ふから、拳骨で來らば、蹋倒で報ず、賣り辭に、買ひ詞と云ふか膠と漆と、相投ずる如く、臨濟と婆子と、機々相契ふたものぢや、就中地ばなしならぬ、提掇し難い處轉た風流とは、何處ぢや、互ひに口論の樣子を見れば、提掇ならぬ處に、面白味はあると、山僧は特に此商量に、遂に臨濟が門

前拂ひに逢ふて、悄々として、歸つた處を、賞美す、面白いことぢや、又風に別調の中に、吹かるの機あり、爰らを能く承當せよ。

百九十五　眞如至節上堂

擧。眞如至節上堂。書雲佳節。無法可說。點向諸人。各自甄別。東是東弗于岱。西是西瞿耶尼。南是南贍部州。北是北鬱單越。莫把綠雲爲彩鳳。休將飛雪作楊華。

眞如將謂有長處。果然失照。吾這裏則不然。南北東西一等風。有法可說烏黑鷺白咄。

眞如至節の上堂ぢや、法の說くべきなきか、山僧は點向して、諸人に見せ樣が、東半球に、亞細亞、阿非利加、歐羅巴の三洲あり、西半球に、南北亞米利加あり、飯匙を以て、矩と爲す、勿れ管蠡を以て、海を挹むことを、休めよと、誰も隨分道へるが、此佛光の語を見よ、綠雲を彩鳳と、取り違へな、飛雪を楊花と、見違へるなと、此微細なることと、東山下の宗旨ならでは、斯うは道へぬぞ。

百九十六　大德五月旦上堂

擧。大德五月旦雨下上堂。霏霏梅雨洒危層。五月山房冷似氷。雪鬢老老大大。向諸人面前翻

筋斗。若人見得。拖泥帶水。

雪竇梅雨酒危層。五月冷似氷。悟後却似迷。大德拖泥帶水。若人見得。和身沒却。

此上堂は頗る向上の調ぢや。雪竇迷悟相返の頌ぢやが。霏霏たる梅雨危層に酒ぐ、五月山房氷よりも冷かなり。五月梅雨の氣候は、暑熱に近づいて、炎燥で無ければならぬに、山房は氷より冷かとは、天地の氣候が變じて、大信に乖く、悟が迷ひと爲つた樣なものぢや。大燈拈評して、雪竇は諸人の面前に向つて、筋斗を翻へす、若し此筋斗を翻した處を、見得せば、拖泥帶水ぢや、泥被つた上に、水を浴せられた本來面目より見れば、豈に啻に雪竇のみならんや、三世諸佛も、拖泥帶水ぢや、それで無ければ、衆生濟度は、能きぬぞ、悟が迷に返つた處に、味があるさ、迷ふて阿呆らしきことをせぬと佛の價直は無いぞ。

百九十七　王常侍訪臨濟

舉。王常侍一日訪臨濟。同師於僧堂前看。乃問。這一堂僧。還看經麽。師云。不看經。侍云。還學禪麽。師云。不學禪。侍云。經又不看。禪又不學。畢竟作箇什麽。師云。總教伊成佛作祖去。侍云。金屑雖貴。落眼成翳。又作麽生。師云。將爲儞是箇俗漢。

拈云。王常侍到于臨濟。只見溪回路轉。不知身在桃源。旣而入芳草鮮美落英繽紛之境。土人所言。匪夷所思。雖然常侍也是一隻眼。頭正尾正。且道臨濟末後一語。肯彼不肯彼。要見諸訛麽。赤土塗牛嬭。

王常侍一日臨濟を訪ひ、師と同じく、僧堂前に、看て云く、這の堂內に居る坊主は、看經するやと、金鎚影動いたぞ、師云く、看經せずと、寶劍光寒しぢや、是から已下が面白い、侍云く、經も又看ず、禪も又學ばずして大衆が、糊々大飯を喫して、箇の什麽をか作す、師云く、されば、にや、總に伊をして成佛作祖し去らしむ、面白い答へぢや、侍云く、金屑貴とすと雖も、眼に落ちて翳と成る、佛にも祖にも、成るが好いが要ざることよ、無瑕の此體を、傷だらけにするは、殘念ぢや、師云く、貴公は箇の俗漢と、思ふたに、豈に料らんや、坊主窘の王常侍ならんとは、の意ぢや、臨濟も尋常の棒喝は、出でなんだが、中々涅にすれども、細まずぢや、流石に常侍は、作家ぢや、他人ならば、大分手傷を負ふて、劍呑であらうに、此惡辣の關門を、無難に通過したは、美事なものぢや。

百九十八　雲門示衆

舉。雲門示衆云。乾坤之內。宇宙之間。中有一寶。秘在形山。拈燈籠向佛殿裏。將三門來燈籠上。

拈云。雲門提聲論中隱在陰界之中之一語來云。秘在形山。卽是拈死蛇而成活龍。韶陽新定之機。可謂爲人抽釘拔楔。山僧曾有頌云。皮膚脫落笻新出。鑠今星露碧琅玕。雪竇頌出一寶形山。明月蘆花君自看。頓放之處。雲門面目。一時露出。雖然莫道。秋月明暉。圓滿無缺。烏知太陰斑點。卽是他缺陷也。喝。

雲門云く、乾坤の內宇宙の間中に一寶あり、形山に秘在すと、此語を取り違へたらば、髑髏野に横はり、鬼哭啾々地ぢや、而して雲門爰に拈じ來たは、大に仔細あるぢや、形山に秘在する、一寶とは什麽、燈籠を拈じて、佛殿に向ひ、三門を將て、燈籠の上に來すと、是れは御勝手次第ぢや、燈籠を三門に上げ樣と、擂木で腹を切らうと、何んなことは、怎でも好い、只是れ一處、提撥し難い場がある、汗を見徹せねばならぬ、爰に韶陽新定の機あり て、東山下の暗號合と云ふも、之より出でたゞ、雪竇は此の示衆の、全體を頌了して云く、看々古岸何人か、釣竿を把ると、是れは任公子巨鼇を、釣らんとして、會稽山に踞して、彼の五十の犗を東海に投じて、釣る故事ぢや、雲門の示衆全然之に似たり、雲冉々は、古岸の風景を、水漫々限りない、景色ぢや、明月蘆花、君自から看よ、看たなら瞎ぢや、

百九十九　太平上堂

舉。太平上堂。僧問。牛頭未見四祖時。如何。師云。頭上戴靈龜。學云。見後如何。師云。靑布遮前。學云。未見四祖時。爲什麽百鳥銜花獻。師云。富與貴是人之所惡。乃云。西天二十八祖。也恁麽道。唐土六祖也恁麽道。天下老和尙也恁麽道。獨有太平不恁麽道。何故。寡不敵衆。且道。畢竟如何。妙舞更須知徧拍。三臺須是大家催。

牛頭未見四祖時。爲什麽百鳥銜花獻。富嫌千口少。見後爲什麽百鳥不銜花獻。貧厭一身多。山僧箇箇頭語。知而故犯。直饒罪過彌天。新赦咸放。又云。牛頭未見四祖時。爲什麽百鳥銜花獻。越王勾踐破吳歸。義士還家盡錦衣。見後百鳥爲什麽不銜花獻。宮女如花滿春殿。只今唯有鷗鵠飛。又云。老聃道。爲學日益。爲道日損。祖師何貴日損而斥日益。畢竟如何。許由臨岸洗耳。巢父不飲牛水。

太平の示衆ぢや、僧牛頭が、四祖に見ねざる時、百鳥花を銜んで獻するは、如何と問ふに、師云く、富と貴とは、是れ人の欲する所なり、學云く、見る後ち什麽となして、百鳥花を銜んで獻せざる、師云く、貧しきと賤しきとは、是れ人の惡む所なり、面白い、前賢未言の語ぢや、牛頭の境界を、見盡したり、是れが見ねば、祖門の內に、入ることならぬぞ、又云く、西天の四七東土の二三、また恁麽に道ふ、天下の老和尙も、亦恁麽に道ふ、獨り太平

のみありて、恁麽に道はず何が故ぞ、寧は衆に敵しがたい、大勢には少數とは及ばぬと、嗚呼面白い、五祖の五祖たるは、爰ぢや。

二百　虚堂除夜小參

舉、虚堂除夜小參、去年貧未是貧、守株待兎、今年貧始是貧、認賊爲子、去年之貧、無卓錐之地、癩狗繫枯樁、今年貧錐子也無、和賊納款、與麽與麽、三百六十日、循環不已、不與麽不與麽、七十二候、去復還來、抱橋柱澡洗、底到底不知、依舊晝胡蘆底、轉增妄想、直饒輥到結交頭、依舊眼睛烏律律、報恩莫有方便麽、卓拄杖、皇天苦屈、

報恩除夜、癩兒引伴、想起香嚴舊債、湊湊鬪鬪、只是鬪貧而不鬪富、未免傍觀者醜、畢竟計算看來、欲理債窮而也添新債、遂至自叫皇天苦屈、噓、

除夜小參の示衆は、香嚴擊竹、第二頌を、虚堂毎句に、下語したのが、面白い、去年の貧は、まだ妄想を除かうとした、恰かも株を守つて、兎を待つに同じ、今年の貧は、從前識神を認めたは、賊を認めて子と爲すのぢや、去年の貧は、卓錐の地あり、癩狗枯樁に繫がる、見惡いぞ、今年の貧は錐も無く地も無し、賊に和して一文も取らぬと、白狀した、祖宗門下は、兎角貧を賞して富を斥ぞけ、世間と反對なるは、何ぞや、是れが面白い處ぢや、貧の頂上に達し、錐もなく地も無きに至らねば、諸佛の秘密藏は、手に入らぬぢや、如是貧修行の終點は、結交頭にして、此臘月三十日、恁ぢやと云へば、舊に依て眼睛烏律律として居る、而已ぢや、乃公も拄杖を卓して、皇天苦屈、泣くより外は無いと、爰で虚堂を拜め、

二百一　眞如直下是

舉、眞如上堂、直下是、不得動著、靠拄杖下座、

瑞阜卽不然、直下不是、直下不是、噓、下名言、錯錯、噬臍不及、

直下是直下是、本來其儘ぢや、地獄は地獄、餓鬼は餓鬼で、好い、必ず瑕を生るな、動著するといを得ざれ、ゴキ散かさぬが、好い、拄杖に靠りて下座、面白い示衆ぢや、何處が面白い、直覺的直下に見、直下に聞けと、云ふが、好い、祖門に此手段無ければ、敎家と異は無い、知解分別で、往くことならば、達磨は西來は要せぬ、直下直覺、是れ諸佛の秘密ぢや、

二百二　龍寶解夏小參

舉、龍寶解夏小參、四月十五、一衆無端、投入牛角、東西不辨、南北不分、七月十五、諸人快活、解開布袋、脚頭脚底、通霄有路、萬里無寸草、抖擻多年穿破衲、出門便是草、襤衫一半、逐雲飛、有

佛處不得住、舜無卓錐地、無佛處急走過、禹無十戸聚、直得把住放行、觸處現前、擡搦袞貶、隨物作主、正與麽時、龍寶別有賞勞在、拳拂子云、西風一陣來、落葉兩三片、

龍寶和尚、把放袞貶、隨物作主、底則大好、而賞勞只是落葉兩三片、何其甚輕、吾這裏卽不然、洞山石霜、趙州龍寶、一串貫通也、奚說有佛無佛、門內門外、且道、離家舍不在途中、底作麽生道、白草城中春不入、黃花戍上鴈長飛、

是れ龍寶解夏小參の提綱下語體ぢや、四月十五、一衆端なく、牛角に投じて、東西南北、眞黑暗になつて、無分曉ぢや、七月十五、諸人快活、もう吾物に爲つたと、脚底清風を起す、萬里無寸草、抖擻多年の穿破衲、門を出れば、便ち是れ草、襤褸一半は、雲を逐て飛ぶ、有佛の處、住するを得ず、舜に卓錐の地なし、無佛の處、急に走過せよ、禹に十戸の聚なし、如上の件々を、領會したらば、直に把住放行、觸處其場々々で働らいて、現前するを得、擡搦袞貶、物に隨つて、主と爲り、正與麽の時、龍寶別に賞勞の在るあり、拂子を擊つて、西風一陣來、落葉兩三片、龍寶廣大の供養、今夏の賞勞、虛しからず、末後醍醐の珍膳に逢ふ、敢て之を謝す、

二百三　興德布白沙上堂

舉、興德法堂前除青草布白沙、上堂、若是一向舉揚宗乘、固是法堂前、青青離離、未免咬定牙關、放一線道去也、卓拄杖云、只這些兒得人憎、且古亙今、無變易、啞、無端撒沙、撒土了、擡拄杖、下座、

大小大興德、淨地上撒白沙、只是少矣、惜哉不到埋沒興德、這些兒無變易、古往今來人、皆成窠窟、吾這裏眼裏耳裏、帶來埃塵、瞎却聖凡、便寸步不能行、何者把住法堂前無寸地、放一線道、矢上更加矢、

是れは大應國師、筑前姪濱興德寺、本堂前に、白沙を撒布した慶讚上堂ぢや、若し一向に把住せば、法堂前草茫々として、牙關を咬定し、沈著として、坐するより外はない、然しながら、一線道を、放つときは、拄杖を卓して、只是の些子、人の憎みを得たり、古も今も變易は無いのは、是れぢや、啞口が蹉過た、大分汚穢い、沙や土を撒布した、ゑゝゑ、詮方がない、もう徐々下りやう、ぢや、拄杖下座、這の白沙を撒布した、一線道を放つ處が、大應の手段ぢや、斯うなくては、面白くない、把住するときは、凡聖の眼を瞎却して、寸歩も歩ませぬが、放行せば、自在自由ぢや、雲行き雨施こし、鐵樹花開いて、別に春が來るぢや、此按排を、能く手に入れよ、

二百四　五祖牛過窓櫺

舉。五祖演和尚云。牛過窓櫺頭角四蹄全出。尾巴爲甚出不得。龍寶拈云。五祖老子。只見其出底。不見其不出底。何故。何官無私。何水無魚。

瑞阜卽不然。五祖出底打著。不出底打不著。山僧只愛其過底頭角。而不愛出不得尾巴。且道。出底是乎。不出底是乎。知以可及愚也。不可及。畢竟如何。孟之反不伐。奔而殿。將入門。策其馬曰。非敢後也。馬不進也。

這は是れ、大燈國師の、解夏賞勞の供養ぢや、五祖演和尚云く、牛窓櫺を過ぐ、頭角四蹄全く出づ、尾巴甚と爲してか、出ることを得ざる、怎んな牛ぢや、胴體全然、窓櫺を出でたか、尾だけが、内に殘つて出ることが能きぬ、怎んな尾巴ぢや、定めて世界を包裹する底の、ものであらう、何にしろ、珍らしい牛が、出たそこで龍寶も、餘りの美事さに驚きて、拈評を下したぞ、所れは五祖無理ぢや、尊公は只其出ることを、而已を見て、其出でない底を見ないからぢや、是れ什麼、怎麼、拗捩ものは無いぞ、又云く、何故ぞ、何れの官にか、私無からむ、何れの水にか、魚無からむ、愛で大燈に、相見せよ、斯んな人は、世界中に二人と有るまい、素よりさ、日本の達磨ぢやもの、此語を見たら、如何な五祖も驚いて、折角出しかけた尾巴を、納入ねばなるまいぞ。

二百五　佛光臘八上堂

舉。佛光臘八上堂。明星一見轉添疑。畢竟蒸沙不療飢。爭似儂家伸脚睡。從教華發向南枝。

釋迦老子。一見明星。將謂有多少奇特。果然失照。眞如以爲蒸沙不療飢。瑞阜卽不然。醉後添盃。

臘八上堂。明星一見してから、悟つたと云はれるが、胸中は三毒五欲だらけだ、畢竟何を悟られたぞ、何の益にもならぬぞ、お釋迦が悟つたと云ふ間だに、乃公は脚を伸して睡る哩。それの方が、勝れてある。南に向つた梅花は、先きに發くとか、まだ開かぬとか云ふも、搆はぬが好い、然れども、山僧は然らず、茶は再請なく、酒は巡添を要す。

二百六　疎山示衆

舉。疎山示衆。老僧咸通年已前。會得法身邊事。咸通年已後。會得法身向上事。虛堂拈云。古人明修棧道。暗度陳倉。山僧端平二年。住此山。牽長補短。隨分過時。若是法身邊事。巢父飲牛。許由洗耳。

淨法界身。徧滿圓照。仰瞻有餘。雖然佛面不喜數見。何故。初筮吉再三瀆。咄。

道は是れ、疎山の因位修行地に就て、經驗を述懐したのぢや、一超直入如來地なれども、多年の長養で、熟練せねばならぬぢや、理は頓に悟り、事は漸に除く、疎山も末後、法身向上の事を、會得したのは、老年の事ぢや、そこで虛堂の道底は面白い、古人も表面には、棧道を修めて、恭順の裝ひを見せたが、裏面では、陳倉の糧食を、運搬して居るとあり、乃公も端平二年に、此山に住して、貧乏寺ぢやから、彼の有餘を以て、此の闕漏を補なひ、分限相應に、時を過したが、疎山の樣に、何處までも、執念は無い、法身邊の事は、實に他いて仕舞ふた、穢らはしい、聞くも嫌ぢや、許由が耳を洗へば、巢父が牛に、飲せなんだと云ふ、法身は、御免々々と、本意は只、是れ之を、道いたい而已で、前言は戲むれであるぢや、氣の毒なは、疎山和尚ぢや、好い餐出しに、使はれた哩。

二百七　太平上堂

舉。太平上堂云。山僧今日。將山河大地。盡作黃金。凡該有情無情。總令成佛去。然後太平不入者保社。何故。爭之不足。讓之有餘。

太平不入者保社。太高生。山僧即不然。但有路可上。更高人也行。何故。狗不擇家貧。兒不嫌母醜。

是れは、五祖の語言三昧ぢや、乃公は今日、此山河大地を將て、盡とく黃金と作さしむと、五祖所れは、能きまするまい、矢張り瓦礫は、瓦礫で好い、別に黃金とする、必要は無い、凡そ有情無情、人畜蝟飛蠕動、草木瓦礫、總に成佛し去らしめて、太平者の保社に入らぬと、吾儘な和尚ぢや、五祖爲公、所れは何故であるか、詰まり之を爭ふに足らず、之を讓るに餘りあり、と、滯には短かし、襟きには長しで、彼是れするに及ばぬと、爰ぢや、これが面白い語ぢや、宗旨も恁麼に、自由に働らかせねば、向上の眞味は、失せて仕舞ふ、斯ういふ活潑々地の宗旨を、拈弄せられたるは、五祖からぢや。

二百八　趙州至道無難

舉。僧問趙州。至道無難。唯嫌揀擇。是時人窠窟否。州云。曾有人問我。直得五年分疎不下。

拈云。趙州嘗云。老僧不在明白裏。是汝還護惜也無。僧問。既不在明白裏。護惜箇什麼。州云。我亦不知。又云。問事即得。禮拜了退。凡州機辯自在。恰如鞭于駿馬而下。坂。至此便云。曾有人問我。直得五年分疎不下。阿轆轆地。百千諸佛。亦不能抓手。雪竇道。無味之談。塞斷人口。山僧則不然。醍醐上味。一飽能醫萬劫之飢。矣。蓋趙州開口則見膽。曰天上天下。唯我獨尊。

曰、田厚奴。曰、何不引盡這話。曰、只這至道無難。唯嫌揀擇。皆答這話。猶水上葫蘆子。觸著則浮。捺著則轉。爍迦羅眼。欲看則電閃星馳。烏飛兎走。卷舒在手。殺活臨機。使人不能端倪。他唇皮口吻禪。走殺天下人去。咄。南泉嫡子。趙州古佛。

圓悟云く、趙州平生、棒喝を行せずして、用ひ得て棒喝に過ぎたりと、所謂唇皮口吻頭の禪は、臨濟德山より、勝れたることあり、此至道無難の則は、趙州幾度も拈弄して、就中這般の舉示、尤も近傍すべからざる處あり、箇の僧問ふ、至道無難と云ふも、早や時人の窠窟、箱手ぢや、州云く、曾て人ありて、乃公に問はれたる者が、有つたが、五年も經が、今に乃公も、答話を思ひ付かぬと、す鐵人を殺すと云ふか、白拈賊か、此答話は、三世の諸佛も、倒退三千ぢや、雪竇も箇の僧の問處、至道無難唯嫌揀擇は、時人の寢處で、御座りませうと、切つて掛つたを、象王嚬呻と、美めて云ふたぞ、そこで趙州は、五年分疎不下と、答へたは、獅子哮吼ぢや、酸い甘いも無い、無味の談ぢや、天下の人の舌頭を、坐斷したぞ、南北東西、烏飛び兎走ると、是れ什麼雪竇の名劒ぢや、三世古今を貫き、至道無難を、枉げ出した、金烏急に、玉兎速の樣子は、天地虛空、七顛八倒ぞ、斯ういふ名句は、雪竇の一振刀ぢや、擬議すれば、喪身失命するぞ、喝。

二百九　臨濟問杏山

舉。臨濟問杏山。如何是露地白牛。山云。哞哞。師云。啞那。山云。長老作麼生。師云。這畜生。智者見之謂之智。仁者見之謂之仁。然而臨濟驀向揮來鎁鏘。擬議不了。則頭已落于前矣。山河大地、人畜草木、悉皆を括つて、大乘露地の、白牛ぢや、臨濟は數理を持ち出して引掛けたぞ、そこで杏山は、どつこい、其手は喫はぬで、牛に成り濟して、哞々と答へた、師云く、啞公は啞那と、臨濟の恐しいは、爰に在るぢや、物に對して、稅を收めしむ、此自由自在なる働きは、及ばぬぞ、杏山そんなら、長老は、作麼生、師云く、這の畜生、是れ什麼、杏山洎乎に、危險であつたが、まァ無事で、助かつたぞ。

二百十　欽山一鏃破三關

舉。良禪客問欽山。一鏃破三關時如何。山云。放出關中主看。良云。恁麼則知過必改。山云。更待何時。良云。好箭放不著所在。便出。山云。且來闍梨。良回首。山把住云。一鏃破三關。卽且止。試與欽山發箭看。良擬議。山打七棒云。且聽這漢三十年。

拈云。主看賓。則常也。這箇公案。賓看主。良公一箭。射欽山胸。而的的分明。線路一絲不亂。不

妙奇特。山僧當時。若爲欽山。則待他恁麽。則知過必改。卽道。深謝子一箭。則良公亦首肯去。欽山云。更待何時。可惜許。蹉過了也。良公道。好箭不著所在便出。有越王勾踐破吳凱旋之勢。山云。且來閻梨已下。欽山既是敗軍之將。不可共語兵。故雪竇頌中。左袒良公。而不肯欽山在。蓋山粘皮貼肉。不能脫體。至這裏直饒棒如雨點。亦無所施矣。大丈夫先天爲心祖者。良公是也。

此の則は、諸訛、甚だ見難し、古來邪解、穿からざるは、蓋し尋常主が賓を見、師家が學者を撲するが、至當なるに、此の則は、良禪客の作家に逢ふて、欽山少し、狼狽した處あり、开れを圓悟も、欽山を扶け樣と、した故る、益ず節角諸訛、而倒になりたり、流石の雪竇は、電眼を以て、此の則を批判し、良公を謳歌して、欽山を扶けざるは、故あるなり、乃ち良禪客、欽山に問ふ、一鏃三關、鳥道玄路、展手を、破る時如何、山云く、开は先づ關中の主を、放出して看よ、其射手は誰ぞ、欽山好く拶したぞ、良云く、恁麽ならば、則ち過ちを知つて、必ず改めませう、此れ實に群を驚かし、衆を動かす、一千五百人の善知識の語と、鶴林も評した、山云く、更に何れの時を待たん、开れはいつ改めるなと、欽山蹉過了おや、良云く、好箭放つて、所在を著けすと、便ち出づ、果然射て、能く欽山の胴骨を貫いた、山云く、且ァ來い閻梨と、縱し良公來るも、欽山は奈何ともする、能はず、良首を回らす、欽山把住して云く、一鏃

破三關は、且らく止く、試みに欽山の爲めに、箭を發せよ看んと、爰で良公は、欽山を打つべきぢやが併し是から良禪客、風に別調の中に、吹かれたり、欽山胴骨を射拔かれても、まだ所望ぢや、良擬議は、美事なものぢや、一把の柳絲、收め得ず、烟に和して、玉欄干に搭在すとは、爰ぢや、欽山打七棒して云く、且らく聽して遣る、這の漢疑ふこと、三十年せよと、是れは、欽山屈棒ぢや、朝打三千、暮打八百も、益ないぞ、雪竇頌して云く、君が爲めに關中の主を放出す、此何は、良公の恁麽ならば、則ち過を知つて改むを、讃歎したぞ、放箭の徒、華鹵なること莫れ、參禪學道の士は、容易にする、箇の耳を捨れば、目雙瞽するは、甚だ揑怪の語ぢや、上の良公、恁麽ならば、過ちを知つて、必ず改たむと云たが、雪竇賞翫の餘り、云はんかたなさ、切めて見んと了すれば、眼聾し、聞かんと了すれば、耳亦瞽すと、箇は鳳金網を離れ、鶴籠を脫する處を、知らねば解せぬ、無功用の場ぢや、目に見れば、耳は不在となり、憐むべし、一鏃破三關的々分明なり、箭後の路とは、百發百中、幾回射ても、逆はぬ箭路があれども、人が知らざるなり、佛祖些子の大事を、專來したぞ、君見ずや、玄沙言へることあり、大丈夫天に先だつて、心の祖と爲るとは、良公の謂にして、一鏃で三關を破るも、亦これぞとなり、此頌絕唱、雪竇椽大の筆は、此等を以て、見るべし。

二百十一　太平不會禪

舉。太平上堂云。太平不會禪。一向外邊走。臘月三十日。贏得一張口。且道那箇是太平口。自云。兩片皮也不識。

季咸相壺丘子。隨日現變相。至第四日。失術。而不能相。太平亦不能相矣。雖然山僧早識。倆坐在這裏。而成活計。如何是他坐在底活計。道不會禪。道外邊走作。道兩片皮也不識。咄。羅籠不肯住。謂之東山老人。吾不識伊。

咄哉五祖老漢。禪を會せず。只外邊に走る。爾う云ひいて。什麼も會したこと無いと云ふは。合點ぢや。怎んなが太平の口か。自から云く。兩片皮も。また識らず。此横着もものめ。斯う傍若無人に。働かれる者でないぞ。此の宗旨を自由自在に。揑ね廻はす活機用を見よ。

二百十二　報恩年年是好年

舉。報恩正旦上堂。年年是好年。日日是好日。爲甚有新有舊。若道箇隔手句子。許倆鐵輪峯頂翹足。大洋海底算沙。不然野火燒不盡。春風吹又生。

山僧即不然。頒曆有新有舊。年年日日。吉凶交錯。吾皇正月。正當陰曆冬十二月。賀正一句作麼生道。元正慶祚。萬物咸新。若有人問其節如何。臘雪連天寒。春風未入戶。嘆。

是れは虚堂。元旦の上堂ぢや。年々是れ好年。日々是れ好日で看よ。全然枉げ出してある。吹毛截れども入らず。甚に因て今年の新あり。去年の舊ある。若し隔手の句子を。道得せば。汝に許す。鐵圍山に脚を翹て。海洋底に。沙を算することは。自由に働かれるであらう。若し隔手の句を。得ざれば。野火がどれ程燒き盡すも。春風が吹いて來ると。又芽が生へると。是れ什麼。斯んな句が。衲僧朝の間の。茶の子ぢや。虚堂錄にも。斯んな裁切らぬ。上堂もある。一概に皆好いと。云へぬぞ。

二百十三　眞如佛涅槃上堂

舉。眞如佛涅槃上堂。當年不合手摩胸。累及兒孫。赤骨窮。只箇死屍無著處。至今紅爛百華叢。

世尊以手摩胸。今有明無語太窮。莫道春風薪火滅。年年二月百華紅。

眞如佛涅槃上堂は。いつも面白いが。爰にまた名劍が出たぞ。當年不合に。手づから。胸を摩で。噫苦しい〳〵と。是れが見ねると。已下は注脚ぢや。累らひ兒孫に及んで。赤骨窮と。は。詮じ詰たと。云ふことぢや。先祖の餘殃が。兒孫まで祟つて。赤裸々に爲りて。詮じ窮ま

つた所れは所れにした處が箇の枯骨頭は怎へ片付たものぢや埋葬の場がない今に至るまで年々二月になれば百華叢々柳は綠りに花は紅ゐぢや是れ什麼藏す處は無いが面白いことぢや。

二百十四　大德上堂面前打筋斗

舉。大德上堂。昨日有人。面前打筋斗。今日有人。背後問訊。似親非親。似疎非疎。爾等諸人作麼生辨別。

崔顥長干行詩云。君家住何處。妾住在橫塘。停船暫借問。或恐是同鄉。親果可信乎。廉頗與藺相如。爲刎頸之交。怨却爲親。怨乎親乎。山僧不識。昨日人あり。面前に筋斗を打す。無禮極まるも。叱られぬ。今日人あり。背後に問訊を作す。親切に似て。賞められぬ。汝等諸人。作麼生か。辨別せん。何處が親か。何處が疎か。此上堂見た處は。何處にも。取り柄が無いが。扨て又總體より詠めて見れば。面白くて。實に堪へられぬ味がある。斯ういふ頓放の處に。妙を得たるは。大燈のみぢや。虛堂佛光も及ばぬ。日本の達磨と稱せらるゝも。溢美ではない。

二百十五　雲門聞聲悟道

舉。雲門示衆云。聞聲悟道。見色明心。興德拈云。築著磕著。無處回避。觀音菩薩買胡餅。放下手元來是饅頭。興德云。只這些子說話。多少人妄生卜度。殊不知。兎馬有角。牛羊無角。會得底眸終一夏。不然更有九旬禁足在。

雲門示衆。明投暗合。興德拈語。暗投明合。會得九旬。我爲法王。於法自在。若也不會。無繩自縛。會與不會。都來是錯。何故。只爲分明極。却使所得遲。

雲門示衆に云く。聲を聞き。道を悟り。色を見て。心を明らむと。大應拈して云く。築著磕著。回避する處なしと。山僧云く。直に見直に聞き。一見便ち見て。一聞便ち聞く。此外に何をか覓めん。世人見る者のものになり切らず。聞く者のものになり切らず。故に能と境と。境と能と。常に隔てを爲す。親切ならんと要せば。雲門の後語を見よ。觀音菩薩。胡餅を買う。手を放下して。元來是れ饅頭。呵々。雲門は事上に將ち去り來りて。些の理會なし。大應は兎馬角あり。牛羊角なし。會得せば。兩彩一衆。

二百十六　大燈佛成道上堂

舉。大燈佛成道上堂云。澄月映徹。衆星燦朗。箇中無釋迦阿誰當成道。卓拄杖云。屎上更加尖。

楂特匪險。明星匪朗。可憐下山客。眼裏點塵埃。若人識得。彌勒不前。釋迦不後。

清寥々白的々。これを悟ると、地獄に入る。箭の射るが如し。澄月映徹。衆星燦朗。當年錯まつて、山を下り。剛て見性悟道と說き。知つて故らに犯す。咄己が欲せる所ろ人に施すこと勿れ。拄杖を卓して云く。屎上に更に尖を加ふ。山僧著語して云く。拈了也。

二百十七　眞如上堂有時行不在說處

舉。眞如上堂。有時行不在說處。有時說不在行處。有時行說處。有時說在行處。堪笑西來碧眼。至今不會轉身。

老胡不會轉身。則且置。眞如行到說不到。山僧卽不然。行說俱到。行說俱不到。何故。行到說不到。說到行不到。三段不同。收歸上科。

眞如老漢好笑々々。山僧は疾く勘破了也。行は說處に非ず。說は行處に非ず。行說俱に在り。行說俱に在らず。勘破了也。西天の碧眼轉身を會せざるは。且らく置く。眞如も亦身を兼て。其中に在り。勘破了也。

二百十八　報恩上堂春風如刀

舉。報恩上堂。春風如刀。春雨如膏。衲僧門下。何用忉忉。

錯錯。一言既出。觸鈇諱了。倘若翻款。罪過彌天。

春風は刀の如く。春雨は膏の如し。衲僧門下。故らに忉々たり。大小大の報恩。毛を吹て疵を求む。咄。

二百十九　五祖掘涌漢

舉。五祖上堂云。太平掘涌漢。事事靈經徧。如是三十年。也有人讚歎。且道。讚歎箇什麼。好箇掘涌漢。

太平掘涌。有人讚歎。果然重賞下。必有勇士。吾這裏不然。讚也不得。謗也不得。如是三十年。贏得鬢絲齒疎。雖不及五祖。也勝盧能。

五祖掘涌漢。三十年來。事々に經徧したで。少しは見處があるかと思へば。相變らず掘涌の漢ぢや。貴きことは。金壁の如し。賤しきことは。泥土の如し。好箇の掘涌漢と成れぬぞ。是れが五祖の價直ぢや。諸人學んでも。中々及ぶことではないぞ。咄。

二百二十　道吾漸源吊慰一家

舉。道吾與漸源至一家吊慰。源拍棺云。生邪死邪。吾云。生也不道。死也不道。源云。爲什麽不道。吾云。不道不道。回至中路。源云。和尚快與某甲道。若不道。打和尚去。吾云。汝即任打。道即不道。後道吾遷化。源到石霜。舉似前話。霜云。生也不道。死也不道。源云。爲什麽不道。霜云。不道不道。源於言下有省。源一日將鍬子。於法堂上。從東過西。從西過東。霜云。作什麽。源云。覓先師靈骨。雪竇著語云。蒼天蒼天。源云。正好著力。太原孚云。先師靈骨猶在。

拈云。道吾對漸源。蒲萄葛藤。源不會。却到石霜。一場懷懼。後來源將鍬手。於法堂上。從東過西。從西過東。霜云。作什麽。源云。覓先師靈骨。也是可憐之漢。霜云。浩波浩渺。白浪滔天。覓什麽先師靈骨。可惜許。醜死馬。何益。何不與本分草料。雪竇著語云。蒼天蒼天。源霜二人。一坑埋却。太原孚云。先師靈骨猶在。老僧舍利滿天地。莫向空山拾死灰。雪竇頌出許多葛藤。山僧亦作一頌。秋天曠野行人斷。焉首西來知是誰。靈骨由來何處覓。龜毛兎角見機遲。咄。漸源は道吾の侍者で、道吾と共に、一家に往て吊慰す、佛は不生不滅と、說いたが、此死人は、生か死かと、早く既に生死の二途に渉る、且得沒交渉ぢや、然れども、道吾は甚だ慈悲

が深い、怎かして濟度し遣らんと、思ふた故に、生もまた道はず、死もまた道はず、盤に和して托出す、夜明珠ぢや、源云く、什麽として、道はざる秘して云はぬかと思ふた、吾云く、道はじ道はじ、此丈けに餘つた親切を見よ、然るに途中に於て、源云く、和尚快よく、道ふて下され、若し道はずんば、和尚を打ち去らん、吾云く、打つは即ち、打つに任かす、道ふは即ち、道はず、道吾は、法を惜むに非ずして、人を惜むぢや、點滴も施さぬは、大慈悲ぢや、問ひに對して、道はじ〳〵と、云ふに至つて、源始めて、從前の錯會に、氣が付いた、鈍漢ぢや、一日鍬子を將て、東より西に往き、西より東に過ぐ、霜云く、什麽を作す、源云く、先師の靈骨を覓む、遲八刻ぢや、葬車後の藥靈とは、これ彼處も、先師の骨だらけぢや、河頭に水を賣る樣なことをするぞと、石霜手緩い、雪竇忍後不禁、著語して云、蒼天々々、源云く、いかさま尊公の說で、少しく力を得たりと、太原孚云く、先師の靈骨猶在り、面白い、寒毛卓竪する語ぢや、そこで、雪竇の頌は、無類の名作ぢや、什麽と道ふぞ、兎角あり、牛羊角なし、成る程讀めた、生も亦道はじ、死も亦道はじ、爰ぢや、毫を絕し、釐を絕す、根切り、葉切り、佛でも、違ふ祖でも、違ふぞ、并れかと思へば、山の如く、嶽の如く、前にも後にも、滿ち〳〵てある、黃金の靈骨、今猶在り、其靈骨は、怎ぢや、

白浪滔天何れの處に著けん何處も彼處も一盃片付け處はない既に片付け處は無い隻履西に歸つて曾て失却す逐麽どのが西天に歸る途中で履一隻を失つたさうだ是れは講釋では不可ぬ人々力量で見よ失却の二字が大事ぞ恁麽の頌は字々句々蛇の針ぢや觸れば轉ち直に人を刺すぞ前來道吾漸源の則も雪竇の頌で分明になる能く吟味して咬み出せ。

二百二十一　太平撮土爲金猶容易

舉太平上堂云撮土爲金猶容易變金爲土却還難轉凡成聖猶容易轉聖成凡却甚難何故誰肯屈尊就卑且道不凡不聖一句作麽生道乃云不得教壞人家男女

太平道什麽變金爲土何足爲難直教枯木放花開轉聖成凡却是易易抹土塗灰笑滿腮不凡不聖一句作麽生道非難非易也難也易進則下化衆生退則上求菩提此上堂向上に拈提したぞ大聲俚耳に入らぬ下士は道を聞て笑ふ土を撮して金と爲すは誰でも能きる是れは向去底ぢや一旦の見性骨折りさへすれば瓦礫を將て黃金と變ずる境界は手に入るか金を變じて土と爲すは却つて難い是れは劫來底ぢや悟りの場を離れて無中に路あり塵埃に出る爲人濟度は中々容易では無い淨土門の遠

相回向は彌陀の願力ぢやなぜ向去底の轉凡作聖は易くして却來底の轉聖作凡は難いぞ五祖は什麽と道ふぞ誰か尊を屈して卑に就く王侯貴人は滅多に下賤の者に辭を下げぬと箇の老賊めまだ吐かすか且く道へ凡ならず聖ならず一句作麽生乃ち云く人家の男女を教壞すること得ざれと是れ什麽此白拈賊を捉敗したらば此則は可け樣下手に人家の男女を魔魅すまいぞと五祖の面つきを看よ山僧は從來這の和尚を好ぬのは恁麽な戲談を云ふからぢや忍まくしい。

二百二十二　虛堂四百四病

舉虛堂上堂人間四百四病病有藥唯有毛病難醫直饒善財信手拈來也只對病與藥要且不得無病之藥且作麽生是無病之藥卓拄杖先要忌口

無病之藥先要忌口咄口有何過山僧卽不然肥從口入肚皮須要於大身體須要於富若

夫毛病從煩惱起何難醫之有曰貪瞋痴遲擬則蹉過急急如律令

這は是れ重午の上堂例の應病與藥の事ぢや人間の四百四病は夫れ〳〵對治の藥があるが毛病の妄想分別は藥が無いで醫し難い直饒善財が手に任せて一莖草を拈じ來つたとて病に對して藥を與へるのみぢや要且つ無病の藥を得ぬぢや無病の藥と

は、怎ぢや、卓拄杖、先づ口を忌め、食が大事ぢやと、此白拈賊め、爰で虚堂を、把つて占めよ。

二百二十三　眞如浴佛

舉、眞如浴佛、兼諸山及道舊至、上堂、叟手指天、叟手指地、有佛無我、有我無佛、眞如五逆不成冤、又得諸公下痛拳。

眞如浴佛、與諸山道舊、得下痛拳、而猶不浴得、初生瞿曇、因甚浴不得、有佛無我、雖然有我無佛、瞿曇也可憐一籌、而眞如不著便、兩兩三三、太無面目、山僧傍觀、扼腕切齒、何故、當斷不斷、返招其亂、咄。

眞如浴佛會に、道舊知音が來、山に就て、の、上堂ぢや、今日はお釋迦は、叟手は天を指し、叟手は地を指して、天上天下、唯我獨尊と、唱へられた場には、釋迦一人ありて、乃公は無い、乃公が天上天下を、唱へると、御前は、そこに居られまい、眞如も、五逆の罪人ぢや、乃公が、唯我獨尊を、唱へると、佛祖一人も、助かるものは、無い、然しながら、今日はお釋迦に、對して、冤はしない、況して諸山の、諸老和尚が、見て、夫れ〳〵痛拳で、浴佛會を、營む、故に乃公は少しは、差し控へやう、佛光の面つきを、看よ、鐵の皮三枚、張りぢやぞ。

二百二十四　大燈日日日東出

舉、大燈除夜小參云、日日、東出、日日、西入、一出一入、自循環、逗到臘月三十日、村裏打祭鬼鼓、山塢唱樂神歌、人人帶淳素之風、箇箇稱太平之時、況衲僧家、半夜見日頭、阿誰辨新舊、只管大坐當軒、眼眼相照、分歲、雖然荒涼、不烹鳳髓、其中清味、勝他金粟、何故、擊拂子云、雪寒北嶺、梅香南枝。

大燈國師、分歲供養、北嶺雪、南枝梅、清味勝他金粟、好箇珍饈、幸見分、我一杯羹、則可矣、脫或不爾、猶有染指於鼎者矣。

這は、是れ、大燈除夜の、小參ぢや、日日、日は、東に出て、日日、日は西に入る、是れで、偏正、回互の、樣子を、看よ、半夜に、日頭を、見、日中に、午夜を、打するも、是れから、ぢや、一出一入、自から循環して、臘月三十日に、到り、村裏に、儺鬼を、打し、山塢に、樂神の、歌を、唱ふ、人々、淳素の、風を、帶び、「べーい」箇々、太平の、時を、稱す、「べーい」況して、衲僧家、半夜に、日頭を、見る、珍らしく、は、無い、阿誰か、新舊を、辨せん、鬼家の、活計ぢや、只管に、大坐、軒に、當り、眼々、相照して、分歲す、然れども、荒涼にして、鳳髓を、烹すと、雖も、なぜ、御馳走せぬ、咨、商家、其中の、清味、他の、金粟に、勝れり、貪け、惜み、こんな、物を、食ふたら、毒に、中たる、死ぬぞ、何故ぞ、擊拂子云く、雪は

北嶺に寒く、梅は南枝に香し、此方のお家を詠むれば、白き鼠が三つ走る節季ぞろ〳〵。

二百二十五　興德上堂結夏已十日也

舉。興德上堂。古者道結夏已十日也。水牯牛作麽生。又云。結夏已十日也。寒山子作麽生。抑逼人作麽。興德則不然。結夏已十日也。但是飢喫飯熱乘涼。且恁麽過時。何故。智者見之謂之智。仁者見之謂之仁。

拈云。且道。古人底與興德底。作麽生商量。古人把住。興德放過。山僧卽不然。把放俱不得。何者結夏已十日也。水牯牛年不既爲少。前程八十日也不爲多。畢竟如何。朝三暮四一何少。暮四朝三何太多。

若し山僧に、結夏已に、十日なり、作麽生を問はゞ、薰風南より來り、殿閣微涼を生ずと道はん、者箇の時節、惜むべし、何が故ぞ、水牯牛、水草を逐ふて、未だ飽ざる、寒山子、掌中の珠を、失却して、知らざる、日日、日は東に出て、日日、日は西に入る、若し夫れ既往を送り將來を算するあらば、國に憲章あり、三千條の罪、噫嘻、山僧興麽の話、却つて古德に、相見の分ありや、若し無きも笑ぞ憾みとするに足らん、何が故ぞ、今得る無きも、本より損無ければ なり。

二百二十六　龍寶無伎倆

舉。大德上堂。龍寶無伎倆。只是不喪目前機。忽得冰消雪霽。自然見梅腮柳面奇。喚之以作禪道佛法處處春山應聽子規。參。

瑞阜多伎倆。老來懶於出門。只管大坐當軒。最愛夏日長。況復雨過多奇。峯花謝樹無影。噫。蹉口幾乎觸諱。

此上堂。向上に拈じ來つて等閑に一鉤を下した浮かとすると、箱手に掛るぞ、龍寶伎倆なし、只是れ目前の機を喪はず、此二句が、手に入れば、下の句は、自から領解するぞ、段々と陽氣に爲つて、冰も解け、雪も霽れると、此方の能から、境を照さずとも、自然に境が來つて、能を照し、梅腮柳面の奇なるを見る、之が禪道でも、佛法でも無い、さア〳〵、處々の春山、花謝して、子規が啼く樣になつた、游山翫水に、出掛け樣と、大燈國師、中々横着な、手品ぢや、標題を出して、一鉤に釣り上げて、遂々諸人の、巾着を奪つて、仕舞ふた、油斷すると、赤裸々に剝奪せらるぞ。

二百二十七　眞如結夏小參

舉。眞如結夏小參。今夏與諸人。同此結制。有四件事。奉告諸人。第一不得進前參。第二不得退後領。第三不得者邊來。第四不得那邊去。坐但坐行但行。飢則同飯。臥則同牀。一任金鷄啣粟。且無鼠糞汙羹。因甚如此。卓拄杖。薰風自南來。殿閣生微涼。

眞如四件事。是則是只是衲僧家常茶飯。坐臥行食。亦奚要豫期焉。若夫金鷄啣粟。鼠糞汙羹。則家中大事。何者千里隄防。決於蟻穴。防微杜漸。茲可矣。畢竟如何。在舍只言爲客易臨淵方覺取魚難。

眞如結夏小參。四件の事。嚴正なる制規ぢや。第一第二は謹んで命に從がひませう。第三第四は。御免蒙りませう。坐は但坐し。行は但行し。是れも少々困りまするで。御免下されませう。飢れば則ち同じく飯し。臥すときは。則ち同牀と。是れは大贊成で御座る。金鷄粟を啣むに一任す。是れも異論はない。且つ鼠糞の羹を汚がすなし。是れは心得ましたか。鼠糞が汚がしたときは。百年一返。怎も悔ゆとも及びませぬ。まア眞如の命令は。半分は服從したが。半分は不肯諾である。然りと雖も。卓拄杖。薰風南より來る。殿閣微涼を生ず。あア涼しい。これで汗も消した。あア涼いことで御座る哩。

二百二十八　玄沙問鏡清

擧。玄沙問鏡清云。不見一法是過患。汝道不見甚麽法。清指露柱云。莫是不見者箇法麽。沙云。浙中清水白米從汝喫。佛法未在。虛堂云。也好莫是兩字會麽。寒雲抱幽石。霜月照清池。

不見一法是過患。湘潭雲盡暮山出。巴蜀雪消春水來。清指露柱云。莫是不見者箇法麽。樹呈風體態。波弄月精神。浙中清水白米從汝喫。佛法未在。莫道佛法未在。達磨不會禪。夫子不知字。

箇の上堂は。微細な穿鑿で。玄沙が鏡清に問て云く。一法を見ざる。是れ大過患と。汝道て見よ。甚麽の法を見ざると。鉤を撓て鏡清を搭索したぞ。清露柱を指して云く。是れ者箇の法を見ざると。莫しや。此に柱は在れども。乃公の目から。蟻の鬚一本も無いぞ。一法を見ずと云ふのは。是れぢやとなり。沙云く。浙中の清水で。白米を養て喫するは。汝の腹一盃に任かすが。佛法は未在。解らんぞとなり。之を應庵は。鏡清は放頑で。佛祖も亦奈何せず。若し玄沙が來風を辨ずるに。非ずんば。幾と露柱に。呑まれて。仕舞ふと。拈評したぞこで虛堂云く。鏡清の莫是の兩字が。解するや怎ぢや。後の鉢取りが。善くない。故に玄沙に。非難せられた。露柱を指したは。不可ない。そんなら怎ぢや。乃公なれば。寒雲抱幽石。霜月照清池ぢや。嗚呼面白い。これで此。則は。活きて來た。流石の虛堂ぢや。斯ういふ句は。容易に出る者でないぞ。

二百二十九　太平淺聞深悟

舉太平上堂云。淺聞深悟。深聞不悟。爭奈何。獻佛不在香多。淺聞深悟。驢覷井。深聞不悟。井覷驢。獻佛不在香多。茫茫滄海。浪打石頭。畢竟作麼生。打破鳳林關。著靴水上立。咄。

淺く聞て深く悟る、無字を見たり、隻手を聞いた、當體は深悟ぢや、然しながら、まだ是れ、功勳邊の事で、悟りの臭味が除けぬ、深く聞いて、悟らず、段々進んで行くと、悟りが除て、無功用の場に、到達すれば、不悟ぢや、師家の方から、怎することも能きぬ、自分で此場合を承知せねばならぬ、佛に獻ずるは、香の多きに在らず、只是れ當人、千了百當するぢや、してまた、千了百當したと、云つたら、此千了百當も、奪却して、拈了せねばならぬ。

二百三十　雪峯住庵

舉雪峯住庵時。有僧來禮拜。峯見來以手托庵門。放身出云。是什麼。僧亦云。是什麼。峯低頭歸庵。僧後到巖頭。頭問。什麼處來。僧云。嶺南來。頭云。曾到雪峯麼。僧云。曾到。頭云。有何言句。僧舉前話。頭云。他道什麼。僧云。他無語低頭歸庵。頭云。噫。我當初悔不向他道。末後句。若向伊道。天下人不奈雪老何。僧至夏末。再舉前話請益。頭云。何不早問。僧云。未敢容易。頭云。雪峯雖與我同條生。不與我同條死。要識末後句。只這是。

末後句巖頭唱道。雖然他亦爭識得之哉。若道識得了。則頭破作七分。如阿梨樹子。蓋末後句。有頭無尾。有尾無頭。千聖亦模索不著。雪竇頌道。明暗雙雙底時節。是僅提其一半耳。何故。末言爺諱膽。先寒擬欲遮藏沒處安。咄。

此の則は、碧巖中の虎狼關で、初機の人は、少しく挺に、能はぬぞ、雪峯住庵の時、兩僧來りて禮拜した、兩僧とも、知れたものぢや、禮拜したが、もう大抵、手許は知れてある、一狀に領過す、一本の書付で、言ひ渡す、峯來るを見て、手を以て庵門を托して、身を放ち、突然として飛び出て云く、是れ什麼ぢや、爰で雪峯の面目を見るべし、僧も亦云く、是れ什麼、此僧餘りの事なるに、肝を潰して、猿眞似をしたばかり、別に深意あるに非ず、峯低頭して、庵に歸る、是れ什麼、此則の肝腎ぢや、是れが見ねば、末後の句も見ぬ、爛泥裏に刺あり、龍に足なく、蛇に角あるが如しと、圓悟も下語したは、これぢや、者の僧其後ち、此事を穿鑿せんが爲めに、巖頭に到りて問ふた、巖頭云く、什麼の處より來る、僧云く、嶺南より來りましたと、答へたは可いが、頭は疾に、勘破してある、嶺南とあれば、雪峯へ到つたと、あるなと、僧云く、左樣御尋ねの通り、曾て雪峯に、到りましたと、竇頭の漢ぢや、頭云く、

何の言句ありし、僧前話を擧す、重々の敗闕ぢや、此僧にしては、無理はない、頭云く、當時雪峯は、什麽と道ひしぞ、圓悟は巖頭は緩るい、何ぞ鋒口に打たぬぞと云ふが、否々爰で打てば、此話は圓成せぬ、僧云く、他無語低頭歸庵と、正直に遣つたも可い、併し此僧後發な者で、あつたら、巖頭の質問に應じて、活機の働きが、あるべき筈ぢやに、惜い哉、重ての敗闕ぢや、頭云く、噫我れ當初折りが無くして、雪峯に末後の句を云はなんだが、返す返すも、殘り多い、若し伊に道ひしならば、天下の人雪峯を怎するとも能きぬ程にと、此語が重要ぢや、鵝林は此死人頭めと、喝いた爰が見ゐたら、巖頭の腹も、知れやう、是れで一段落濟んだ扨て箇の僧、巖頭にて、一夏を送り、彌よ夏末に臨んで、怎も氣に掛る故、前話を繰り返して、後れ走せに、請益した、頭云く、何ぞ早く、問はざるかと、此四字巖頭の、面目見る樣にある、僧云く、申し兼て居りましたが、頭云く、雪峯我と同條に生ずと雖も、我と同條に死せず、鵝林云く、死に戲言々々、然し此語見苦いぞ、雪峯は乃公と同樣に、德山下で、悟處ありと雖も、我と同樣に、死せぬ、大活現前の機用が、あるとないと、此の則は德山末後の句を、手に入れた後でなくば、容易に見ゐる者でない、圓悟も末後の大事を會せんと要せば、只老胡の知を許して、老胡の會を許さずと評したは、面白い、實に末後の句は、人々粉骨碎身せねば、透過はならぬ、所れで、本則の大意は、先づ如上の評で、粗ぼ叙述

したが、雪竇の頌に參じて、力を得よ、雪竇は、什麽と道ふぞ、末後の句、君の爲めに說く、明暗雙々底の時節と、當陽に頌し去りて、是れ雪竇の秘訣ぢや、是れが見ゐたら、末後の句も見ゐる、圓悟は牛の角なく、虎の角あるが如しと、下語した、同條生也、共に相知る、不同條死、還つて殊絕と、同條生は、德山下の兄弟は、共に知りもしやうが、同條に死せずとは、雲泥違つた、ことじや、中々寄付かれる者で、無いぞ、圓悟は此處に、下注して、拄杖子我が手裏に在り、爭でか、山僧を怪しみ得ん、雪竇倆の鼻孔は、圓悟が穿過したぞと、面白い、下語ぢや、還つて殊絕した、當體は、釋迦も逢磨も、見ゐない、見分けねば、許さぬぞ、末後の句は、これで頌し盡した、鐵額銅睛の眼孔を、開いて見よ、南北東西、何處へなりと、も、勝手次第に、さア〳〵、歸りませう、して、夜深に、共々千巖の雪を、見やうぢやないか、爰は、暮雲の歸り、未だ合せざるに對するに堪へたり、遠山限りなく、碧層々の、境界ぢや、此の頌、光前絕後にして、碧巖中に、二つとない、雪竇、屋裏の名劍を、揮ふたぞ、これが醍醐を、飲む如く、喜ぶ者に、非ざれば、末後の句は、夢にも見ること、能きぬぞ。

二百三十一　五祖開眼爲畫

舉。五祖上堂云。開眼爲畫。合眼爲夜。坐斷舌頭。誰談般若。金色頭陀。不入保社。

草茸茸烟羅羅空生崖畔花狼藉這箇是羅漢窠窟山僧亦曾入著保社如今老矣住持事繁走作正閙不覺日又夜爭教人少年

眼を開いて、豈と爲し眼を合して、夜と爲す「へーい」舌頭を坐斷して、誰か般若を談ずと、珍らしいことを承はつたして金色の頭陀は者の保社に入らず何にが氣に入らぬか迦葉ですりや、仲間入りはせぬ、ぢやもの、乃公は猶更のこと、五祖老人事は一向に偏倚したら不可ないよ衆生濟度の爲めならば、水火に入つても苦しう無からうぞ況して般若ならば、結構であらうに、开れでも、尊公は嫌やで御座るかの何と擔板漢の老僧ぢや、爰が面白い處ぢや斯う揑じ廻はさねば、宗旨は活て來ぬぢや。

二百三十二　良遂參麻谷

擧。良遂座主參麻谷。谷見來携鉏去鉏草。次日又來。谷便閉却門。遂因此契悟。乃云。和尚莫謾良遂好。若不來見和尚。幾被十二分教誤。却一生。遂將房計賣却。作一罷講齋。示衆云。良遂知處。諸人不知。諸人知處。良遂總知。虛堂拈云。禮非玉帛。而不表。樂非鐘鼓。而不傳。是則是量才補職。就中些子請訛。只是無人檢點得出。

良遂見麻谷。契悟。自白云。若不來見和尚。幾被十二分教誤。却一生。遂作罷講齋。虛堂云。些子請訛。只是無人檢點得出。瑞阜卽不然。良遂罷講前。眼橫鼻直。罷講後。頂天立地。若道大冶精金無變色。則沒交涉。若道有變色。則沒交涉。且道罷講前後。其於良遂相去幾許。欲知眞金。須火後看。畢竟如何。不得中郎鑑。還同野舍薪。

良遂座主、麻谷に參するの則は、麻谷の辣手を見よ、此の點滴不施の手段か、難有い學者を接得するは、是れでないと、有爲の才は、得られぬ、良遂の罷講齋も、面白い、虛堂は美めて、禮は玉帛に非ざれば、表はれず樂は鐘鼓に非ざれば、傳はらずと云ひ、一の罷講齋が、教より禪に轉ずる、證據であると、如何にも、然り而して山僧は、良遂の示衆を賞翫す、此頌教者は、夢にも見ることを能はず、虛堂は些子の請訛と、云はるゝも請訛も何にもない、檢點するもせぬも要らぬ、此句を知らんと要せば、只老胡の知を許して、老胡の會を許さぬぢや。

二百三十三　眞如端午上堂

擧。眞如端午上堂。擧文殊令善財採藥公案。我當初若見只向他道。大士刀濟易沒。惡語難消。若向者裏下得一轉語。却許他毘耶城裏問疾。

文殊大士不審。大士嘗發惡語乎否。大士云。我只道此藥亦能殺人。亦能活人。瑞阜云。是好。

語。眞如誣人之罪。雖不可救。大士亦鑿資引賊。何故。好語不可說盡。說盡人必易之。

這は是れ、眞如端午に丁りての示衆ぢや、古今文殊善財採藥の公案を、拈評する者も多いが、恁麽いふ名何は、佛光に限るぢや、什麽と道ふぞ、我れ當時若し見ば、他に向つて道はん、大士刀瘡は、沒し易きも、惡語は消し難しと、面白い、文殊も其場に居るに堪へられまいして文殊々々、若し乃公が、斯ういふた處に向つて、一轉語を下したならば、却つて、尊公に、毘耶離城に往いて、維摩の疾を問ふことを許してあげ樣と、前箭猶輕く、後箭は深し、爰に到つて、只呆れ返つて、膽が潰れる而已ぢや、斯うも能く出た、古今無類、上堂の名人とは、眞如ぢや。

二百三十四　大燈重午上堂

擧。大燈重午上堂。僧問。文殊令善財採藥。財云。盡大地無不是藥者。此意如何。師云。崑崙嚼生鐵。僧云。善財拈一莖草。度與文殊。殊云。此藥亦能殺人。亦能活人。拈驗在那裏。師云。黃檗樹頭生木蜜。僧云。學人通身是病。作麽生醫。師云。病得須愈。僧云。直饒與麽。猶墮在圓覺四病。作麽生得獨脫無依去。師云。早知。儞不能病得。僧云。快哉快哉。今朝天中節。時清道泰。門安戶靜。師云。許儞一句相當去。

善財拈一莖草。拗直作曲。文殊此藥活人殺人。心不負人。面無慙色。這僧已病未愈。大燈無病著。艾莫道消殞天行百怪。道什麽。吾這裏有白澤圖。無箇妖怪。何故。歸依佛法僧。不著佛法僧。求常禮拜如此。黃檗道底。

這は前の眞如上堂と、同じく重午ぢや、日支兩國とも、年中五節の一なる、端手には、特別に祝して、殊に重午は、病氣災難を、攘ふ、大切なる祝日ぢや、故に祖宗門下にも、此日は、必ず善財採藥の、公案は、定つた樣に出る、這箇の機緣は、從前諸老宿の、提唱で十分なるが、大燈が示衆を見よ、僧問ふ、學人通身是れ病ひ、作麽生か、醫し得ん、師云く、まだ眞個に病でない、一旦死に切れ、左すれば、須らく愈ゆべしと、面白い、僧云く、直饒ひ仰せ通りに死に切つた處が、猶ほ圓覺の四病、作止任滅に墮して、無病息災とは、申されません、師云く、早く知る儞が病得ること、能はざるを、それぢや、向さにも、云ふ通り、眞個に病み切り、死に切つて、無いと、僧云く、嚇難有い、其一劑で、今朝天中節、息災圓滿に、なりましたで、御座る、師云く、儞に許す、一句相當り去ることを、是れまで種々と、饒舌たが、今道ふたのは、一寸當つたと、是れ什麽ぞ、大燈安賣りぢやないか、此鈍瞞漢、何の伎倆ある、下手の鐵砲も、數々發射すれば、的中す、這僧は、それ位のものぢや。

二百三十五　六祖黃梅意旨

舉。僧問六祖黃梅意旨。什麼人得。祖云。會佛法人得。和尚還得否。云不得。僧云。因甚麼不得。祖云。我不會佛法。興德拈云。既是不會佛法。因甚作祖師。會麼。此地無金二兩。俗人沽酒三升。

大小大興德。語爲兩概。既是不會佛法。因甚作祖師。瑞阜卽不然。六祖不會佛法。所以爲祖師也。若會佛法。何得衣鉢。且道。會底與不會底。相去多少。畢竟如何。只許老胡知。不許老胡會。

六祖僧問ふ。黃梅東山の意旨は、什麼人か得たる。祖云く、佛法を會する人が得たり、和尚還つて得るや否や、云く得ず。僧云く、甚麼に因て得ざる。祖云く、我れ佛法を會せずと。盤に和して托出したぞ。此堪らん味を。大應が見て取つて、拈評したぞ。既に是れ佛法を會せざるに、甚に因て六代の祖となられた。會得が能きるか若し會せざれば、道ふて聽かさう。俚諺に、此地金二兩なしと云ふから、金の有ることが知れる。俗人が酒三升を沽ふと云ふから、僧侶が犯戒が知れる。六祖佛法を會せずと云ふて、佛法を會したことが知れるとなり。大應興麼の說話、早く是れ飯を嚼で嬰兒を養ふ、更に如何と云はゞ則ち頭上に頭を安じて、重ねて他の憂を增さしひるなくんば好し。

二百三十六　大燈上堂六月十五毒熱

舉。龍寶上堂。僧問。六月十五。天下毒熱。一機一境。盡落今時。不涉唇吻。如何通津。師云。退後退後。進云。浮瓜沈李。積雪爲山。見成公案。迥絕多端。豈不是清涼世界。師云。心不負人。面無慚色。速道速道。進云。黃龍有三關語。還許咨參也無。師云。劈開華嶽連天色。進云。我手何似佛手。意旨如何。師云。開拳作掌。進云。我脚何似驢脚。又作麼生。師云。屐齒印蒼苔。進云。如何是學人生緣處。師云。岣嶁峯頭神禹碑。進云。和尚一一祇對。的的分明。只箇三關爲一爲三。師云。謝倆答話。進云。與麼則會三成一易會一成三難。師云。將謂。問事漢。進云。恩大難酬。便禮拜。師云。錯。

國師三關。謹領深旨。若有人向山僧問。則答道。我手何似佛手。尺短寸長。我脚何似驢脚。義脚元來屈伸不自由。人人生緣處。無福德者。不得聞父母三寶名字。會三關爲一。則王令既行徧天下。將軍塞外絕烟塵。若是炎炎六月雪。則山僧不答得這話。

此の上堂は箇の僧元來問話に長じて居る。屋裏の人ぢや。故に大燈も、亦毒手脚を施こしたぞ。且く道へ。他の問處。唇吻に涉らずして、津を通ずるは、怎ぢや。師云く、退後々々。進んで云く、瓜を浮べ李を沈め、雪を積んで、山と爲す。見成の公案。迥かに多端を絕す。是れ清涼世界で御座らう。師云く、心に人に負かざれば、面に慚色なし。嘘を吐かずに眞個の

事を道へ、そこで箇の僧、幕を切り替へて、黄龍三關を持ち出した、師云く、此方は富士山の雲に聳へた如く、廓然と胸を開いて居る、何とでも將て來れ、進んで云く、我手何ぞ佛手に似たる、師云く、拳を開けば、掌を爲す、吁々無造作の語ぞや、進で云く、我脚何ぞ驢脚に似る、師云く、屐齒蒼苔に印す、面白い、進で云く、如何か是れ、學人生緣の處、師云く、峋嶁峯頭神禹碑、瓊本は無い、其方の生緣は、誰も僞り云ふ者、無からう、進で云く、只箇の三關合して、一と爲し、分けて三と爲すことは如何、師云く、儞が答話を謝す、それで了したが、進て云く、與麽ならば、則ち三を會して、一と成すは易く、一を會して、三と成すは難し、師云く、將に謂へり、事を問ふ漢と、善く尋ねた、進て云く、恩大にして酬ひ難し、師云く、錯、それ引違つた、箇の僧は、隨分話の、能きる奴ぢや、大燈も勞腹腕心した、禪僧家は、言句に長じないと、面白くない、大燈に對抗する程の者で、無くては、言句の妙を語ることが能きぬぞ。

二百三十七　眞如結夏已一月

舉、眞如上堂、結夏已一月、眞如無法說、眼上各安眉口中各含舌、西天人不會唐言、剛把烏龜證作鼈。

結夏已一月、道什麽錯、更道證龜作鼈、山僧不識、吾王庫內無如是刀、然而官路不容針、私門通車馬。

結夏已に一月ぢや、眞如法の說くなし、何せか此上怎說うぞ、人々釋迦彌陀と、少しも異ならぬ、眉は眼上へに在り、舌は口中に含む、孔れに西天より、能々出て來て、支那語が解からぬからでも、あらうが、無理なことを云ふ、烏龜を把へて、是れは鼈ぢやと、人に押へ付ると、あア面白い、上堂ぢや、此味は久參の士でなくば、咀嚼能きまいぞ。

二百三十八　顯孝上堂拈金牛齋

舉、顯孝上堂云、金牛和尙、每日齋時、自將飯桶於僧堂前作舞、呵呵大笑道、菩薩子喫飯來、師云、等是普同供養、誰知飯裏有沙、拈云、飯裏有沙、則淘汰、而可喫、山僧卽不然、殘羹餿飯、儘見人所珍重、況乎飢人不擇食哉、雖然金牛每日、只是供養、直饒美膳也須嘘、金牛老爭奈不中飽人喫、顯孝は好んで、人の鼻孔を、捩轉するを愛す、飯裏に沙ある、何ぞ關するに足らん、只是れ金牛を捕つて、擲げ去らんとするの、手段ぢや、然れども、他は舊に依て、菩薩子喫飯來と、呵々大笑して休まず、直饒ひ沙に和して、供養しやうか、大衆之を受けて、敢て辭せざる。

は何ぞや、して看れば、金牛老子の飯には、一種の佳味ありしなるべし、ほゝう混和飯、山僧もこれならば、敢て辭せざるなり。

二百三十九　太平拈風穴若立一塵

擧。太平上堂、風穴云、若立一塵、家國興盛、野老嗚歌、不立一塵、家國喪亡、野老謳歌、太平卽不然、若立一塵、法堂前草深一丈、不立一塵、錦上鋪花、何也不見道、九九八十一、窮漢受罪畢、縱擬展脚眠、蚊蝱猶蚤出。

風穴正兵堂堂、布陣旗鼓嚴肅、太平奇兵游擊、馳突臨機應變、要期必勝、其以若立一塵、爲草堂前草深一丈、以不立一塵、爲錦上鋪花、倒行逆施、以邪打邪、謂之東山下風采、吾不得信、遮莫千古黑風吹去、這般瞎禿長不死、咄、此上堂は、東山下の風采ぢや、頗る向上に拈弄した故、容易に解からぬぞ、風穴は若立一塵を、偏位却來底とし、不立一塵を、正位向去底とした、五祖は之に反した、處が面白いぢや、若し一塵を、立すとは、法堂前草深き一丈と、羊頭を懸て、狗肉を賣る、一塵を立せざれば、錦上に花を鋪く、面上は夾竹桃の如く、肚裏に荊棘を栽ゆ、五祖の意、什麽の處に在る、これを會得すれば、下の偈頌が見ゆる、何ぞや、道ふことを見ずや、九九八十一、窮漢罪を受け畢つて、とは、九九八十一、とは、畢竟の義ぢや、困窮せる、貧乏人が、監獄内で、懲役に苦しむと、同じぢや、出獄して、先づ一安心と、少しく解紐いで、休息せんとすれば、蚊虻蚤虱に、苦しめられて、又泣き面に、蜂が螫す、如く、進退維谷まるの、極に墮るとさア、嗚呼、面白い、是れが若立一塵か、不立一塵か、向上か向下か、什麽とも云へぬ、甘味がある、此味を咀嚼せねば、東山下の風采は、知れぬぞ、參ずること三十年せよ。

二百四十　雲門平地上死人無數

擧。雲門道、平地上死人無數、出得荊棘林者是好手、時有僧云、恁麽則堂中第一座有長處、雲門云、蘇嚕蘇嚕、太平拈云、平地上箇箇丈夫、荊棘林裏、坐得底是好手、何故、乃云、格。

衲僧家面前、平地上亦活、荊棘林亦活、若有人向瑞阜、問好手如何、平生肝膽傾、人盡相識却如不相識、

是れは雲門宗の、榜樣ぢや、平地とは、胡椒丸呑み主義や、只來れ、其身其儘が、好い、白木の合子で、傷つけなく、抔と云ふ、無相平等の、暗窟に、尻を居ゑる者は、死人ぢや、此平地を、踏み破つて、祖師の、荊棘關を、透過する者は、是れ好手となり、時に僧あり、問て云く、恁麽ならば、則ち堂中第一座は、久しく、荊棘を、經て、修行した故、長處あり、雲門云く、蘇嚕蘇嚕、是

れ什麽、大きな聲を爲すなと云ふことか、五祖云く、太平は卽ち然らず、雲門宗を手に入れた者は、平地上箇々大丈夫、荊棘林に坐すれば好手と、雲門底と、大した相違は無い、平地でも荊棘でも宗旨を手に入れた者は、自在に揑ね廻はす、何故に斯の如くなる云く、格と眞實參究か、肝腎ぢや、兎角惡辣の宗匠に參して鉗鎚を受け、難透難解の則に筋骨を拔くでなければ、髑髏前に、鬼を見る、亡靈蜻蛉となるぢや、五祖下は、皆荊棘透過の上に、向上の宗旨を傳へた、故に子孫も盛になりたり、此宗風は、元明に至つて、大に衰へたは、全く平地上、主義が、跋扈して、言句を疑はず、甚しきは、敎禪混淆の弊を來したり、吾邦は、此弊なきは、何よりの福祉なり、是れ鹿林の賜ぢや。

二百四十一　顯孝杜宇不如歸

舉、顯孝上堂、杜宇不如歸、竹鷄泥滑滑、深山巖崖中、誰道無佛法、有佛法、祇僧只有三隻、襪、瑞阜也有佛法、家貧鼠驕、筆多毛禿、

是れ顯孝の受用底境界ぢや、面白いことぢや、子規は、ほゝんかけたか、竹鷄は、ぽつ〳〵は、」各々得意の聲を、將て啼く、此深山巖崖の中にも、佛法が有る、乃公が納戸には、三隻(一足半)の襪あり、と、面白い、恁麽に赤貧如洗の地に至らねば、此味を嘗められんぞ、去りとて、是れは貧乏自慢をするのではない、萬行莊嚴、四德涅槃の家鄉は、此內に在るぢや、

二百四十二　古德寒暑到來

舉、僧問古德、寒暑到來、如何回避、德云、鑊湯爐炭裏、回避、僧云、鑊湯爐炭裏、如何回避、德云、衆苦不能到、眞如頌云、老去他鄉見故知、迢迢携手却同歸、夜深且盡檐前酒、莫說天涯脚痛時、

古德針鋒頭上、進步、眞如百草頭邊、展脚、二搔一搔箇箇皆有、出身之路、然而若有人、向山僧問、衆苦不到底則道、李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠、

此の古德は、曹山寂の嗣、了悟禪師ぢや、一人の坊主が、寒暑到來、怎して、回避られぬすと問ふた、德云く、汗れは、鑊湯爐炭裏に、回避せよと、爰を呑込まねばならぬ、僧又云く、怎して、鑊湯爐炭裏で、避けられませうぞ、德云く、されればにや、衆苦到ること、能はずと、是れが、萬能具足、四德涅槃の眞只中ぢや、此味は、洞山寒時、殺熱時、熱殺の則を、透過したものは、容易く、手に入るぞ、そこで、眞如は、下の如く、頌したぞ、老ひ去つて、天涯殊方に、故人に、出逢ふて、迢々、手に手を携さへて、同じく、歸る、久し振りに、歸鄉ぢや、先づ安心して、目出度いで、旅中憂苦、足痛の時を、もう、話さずに、一盃まいれと、是れ什麽、丸で、寒暑到來の公案とは、相違ではないか、爰が、眞如の貴い處ぢや、此味は、人々、冷暖自知に、在り、能く、翫索

せよ。

二百四十三　乾峯法身三種病

擧。乾峯示衆云。法身有三種病二種光。一一透得始是穩坐。僧問大燈。意在那裏。大燈云。不喜。舊路逢人。僧云。雲門出衆云。庵內人因甚不見庵外事。又作麽生。燈云。爲己鎖者多。爲他鎖者少。僧云。不因夜來鴈爭見海門秋。便禮拜。燈云。好看好看。

乾峯三種病話。龍寶拈評云。不喜舊路逢人。瑞阜則不然。舊路多喜熟處難忘。況復怡親戚之情話乎。雲門云。庵內人因甚不見庵外事。龍寶云。爲己鎖者多。爲人鎖者少。山僧卽不然。坐內販楊州。

這箇拈評は、大燈無類の絶唱ぢや。乾峯三種病を頌し評したものは、數多あるが、乾峯の犢鼻褌に攀ぢ上ることも能きぬ、大燈國師、勞腹剜心、目前に拋出して、人をして見せしむ。僧問ふ、乾峯云く、法身に三種の病、二種の光あり、一々透得して始めて是れ穩坐と、此意那裏に在りますか。箇の僧法身邊在位は、手に入れた者でも、あらうか。深いことは無い。師云く舊路人に逢ふことを喜ばず。是れ什麽。一千五百人の善知識の語ぢや。此語路の微細なことは、實に雲門宗の精粹ぢや。恁麽の眞味を、咀嚼するで無くば、爭でか我

屋裏の秘奧を、盡すを得ん。平話に云はゞ、里歸りは嬉しいものぢやが、嬉しくないは是れまで通りつけた路は、兎角人に逢ふて、面倒臭い。法身の舊路も、面倒臭いぢやと、國師に親しく、面語の心地して、貴い難有い是れで成佛せねば、衲僧ではないぞ。進で云く、雲門衆を出て云く庵內の人、甚に因てか、庵外の事を知らざる。又什麽でムる。是れは雲門は、乾峯の土藏の鎖を、卸したと云ふか、古今下語の標準ぢやと、評判して、驗主探拔の二問の體を、具備してある。師云く、己が爲めに、鎖す者は多く、他の爲めに、鎖す者は少し。是れ什麽。平話に云はゞ、自分の部屋の世話はするが、人の世話は、能せぬと、云ふ氣味ぢや。恐れ入つた語ぢや。大燈は實に雲門の再來ぢや。到底も模擬は能きぬ。此按排古今多少の人、苦んでも到られぬぞ。進で云く、夜來の鴈に因らずんば、爭でか海門の秋を見んと、便ち禮拜す。此僧呑み込んだ樣だが、怎も覺束無い。師云く、好く看々、法身は疎漏にするな、能く看ねば、手に入らぬぞ。斯ういふ大作に出會ふと、手が揮ふて、筆が執れぬぢや。

二百四十四　眞如卽心卽佛

擧。眞如上堂。卽心卽佛。赤脚上刀山。非心非佛。耕地種蒺藜。不是心不是佛不是物黃檗樹頭生木蜜。第一句下薦得。許儞升眞如堂。第二句下薦得。許儞入眞如門。第三句下薦得。蓋拈拄

杖休休好語不可說盡道人不可道著卓拄杖趙州親見老南泉睦州拶折雲門脚。

瑞阜卽不然卽心卽佛此地無金二兩非心非佛俗人沽酒三升不是心不是佛不是物苦瓠連根苦甘瓠瓜帶甘第一句下薦得許儞喫瑞阜飯第二句下薦得許儞歇瑞阜粥第三句下薦得灑有意氣時添意氣何故焚唫踏鴻門臨濟掌黃檗哨。

卽心卽佛眞如は常に此馬大師の語を拈じ來りて亟示す是れは馬祖の一振刀で一寸でも擬議すれば喪身失命ぢや、そこで眞如は赤脚にして刀山に上ると實に能く道ふた非心非佛を地を耕へして糞壤を種ゆこれも面白い稻米を糞壤とした足踏もなるまい眞如の孤危險峻を看よ不是心不是佛を黃檗樹頭に木蜜を生ず一重摺り上げた苦いなら苦いで好いに苦い中に甜い處があるとは怎ぢや是れも親しく見徹せねば會得はならぬぞ第一句下に是れは卽心卽佛を稱しては如何ん眞如に欺瞞されぬ樣にせよ堂に升る門に入る此親疎の按排も人々肚の內で能く看よ語に附て廻はると、引つ違ふぞ第三句下に薦得せば慈に拄杖を拈して休みぬ〳〵好語說き盡すべからず道人は兎角說き盡し道ひ盡さぬが好い禪門は默に宜しいとは怎ぢや一句でも三句でもない拄杖を憑然卓して趙州親しく見ゆ老南泉睦州拶折す雲門の脚と這箇の按排はさァ見上げた、ものぢや此語の銳さ趙州が南泉に親炙した睦州が雲門の脚を、

拶折したか什麼所れが第何句に當るのか爰等の味は參究功を累ぬる上に於て知るであらう。

二百四十五　顯孝上堂山僧似抱璞者

舉顯孝上堂山僧恰似抱璞者但缺臨風涕泣不道舉世無人只是可惜許。

顯孝大似陶靖節愧爲五斗米屈腰於鄉里小兒卽日解印綬而賦歸去來奈此可憐生何。

嗟夫眞無人乎只是知音希矣。

此の上堂向上の人の境界ぢや瑠璃殿上に知識なし底か手に入らねば啞子が苦瓜を喫すると同じぢや山僧は恰かも璞を抱いて刖足下和の樣ぢや風に臨んで涕泣はせぬが知音がない舉世果して知音なきか無しとは道はぬ只是れ少し噫殘念々々何處が殘念か獨語して歎息する處か可惜許か冷暖自知せねば見ぬぞ。

二百四十六　五祖四大海水爲硯

舉五祖上堂云將四大海水爲一枚硯須彌山作一管筆有人向虛空裏寫祖師西來意五字。太平下座大展坐具禮拜爲師若寫不得佛法無靈驗有麼有麼便下座大衆散師高聲云侍。

者侍者。侍者應諾。師云。收取坐具。復問侍者云。還收得坐具麽。侍者提起坐具。師云。我早知彌恁麽也。

拈云。五祖四大海水爲硯。須彌爲筆。寫西來意於虛空裏則得。後面高聲喚侍者。我早知彌恁麽也。則誰能寫得。若有寫者。則佛法有靈驗。向上一著。千聖不傳。莫道東山下暗號令。咄哉巧女子。撮梭不解織。

五祖上堂云。四大海を一枚の硯と爲し須彌山を一管の筆と作し虛空裏に向つて祖師西來意の五字を寫さば太平下座して坐具を展て禮拜して師と爲さんと若し寫し得ずんば佛法に靈驗なしと是れは中々容易に見ゐまい此西來意が能きたらば佛法の靈驗が見ゐ樣か未だ五祖を見ることが能きぬぞなぜか五祖高聲に云く侍者と侍者應諾す師云く坐具を收取せよ復た侍者に問て云く坐具を收得したか侍者坐具を提起して此通りでムると云ふ師云く乃公はもう早くに其方が坐具を將て居ることを知つて居る哩是れ什麽此些子は中々合點往かぬぞ東山下の暗號令ぢや恁麽處に五祖の宗旨は活用して居る之を知らねば向上々々と云ふても何の益もないぞ餘程手が熟達來ぬと這箇は見ゐまい。

二百四十七　三聖透網金鱗

擧。三聖問雪峯。透網金鱗未審以何爲食。峯云。待汝出網來。向汝道。聖云。一千五百人善知識。話頭也不識。峯云。老僧住持事繁。

一網打就驗衲僧。將拳酬踢不堪應。住持誰道事繁。劍欲釣金鱗帶綫繩。又云。翡翠躍翻荷葉水。卷荷無著些泥滓。須臾池面晚烟收。却喜香風吹不起。又云。一機一境互爭衡。虎躍龍騰日月驚。電閃星馳何處去。秋晏至晚太晴清。這箇公案。作家相見。師資商量。喚爲世法得乎。呼爲佛法得乎。佛見法見未斷除。底何曾夢見。若不爾才開口則彌天罪過。

三聖と雪峯と互に酬酢。希有の商量。實に目醒しきものぢや。會合の機鋒。鋭どさを見よ。網を透る金鱗。何を以て食となす。佛界も魔界も。跨超し。生死涅槃。今時那邊を。透過して喫するものはない。珍らしい美食あれば。出しやされと。云ふ機鋒ぢや。峯云く。汝が網を出て。來るを待つて。汝に向つて道はん。汝は未だ網を出ていないと。云ふ機ぢや。三聖は金鱗に成り了して來たが。雪峯又網を打就た。把住した。ぞ。聖云く。一千五百人の善知識。話頭もまた識らず。是れは放行ぢや。漫天の網子。百千重雪峯へ打就た。偉さうに。大善知識と。誇り顏する。話頭の線路も。知らぬとなり。圓悟は迅雷霹靂。可然た。洋を驚ろかす。百

千の雷、一時に頭上に落ち掛つた如く、人の肝を寒からしむ躍跳に一任すと弄した峯云く、老僧住持事繁し、寺務が多い故ゑつい無調法もありつれど、御免下されと是れ雪峯の寒い處ぢや、佛見法見も、木葉拂ひぢや、何如に三聖が出やうといても、此網を出ること、なるまい、三聖が一千五百人の善知識頭も未だ知らずと云ふたは、中々恐ろしい言句なるに、其處へ老僧住持事繁しと云ふたは、古今に照耀して勝れた、之を翫味して、雪竇は、亦頌中に一重練り上げた、古調を出したぞ、雪竇什麼と道ふぞ、網を透る金鱗、水に滯はると云ふことを休めよ、乾を搖かし坤を蕩かす、鬣みを振ひ尾を擺ふ、中々凄まじい、金鱗ぢや、千尺の鯨、洪浪を噴て飛び、一聲雷震ふて、清飆起る、金鱗かと思へば、鯤鯨と爲りたり、一千五百人の善知識と云ふたは、千尺の鯤鯨ぢや、老僧住持事繁と云ふたは、鯉が龍と化して、濠を上るとき、迅雷一震して、眞つ黒な飆風が起じた、身の毛も卓堅する、境界ぢや、此清飆起りたる處は、天上人間に知音はあるまいと、掉尾大に力あり、碧巖中でも、雪峯三聖の法戰、一場の如き、目覺しかりし者は、鮮ないぞ。

二百四十八　太平上堂入城見傀儡

舉。太平上堂云、山僧昨日入城見一棚傀儡、不免近前看。或見端嚴奇特、或見醜陋不堪、動轉

行坐、青黃赤白、一一見了、子細看時、元來青布幔裏有人、山僧忍俊不禁、乃問長史高姓、他道、老和尚看便休、問什麼姓、大衆、山僧被他一句、直得無言可對、無理可伸、還有人爲山僧道得麼、昨日那裏落節、今日者裏拔本、

山僧試救得五祖落節矣、某甲屋裏坐、而親看城中一棚傀儡、全賴和尚之恩、感謝何極、不堪深荷之至、和尚萬福、即是爲五祖拔本也、不知猶有可言麼否、具眼者試辯細素看、

一局の觀劇油然として、活氣勃々、湧が如し、五祖に非ざれば、此活劇を觀ることを能はず、面白いと云うか、好笑しいと云うか、大唐四百餘洲にも、斯樣兒戲的の馬鹿を云ふもの、無かるべし、此の則は五祖城下に往き、歌舞伎座、泥人演劇を觀て、歸りし後の上堂ぢや、乃公は昨日城下で、一棚の操り傀儡を看た、無心な顏付きして、一心不亂に、看たであらう、扨て其形狀は、或は端嚴奇特の、英雄俊丰あり、或は醜陋卑劣の、皁隷僕婢あり、青黃赤白、各種の色彩、動轉行坐、瞬目揚眉の、活動一々見了して、仔細に看れば、青布幔裏に、黑頭巾ありて、此動作を主宰す、そこで乃公は、餘りの事に、此勸進元、及び黑頭巾の姓名を、問ふたれば、却つて竹篦返へしに、逢ふて、老和尚看れば、便ち休せよ、座元の姓名を、何の爲めに問はしやると、一喝せられて、答ふる能はず、大に赤面したぞ、何と大衆、乃公に代つて、一言答へする者あらば、昨日の落節は、今日爰で、拔本することが、能きるとなり、是れ

什麼、此一絡索は、五祖の拖泥帶水か、老婆親切か、阿呆らしいことを云ふ者かは、恐くは傳燈諸師の中にも、此樣なことを云ふ者なかるべし、參。

二百四十九　顯孝上堂盡力爲得中下之機

舉。顯孝上堂。顯孝盡力。只爲得中下之機。要且不爲得向上之機。拄杖子不覺出來冷笑道。大丈夫漢。等是爲人。何不教他脫籠頭卸角馱。如白衣拜相一般。說甚麼向上向下。山僧道。拄杖子。儞果然作家。我不如儞。

瑞阜也無伎倆。只是依樣畫葫蘆。雖然拄杖子。畢竟不及我。我每日與儞倦則靠壁。起則扶持。游山翫水。有時東擺西擺。有時左支右梧。不風流處也風流。

是れは、顯孝、奇妙なことを、言ひ出したぞ、乃公は全力を盡しても、只中下の機根の爲めにして、向上の機は、接得することが、能きぬと、拄杖子忽ち跳出して、冷笑して、道く、大丈夫の漢、何ぞ他をして、籠頭を脫し、角馱を卸し、凡夫をして、直に佛と爲し、昨日の白衣が、今日の宰相と、一般ならしめざる、又奚ぞ迂回な、向上とか向下とか、あらん、山僧云く、拄杖子儞は、平生、只、ものでないと、思ふたに、果して、作家ぢや、乃公より勝れて、あるとなり、斯ら圓轉活達、毫も、罣碍なきこと、古人も、常山の、蛇の、如しと、云はれた、水上の、胡蘆子を、壓すが如し、是れは、東山下の風采ぢや、然し何處が、主眼ぞ、拄杖子に、云はしめたる、覺面白い、種々に、說明を、著けると、邪解になるぞ。

二百五十　雪竇達磨西來

舉。僧問雪竇。達磨西來。單傳心印。諸方爲甚麼。各說異端。竇云。誰。僧云。爭奈卽今。何。竇云。西天令嚴。僧云。與麼則入水見長人。竇云。韓信臨朝底。佛光拈曰。雪竇一向擧令。虧了自身一半。著僧麤心大膽。也要縛屋蓋天。

瑞阜卽不然。這僧慣戰老將。不唯騎虎頭。亦解收虎尾。雪竇命若懸絲。縱通血路。道韓信臨朝底。這僧可惜許逸長蛇。瑞阜當時若見。則直道謝師供養。竇亦見一場慚懼。何故。當斷不斷返招其禍。

眞如上堂。他人の爭點を、自家に將ち來りて、裁決す、此僧は中々の腕扼ぢや、雪竇に向つて、達磨西來、單傳心印は、本來一法の人に、與ふる者なきに、諸方に於て、各々異論を發して、五家七宗の、千七百則のと、不要端緒を開きて、紛紜するは、甚だ其意を得ない、ことぢやと、驗主探拔兩問を以て、雪竇を一擲にせんと、掛つた、そこで雪竇云く、汝れは誰が何と說く、僧云く、誰も無い、尊公が百則の頌古のと、好肉を剜つて、瘡を爲すぢやありませ

んか。資云く、西天仏嚴なり。默れ、打殺されるぞ。僧云く、與麽ならば、則ち水に入て長人を見る勿公の卓絶なるを、拜見しましたと。此語大に毒がある。雪竇を土俵外に、把つて抛げんとする、働らきぢや。資云く、韓信朝に臨む底、今に其方の首は飛ぶぞ。命知らずめが。と。こで、眞如は之を拈して云く、雪竇一向に、法令を擧揚するは、好いが、自身の一半を、斷了すと。是れ什麽、眞如何處を看て、資が自分の首も半分斷たと云ふ、愛を看よ。又箇の僧、麟心大膽なるは、屋を縛して、天を蓋ふを要し、手を以て、大海を防ぐが如しぢやと、是れまた何處を見て云ふた。山僧云く、勘破了也。眞如御苦勞でムる。又云く、冷笑一聲。

二百五十一　大隋金鴈附書

擧。大隋因僧問金鴈附書。爲什麽不露翼。隋云。不通虛信。大燈拈云。大隋古佛。雖善其機。及乎打鎖扣枷。恐無此作。若有人問。山僧金鴈附書。爲什麽不露翼。只對他道。勘破了也。且道。與古人是同是別。眞眼禪流請辨細素看。

大隋因僧問金鴈附書。爲什麽不露翼。隋云。不通虛信。大燈云。勘破了也。瑞阜卽道。無線電信。則非無大隋。奈何賊身既露。龍寶和賊納款。畢竟如何。金地遙招手。江陵暗點頭。

是れは雲門宗の闕べぢや。箇の僧。雲門屋裏の事を知つて、大隋に問はれた。金鴈に書を

附して音信を通ずるは、軍事上にも用ひられた故事ぢや。愛に提げ來るは、本來具有の佛性は、形ちも姿たもない。見ることも能きぬ。「君は深野のきりぐす、吾はすれども、姿たは見えぬ」本性は釋迦彌陀も穴覗きも能きぬ之を鴈の通信に比して什麽として。鴈は現在飛んで行くに其翼さを露はさぬと、愛處が實に見難いぞ。隋云く、虛信を通せず、歷然露はして居る。資書は受取らぬと、是れ什麽しぞ。大燈は、大隋其一問一答の挨拶は可いが、大乘に接して鎖りを打し、枷を扣く段には、恐らくは此答べの樣にあるまいと、若し山僧に問ふたれば、只他に對して、勘破了也と云はんと。是れ什麽。大燈何處を見て、勘破した。虛信を通せぬと云ふを勘破したか、又は箇の僧を勘破したか。此の本則を通して勘破したか。大燈錄中見苦ひ則ちや、此緇素を辨せよ。大燈は云はれたが初機の學者は、中々大隋大燈を、腕推しは能きぬ。兜率の三關を眞個に透過した分際は、蔕すらと見えぬ樣を。

二百五十二　大應崇福入山

擧。大應國師。崇福禪院入山。趺座云。道遠乎哉。嶺頭雲淡淡。聖遠乎哉。碉下水冷冷。須知瑠璃日日出現。達磨時時西來。靈山一會何異。今日少室家風。正在此時。便見佛日增輝。堯風永扇。

世出世間能事云畢然雖如是與麽告報也是應箇時機若是向上全提遠之遠矣何故青山不鎖長飛勢滄海合知來處高

大應國師晉寺趺坐底且置若夫向上全提則三世諸佛不知有貍奴白牯却知有何也他是非遠而難親以太近却難看何故識得向上一竅千聖齊立下風

大應國師廣德を辭して崇福に晉山趺坐して云く道遠い哉嶺雲淡淡聖遠い哉磵水冷冷賊に和して欵を納る這箇は是れ崇福晉山底にして瞿曇の出現に非ず又た達磨の西來にも非ず靈山一會は自から八萬の大衆あり今日と異なり少林の家風は面壁九年冷坐して僅かに二祖を接す豈に橫嶽の風色ならんや佛日既に滅して黑暗々堯風吹き斷じて化蕩々世出世間の能事何ぞ畢了と云はん這箇の語話山僧は崇福底と丸で反す不遜の罪謝する所なしと雖も樣に依て胡蘆を畫き徒らに先聖に阿諛諂附するは亦是れ少林の忠臣に非ず山僧與麽の告報大應と亦相悖らざるを知らば亦是れ時機に應ずる方便なり

二百五十三　龍寶拈翠巖示衆

舉龍寶上堂有僧問記得翠巖示衆云一夏爲兄弟東語西話看翠巖眉毛在麽師云迥想化

下有人進云保福云作賊人心虛還端的也無師云豈不信道進云長慶云生也試委悉看師云淨手裝香進云雲門云關如何透得師云洎乎鎖斷進云此三大老各出隻手扶樹翠巖用處莫止一般麽師云官差不自由進云虛堂老子道只解同心不能同志又作麽生師云吉凶不上卦進云寶山今夏與兄弟東語西話眉毛拄梵天與翠巖相去多少師云嶽秀靈芝異進云一句迥超千聖外松蘿不與月輪齊便禮拜師云咦乃橫拄杖云有佛處不得住無佛處急走過卓杖一下云莫孤負趙州老漢不然靜處娑婆訶

翠巖示衆保福云作賊人心虛龍寶云豈不信道長慶云生也龍寶云淨手裝香雲門云關天明失却火要之翠巖忘前失後無烟火處失却火三人相救奈何既已總身燎却了也果然父擔羊子證之

龍寶大士翠巖眉毛在麽の話を拈する幾回なるを知らず而して庖丁が牛を解が如く恢々乎して餘裕あり其鋒刃常に新に硎より發するが如し僧問ふ翠巖示衆に云く一夏兄弟の爲めに東語西話す看よ翠巖が眉毛在りやと此意如何師云く迥かに化下に人あるを想ふ翠巖は明眼ぢゃで好い人が輪下に多いと是れ眉毛と何の關する所ある恁麽云ふ處に國師の妙あるを知れ進で云く保福云く賊と作る人心虛はる是れま

た保福何を看て云ふたぞ盗みをする人は常に心に恐怪すと中々面白い語ぢや師云く豈に道ふことを信ぜずや乃公が云はぬことが化下に人ありと寄ても著かぬ答ぢやが動かぬ處あり斯うも善く道ふた長慶云く生なりとは如何師云く淨手に香を裝ふ是れ什麼斯んな語は雲門の再來でなくては出るものでない淨めた手で香を裝ふは誰人も道へさうぢやが不可ぬなせ不可ぬぞ是れは文字に附て廻つては見ぬ堪まらん味があるぞ雲門云く關は如何師云く洎乎鎖斷す幾乎に戸を鎖やうとした是れは〳〵とばかり吉野の山の櫻花講釋も道理も此間だに挾さまれやうか雲門大師來也侍者急に坐具を將て來い香を將て來たれ龍寶は實に日本の達磨大師ぢや是等の言句は如何なる者も坐側へも寄れぬ憤鼻禪に攀ぢつくことも能きぬぢや進で云く此三大老翠巖を扶樹す用處如何師云く官差自由ならず官邊の差排に乃公は勝て手にならぬ進んで云く虛堂老師道く只心を同うすること能はずとは作麼生師云く吉凶とも卦に上さず〻〻〻虛堂はなァ頭から對手にせぬのぢや進んで云く寶山今夏東語西話翠巖と相去る多少師云く嶽秀て靈芝異なり乃公のは富士の樣な高山には生する靈芝と同じくして世間とは亦別ぢや進で云く一句迥かに超ゆ千聖の外松蘿は月輪と齊しからず師云く咦這の僧左はどの者でない依草附木の精

靈ぢやそれで大燈も馬鹿道へ屎喰ひめと云ふた提綱の趙州有佛無佛の句は師何處に居るか能く看よ

二百五十四　眞如解夏上堂

舉眞如解夏上堂十五日已前坐殺閻梨十五日已後走殺閻梨正當十五日秋雲依依秋草離離蛩吟古寺華放疎籬高安灘上客臨濟小厮兒腦後猶缺一椎大悲臨濟喫棒有分而眞如舌頭坐殺走殺了自身一半看來贏得頂上笠失却脚下鞋咄

是れは眞如解夏の上堂ぢや什麼と道ふぞ十五日已前未在更に道ひ將ち來れと閻梨を坐殺し閻梨を走殺するは則ち無きに非ず而して眞如も亦身を兼ねて中に在り正當十五日一言既に出れば駟馬も追ひ難し吾這裏那箇の閑日月なし然れども即今解夏祇僧布袋を開き秋雲依々秋草漠々雲か人か水か笠か天涯千里行く處として亞は古寺の砌に吟し華は夕陽の籬に開く箇は是れ一色邊の事祇僧の鼻孔何處に在る咄高安灘上の客臨濟の小厮兒腦後に猶ほ一椎を缺く是れ什麼那箇の一椎收拾するに處なし且く錦藍亭上象鼻峯外遮莫あれ雲と成りて山に衣を被らしめ水と成りて龍

に氣を出さしむ喝

二百五十五　雲門初秋夏末

舉雲門因僧問初秋夏末前程忽有人問未審對他道甚麼門云大衆退後僧云過在甚麼門云還我九十日飯錢來虛堂云者僧是王小波草鞋雲門雖縱奪可觀未免暗中著箭

雲門逢者僧問盤資引賊藏盡家私者僧作家惜哉缺一著在山僧當時若爲者僧則待道

雲還我九十日飯錢來便將手劈開自爲貓眼出去

這是是れ虛堂解夏翌日の上堂に雲門の機緣を引いたぞ僧雲門に問ふ初秋夏末前程に人あり九十日の所得如何を問はゝ未審他に對して甚麼と道ひませう門云く大衆退後々々流石の雲門ぢや中々斯語は容易に出でぬぞ僧云く出頭不得との御言葉は心得ませぬ定めて無調法なことあつたでせう何處が罪過で厶ると箇の僧一本綱で動かぬ奴ぢや門云く己奴等に只で食はして置いたに未だ开んな不足を吐すか さァ乃公に九十日の飯錢を還へし來れ嗚呼難有い涙が溢れる そこで虛堂ぢや下の批判を看よ箇の僧は是れ王小波が草鞋とは鐘馗の草履擂ぢやと云ふことなり中々剛い手に餘す狠戾ものに出會た雲門は美事で縱奪觀るべきものありと雖も未だ暗中に

流矢に著ることを免かれずと虛堂は箇の僧を扶けて雲門を憐びに似たり然れども山僧は然らず雲門兩處の語光前絕後箇の僧も亦此の圈纏を出ることを免がれぬぢや

二百五十六　太平上堂有鹽曰醎

舉太平上堂云有鹽曰醎無鹽曰澹太平開說口似匾擔便下座

有鹽則醎無鹽則澹賴因太平舉而致得又云勘破了也

這箇の話恰かも秤鎚を離す樣にて而かも此中に提撥し難き處あり具眼者は一見して貴き金玉の如くするも無眼子は見て半文錢の價直もなかるべし箇の話五祖ならばこそ口に任せて亂道するも俱諸人斯樣馬鹿げ切つたことを道はるゝが道ふて見よ咄

二百五十七　雲門六不收

舉僧問雲門如何是法身門云六不收

雲門云六不收山僧便道三段不同收歸上科乃頌云三段不同收上科柳暗花明影婆娑

盡中併寫詩中景島翠籠烟拂暖波又云卷盡五千四十八他殺孰與於自殺喫顛失脚欲起難雨後蹊頭泥濘滑

如何なるか是れ法身箇の僧頂門に摩醯の一眼を具してある奴ぢや什麽なり問ふことあるに雲門に向つて法身と斬り掛けた處は中々の腕扼ぢや この法身は多少の人摸索不著ぢや文殊普賢も手を挾はさむこと能きぬは是れぢや雲門は什麽と吐いた六不收と山僧は此解釋を雪竇と圓悟に代講して貰ふ雪竇は能く饒舌る什麽と計算した一二三四五六成る程六不收ぢやで是非とも斯う出て來ねば勘定が濟まぬ圓悟は周うして復た始まると云ふ道理ぢや一二三四五六六五四三二一滴水滴凍許多の工夫を費して什麽をか作さんと甘い哉圓悟大師滴水滴凍の四字は胸中百萬の疑團を粉碎して暑中に冰雪を沃がの如きの觀あり碧眼の胡僧數へ足さず千手千眼も屈かぬ圓悟云く三生六十劫數へて數へ切れぬ何如にも道理ぢや开れに達磨が怎して數へ足すことは且く置いて夢にも見ることは能きない雪竇其方は疾くに御承知で居ながら什麽として犯罪するぞと此圓悟の御機嫌の好さ上出來ぢやぞ少林謾に道ふ神光に付す雪竇鋒を一轉して來た斯の妙處の按排堪らんぢや圓悟云く一人虛を傳れば萬人實を傳ふ從頭來已に錯り了れり此噓ば傳へたい雲門雪竇も此噓を好手に

傳へた達磨の過ちでもない靈山會上に釋迦か拈華迦葉か微笑より濫觴して來たのぢや衣を卷いて又說く天竺に歸ると神光に付すと云ふかと思へばまた斯んな噓を吐く去來なきに天竺に歸つたとは噓々曾て歸りはせぬ一船の人を賺殺すと圓悟は下語した天竺茫々として尋ぬるに處なし天竺と云ふて天竺にも居ぬ人相書を出して草を分け詮議するに達磨らしいものは一人もない圓悟下語して什麽の處に在る天竺に無くば何處に逃隱して居るか達磨が無くて仕合せ始めて是れ太平如今什麽の處に居る人々の肚裏に居る敲き出して入檻させよ夜來却つて乳峯に對して宿す達磨が無いかと思へば乳峯の窟の下に寢てけつかる此句絕妙ぢや前句で達磨を掃蕩して此で乳峯に宿すと云たは佛見法見を拔いた處ぢや圓悟下語して備が眼睛を刺破す また是れ風なきに浪を起すと且く道へ法身と云ふても佛身と云ふても三十棒ぢや此頌極めて絕唱ぢや古人も此地合の細かさを賞美して居る此等の妙處を手に入れば語句に澁滯はないぞ

二百五十八　臨濟大覺到參

舉臨濟因大覺到參師舉起拂子大覺收坐具師挪下拂子大覺收坐具入僧堂衆僧云這僧

莫是和尚親故不禮拜又不喫棒師聞令喚覺覺出師云大衆道汝未參長老覺云不審便自歸衆

拈云一出一入兩鏡相照中無纖翳霜天月落夜將半誰共澄潭照影寒雖然山僧即道猶是未在

是れは臨濟大覺の出會で林に入つて草を動かさず水に入つて波を起さいる底ぢや大覺到り參す師拂子を擧起す大覺坐具を敷く師拂子を擲下す大覺坐具を收めて僧堂に入る兩鏡對照して中に影像なし衆僧云く這の僧是れ和尚の親故でもあるまいか禮拜せざれども亦棒を喫せず不思議ぢやとなり師此事を聞いて一波瀾を起さんとてか大覺を喚ばしむ覺出づ師云く大衆道ふ汝は未だ長老に參得せぬと覺云く不審(和尚御萬福でとの禮話なり)是れば かりのみで便ち自から又僧堂に歸つた兩鏡相對して中心影像なし此美事さ作家の相見雙璧瑕なし點の著ち樣はない雪竇の所謂左顧瑕なく右眄既に老ひたりとは爰ぢや老手に非ざれば能きぬぞ

二百五十九　趙州萬法歸一

擧僧問趙州萬法歸一一歸何處州云我在青州作一領布衫重七斤

一領布衫重七斤人間富貴付浮雲喜他得意封侯事樹下避題麟閣勳

是れは萬法を總括して問ふたる編辟問ぢや僧趙州に問ふ萬法は一に歸と云ふか一は何處に歸するか州云く我れ青州に在りて一領の布衫を作る重さこと七斤圓悟下語して云く果然として七縱八横漫天の網を拽却す何處が趙州の七縱八横ぢや他の唇皮口吻禪は中々眼が屆くものでないぞ一領の布衫重さ七斤是れ萬法の歸處か這辟曾て老古錐を挨す七斤衫重し幾人か知ると頌した編辟は事苑に辟當に遍に作るべしと編は取り集めるなり萬法を一處にして身に拶著して來るなり然るに七斤の衫に出逢ふた趙州が知つて居るか知らんが知る者は少ない乃公も昔は此の布衫の則を咀嚼したが如今西湖の裏に拋擲す得て見たれば最早不用ぢや西海に掃ひ去りて下載の清風誰にか附與せんと此布衫の重擔を卸して涼しい按排は罷休の人ならでは分付するものないとなり

二百六十　五祖神通妙用

擧五祖上堂云神通妙用不蝕絲毫通人分上何用忉忉泥多佛大水長船高

山僧神通妙用不然。語大而不處。大獻佛不嫌香多。雖然也要築山而惜一簣之土矣。

神通并に妙用、水を搬ひ、また柴を搬すと、龐老は道破したか、今ま五祖が、爰に神通妙用、絲毫を缺かずと、什麼を道ふぞ。是れが五祖の精髓ぞ、行かんと欲すれば行き、坐せんと欲すれば坐す、朝から晩まで、神通妙用、少しも不足は無いぞ、佛に在ても増さず、衆生に在ても減せず、通人分上、彌太も平太も、具備して居るぞ〳〵。絮切ことを、云ふに及ばぬ、併ながら、泥多ければ、佛大なり、奈良の大佛は、聖武天皇の願ぢや、普天率土を、統御し給ふ、萬乘の御信念は、五丈六尺の、金銅盧遮那佛と顯はれ、五尺や八尺の、記念銅像とは、異なれり、太平洋、太西洋には、二萬噸餘の鐵艦は、泛べてある、衲僧も、肚裏の大が、好い、悉圓々々、妄想分別で、日を送るなと、五祖の脫空も、隨分大なる者ぢや。

二百六十一　玄沙接物利生

舉。玄沙示衆。諸方盡道。接物利生。忽逢三種病人。作麼生接。患盲者拈槌竪拂。他又不見。患聾者語言三昧。他又不聞。患啞者敎伊說。又說不得。若接不得。佛法無靈驗。虛堂云。大凡病豈止乎三種。玄沙恐人不能接。又憂佛法無靈驗。老僧不惜眉毛。試接此三種人看。卓拄杖。盲聾瘖啞。底近前來。又卓拄杖。不得孤負老僧。更若不會。又與倆下箇注脚。卓拄杖。平生肝膽向人傾。

相識渾如不相識。

瑞阜試接三種病人。盲聾瘖啞。底近前。倆等諦見諦聽諦言。若也不會。則又重說。倆已不見。已不聞。已不言。我亦莫奈倆何。速退速退。既已濟度了。何故。高聲唱言。我不敢輕於汝等。汝等皆當作佛。

是れは虛堂が、盲聾瘖啞の三種病人を、濟度する、玄沙の意旨を、拈評せられたのぢや、三種病人と云ふが、三種に限らぬ、八萬四千の病ひがある、然れども玄沙の意は、人の之を接する能はざるを恐れて、佛法に靈驗なきを憂へて、特に三種病を擧げられた、乃公も此三人を接せん、看よ、拄杖を卓して、盲聾瘖啞、底近前し來れと、斯樣な自由の働らきは、此の則を承知した者で無いと、能きぬぞ、又拄杖を卓して、乃公に孤負まいぞ、更に若し會せずんば、拄杖を卓して、平生の肝膽、人に向つて傾むく、相識は渾て、不相識の如し、嗚呼面白い句を將て來た、乃公は平生少しも包みもせず、肝膽を披瀝して、爾に知らぬ、振りするは、猶ほ憐を催すと、斯うも能く出た、中々及ばぬぢや、雪竇復云く、還つて會すや、無孔の鐵鎚と、是れ竇の一振刀ぢや、山僧も立道道はんと、盲ど聾瘖瘖、皆能く近前しせよ、用は濟んだ、退後せよ、以後山僧に、負くな、忘れなと、三人云く、敢て命を受く、復た敢て負かすと、既に是れ接取し了れり、是れ虛堂底を、重ねて注解一返するのみ、三種病人

を接せすと、看る勿れ、咄。

二百六十二　眞如至道無難

擧。眞如上堂。至道無難。言端語端。高亭横趨而去。雪峯九到洞山。鹽咬釣魚竿。蛇啣老鼠尾。

眞如和尚。說何高亭横趨。雪峯九到。至道無難。難何故。言端語端。解者多會者鮮。畢竟如何。曲終人不見。江上數峯青。

這は趙州の至道無難を、拈評したか、趙州は三祖の語を拈して、一重高し、眞如は趙州底より、又數層の高き調あり、至極の大道は、無造作ぢや、其無造作は、怎んな樣子か、言端語端と、雪竇和尚來也、何の言端語端とか說かん、眞如又拈し去りて、一回擧著、一回新たなり、なぜか高亭は、德山に參し、江を隔て、纖かに便ち不審と云ふ、德山扇を搖かし、之を招く、師乃ち横に趨つて去る、言端語端ぢや、雪峯は九たび、洞山に到り、千辛萬苦す、至道無難ぢや、未だ开れでは、解らねば、鹽が釣魚竿を咬み、蛇が老鼠尾を、啣むとさ、是れは眞如說き、過ぎたり、言端で無い、語端でない、趙州唇皮口吻底も、猶ほ及ばぬ、眞如少しく遠慮召され。

二百六十三　溈山問仰山

擧。溈山問仰山。終日向火爲甚無暖氣。仰山作向火勢。大燈云。溈仰父子。不妨冷處著把火賓山門下。只要箇箇暖氣相治。何故拈起死柴頭。且向無煙火。

溈仰父子。冷處著把火。大燈暖處拈死柴頭。要皆同志不同心。吾這裏開爐無多子。冷也不道。暖也不道。只是依例十月一使免帽子向火取暖。何故。山僧當門。曾不栽荆棘。免得後代兒孫惹著衣。

是れは大燈開爐に就て、溈仰宗風を、拈じたぞ、溈山仰山に問ふ、終日火に向つて、甚とした、暖氣なき、面白い、此風味を呑み込めば、溈仰宗は、手に入るぞ、鹽林下語して云く、父は子の爲めに隱し、子は父の爲めに隱くす、仰山火に向ふ勢ひを作す、石蓮下語して云く、弟兄各自功能を逞す、獨家兄のみあり、徹骨寒し、仰山の見處は、溈山より一倍高いぞ、此樣子を、篤と呑込て、大燈は拈した、什麼と道ふ、溈仰父子、妨げず冷處に、把火を著るとと、嗚呼面白い、鹽林は飛鳥盡きて、良弓藏ると、下語した、這の處か、溈仰宗の風采、その儘ぢや、寶山門下、只箇々暖氣相治からんことを要す、溈仰父子は、冷い處で、寒い〳〵と、云ふて居るが、乃公は爾うでない、一老も末席も、皆同樣に暖かに怨み子の、無い樣に

と、大燈の面つきを看よ、鶴林は一拶を與へて、大燈獨りでは無い、誰か家の竈裏にも火に烟無いものは無いと、面白い、大燈又云く何故ぞ、死柴頭を拈起して、且つ無烟火に向ふと、巡人夜を犯すはこれぢや、潙仰宗を提起した、大燈の手脚は、面白い、鶴林は狡兎死して、走狗烹らるると下語した、東山下の暗號令は、大抵此の調子ぢや、斯ういふ微細の處に、面目を活捉して、自由に振り廻すでなければ、相談は能きぬぢや。

二百六十四　眞如也道一句

擧。眞如上堂。大衆。諸方道一句眞如也道一句。諸方道兩句眞如也道兩句。等是與麽時節。中間用處不同。忽有箇漢出來。道用翳睛法須是眞如始得。以拂子聳禪牀。三千年黃河一度清。眞如好笑好笑。吾這裏則不然。一句不得在前。兩句不得在後。中間句子。向甚處安。三段不同。收歸上科。若夫如翳睛法。則山僧別有按排。何故。縱然一夜風吹去。只在盧花淺水邊。與眞如疎親試辯看。

這は是れ、眞如の秘訣ぢや、諸方に一句を道へば、眞如も亦一句を道ふ、兩句も亦同じ、同じく是れ、一句兩句ぢやが、中に就て、用處が違ふ、忽ち箇の漢ありて、翳眼の法は、眞如で無ければ、能きぬと云はゞ、拂子を以て、禪牀を擊つて、三千年に黃河は一度清し、箇は是れ翳眼法か、眞如男振りを見上げたと、今の世は目で見たとて、浮名が立つ、眞如大口を吐くも、法がある、斯樣なことは、人天衆前で、言はぬが好い、唖。

二百六十五　顯孝尋常著口合不得

擧。顯孝上堂。尋常著口合不得。蓋不在乎語言之間。若涉語言。摩竭提國。遂成虛設。畢竟在那裏。卓拄杖。巡人犯夜。

顯孝老人。太煞饒舌。只是爲道巡人犯夜。若是山僧底。則人天衆前。目顧四方。大聲道。座上無老僧。目前無閻梨。與顯孝相去多少。試道將來看。

是れは顯孝老婆親切。覺ゑず飯を嚼て、嬰兒を養ふ、平生乃公が、口を開いて默せぬは、蓋し語言の間だに齷齪したでは無いぞ、若し取り違へて、語言のことゝ思はゞ、摩竭提國、遂に虛設となり、釋迦の出世は、無益ごといふ成る、本來の面目は、何處かへ飛で、仕舞ふぞ、乃公が口を酷くして、饒舌るのは、全く己奴等の、見性せよ、骨を折れよと、云ふ爲めの慈悲ぢや、畢竟那裏に在るか、看よ、拄杖を卓して、巡人夜を犯す、をゝ言ひ過ごした、夜番が盜をしたと、嗚呼面白い、上堂の名人、十八番を遣つた。

二百六十六　太平一月現一切水

舉。太平上堂云。一月普現一切水。一切水一月攝。誠哉是言也。可謂塑不成畫不就。昨夜三更。白如畫。石蓮著語云。謝答話。

此上堂看做現成底。則三十棒。不看做現成底。亦三十棒。何故。知法者懼。

是れは證道歌の語ぢや、一月普ねく現ず、一切の水、一切の水、一月に攝す、庭にはへる、ちり〳〵草の露までも、身をば細めて移る月影。僧俗男女、皆彌陀を具せぬものは無い、本を見徹すれば、只一體の佛ぢや、這箇の味は、形ち造ることも成らぬ、繪にも書けぬ、其證據は、昨夜三更、白きこと畫の如し、月夜でない時は、猶ほ明かるかろう、面白いことぢや、現成底と見て置くまいぞ。

二百六十七　禾山解打鼓

舉。禾山垂語云。習學謂之問。絕學謂之鄰。過此二者。是爲眞過。僧出問。如何是眞過。山云。解打鼓。又問。如何是眞諦。山云。解打鼓。又問。即心即佛。即不問。如何是非心非佛。山云。解打鼓。又問。向上人來時如何接。山云。解打鼓。

解打鼓。無孔鐵鎚。當面擲。眞過眞諦且置。向上人來亦解打鼓。山僧曾有頌云。將謂黃連甜。於蜜。誰知蜜苦似黃連。禾山打鼓君看取。非祖師禪非別傳。咄。看看禾山四打鼓。鐵槪鐵蒺藜。使爾不能揉齒牙。此語不涉理性。亦無議論處。直下咀嚼。百味具足。雪竇頌云。甜者甜兮苦者苦。端是脫體現成將去。脫或錯爲陀羅尼會去。一箭過新羅矣。

這は是れ禾山が寶藏論を將ち來りて、横拈倒用したのぢや、寶藏論は、肇法師刑に臨んで、七日の暇まを請ふて、作る所なり、習學之を問と謂ひ、絕學之を隣と謂ふ、此二學を過る者、是を眞過と爲す、箇の僧一見處を具して、此眞過を以て、禾山を把つて、拋げんとす、山云く、解打鼓、能く鼓を撾と云ふ義なり、是れ什麼圓悟は鐵槪、鐵蒺藜、確々と、下語した、禾山の手許の堅固なること、齒も立たぬを云ふ、僧又眞過を超ゑて、眞諦は、如何と問ふ、禾山云く、解打鼓、又問ふ、即心即佛は、即ち問はず、如何か是れ非心非佛、山云く、解打鼓、また〳〵、又問ふ、向上の人來る時如何、山云く、解打鼓、まで、止めたか怎か、何んと、禾山は、困つた漢ぢや、祖門に斯かる、厄介物も、寡かるべし、解打鼓解打鼓、四に至る、禾山の四打鼓、是れ如來禪か、祖師禪か、蜜か、黃連か、黃檗樹頭に、木蜜を生ず、此等の語話、實に奪命の、神符ぢや、雪竇能く、此家風を見て、頌したぞ、一石を拽く、(歸宗)二士を搬す、(木平)機を發するは須らく是れ、千鈞の弩なるべし、开れのみではない、

象骨老師も、曾て毬を輥したか、まだ寒い者がある、禾山の解打鼓ぢや、开れで乃公は、若に報じて、知らしむ、葬鹵なることなかれ、甜き者は甜く、苦き者は苦しと、是れ什麼、雪竇の一振刀ぢや、てれまでは、導いて置くが、觸著すれば則ち頭既に前に落るぞ。

二百六十八　五祖謝首座

舉。五祖謝首座上堂云。槌破蟠桃核。得見其仁。將斷驪龍頷。得過其寶。雖然如是。也未是好手。黄帝失玄珠於赤水。使智索之。而不得。使離朱索而不得。使契訶索之而不得。乃使罔象。直饒罔象得之。亦未是好手。爭似今日與大衆。同使一箇通事舍人。雖然如是。也只得一半。破蟠桃核。得見其仁。驪龍頷下。得過其寶。罔象能索玄珠。得之。俱未是好手。如何是好手。通事舍人。莫道通事舍人。離婁爭辯正色。師曠豈識玄絲。是れは五祖の上堂ぢや、其要は後面の末句に在るぢや、蟠桃は三千年に開き、三千年に實を結び、三千年に熟すと云ふ、希有の桃核を、鐵槌で打破し、其果實を見るも、又恐るべき、驪龍頷下の寶を得るも、未だ好手ではない、黄帝の失へる玄珠を、離朱も契訶も、索め得ざるを、罔象が之を得たと云ふも、未だ好手では無い、乃公が今日大衆と、一箇の通事舍人を、使役する、事々意の如く、思ふこと協はぬは無い、前の二者の好手に、比すれば、迦

かに勝れてある、然れども、只一半を得たばかりぢや、是れ什麼、之を道いたさのことよ、只一半を得たり、面白い、至般を得たものはない、釋迦も彌陀も、一半を得たり、毘婆尸佛、久しく心を留めたが、今に妙を得ぬが、面白い、妙を得たと云はゝ、沒交渉ぢや。

二百六十九　宋太宗托起寶鉢

舉。宋太宗皇帝。托起寶鉢。問王隋相公。既是太庚嶺頭提不起。因甚在寡人手裏。相公無對。後來慈明代云。陛下腕頭有力。虛空拈云。君臣慶會。日照天臨。若是太庚嶺頭底。物歸有主。瑞阜代云。陛下既握乾軸。鼎之輕重大小。誰敢問之。寶鉢固是邦家之有。固不足怪也。宋の太宗、寶鉢を擎げて、王隋相公に問ふ、禪機頗る溢れてある、王隋の對へざるは、却つて太宗を、勘破した處ありて、面白い、明覺の代語、是は則是なりと雖も、虛堂の物は、有主に歸するに比すれば、猶ほ及ばざるあり、若し是れ山僧ならば、這箇の寶鉢、今ま陛下の手に歸す、既に是れ、陛下の寶、誰か敢て、其大小輕重を、問ふ者あらんやと、道はん、虛堂と相去る多少ぞ、試みに甄別して看よ。

二百七十　佛光冬夜小參

畢。佛光冬夜小參。僧問。寒暑不到處。衲僧如何進步。師云。有馬騎馬。無馬步行。乃云。枯木巖前。冷灰堆裏。住山活計苦無多。三箋束腰隨分過。說甚砂飛石走。且看凍落茅簷衣。穿肘露可憐生。不免貧兒思舊債。且道。思甚麽債。二祖見少林。無端禮三拜。好語不說盡處見妙。佛光拈出貧兒思債句。而轉及乎此。掉尾有力。何故。錢出急家門。

這は是れ、佛光冬夜の小參、向上に拈じたぞ、僧問ふ、寒暑不到の處、如何が歩を進めん者の僧少しばかりの、修行は能きた奴ぢや問話底に、一機を含み來る、寒暑不到の處とは、進修功窮して、發展の路なき時は、怎ぢやと、斬り掛けた、そこで佛光は、進むに苦はない、馬あれば、馬に騎り、馬無ければ、歩いて行けと、無造作に、答へた面白いして提綱に云く、枯木巖前、冷灰堆裏とは、是れ什麽ぞ、鼠錢筒に入つて伎既に窮まる場ぢや、大死一番の地に到らざれば、絶後に再蘇することは能きぬぢや、衲僧住山の活計は、無造作ぢや、竹繩二筋三筋、腰に束ねて、薪を拾ひ、鍬を擔ふて、田を耕して、是れで好い、別に水瓶に、火の出る樣な、奇妙不思議なことは要ぬ、冬に至ると、凍柱が茅檐より落ちて、寒くなる、衣は破れ、肘が露はれて、素寒貧なる、氣の毒な、有樣ぢや、これが堪らん味があるさ、斗から、じて、貧乏になると、昔の債を、折々思ひ出す、ぢや、怎う思ひ出す、二祖が少林にて、逢磨に逢ふたとき、端なく、禮三拜した、是れ什麽、斯樣な名句も、出るものか、大唐日本に、禪錄多きも、此等の語は無い、實に光前絶後、國師の名作ぢや、講釋も說明も、迚も能きるものか、恁麽な句で、佛光を拜め。

二百七十一　龍寶彌勒千百億

舉。龍寶上堂拈拄杖云。彌勒眞彌勒。分身千百億。卓拄杖云。時時示時人。時人自不識。拈拄杖下座。

處處尋彌勒。彌勒麗不億。慕路忽逢頭。相逢不相識。

龍寶上堂。勞頭拄杖を拈じ、鼻の先きに、衝き出して云く、彌勒眞の彌勒、分身千百億、これで龍寶を看よ、講釋も能きぬ、夫から又拄杖を卓一下して云く、時々時人に示す、時人自から識らず、鼻先きに、衝きつけて有るが、聾に鉦砲ぢやと、嗚呼好い、絶代の名作ぢや、拄杖に靠つて下座、鶴林下語して云く、一鉢千家の飯と、面白い、斯んな名作に、出會すると、胸の癖も、一時に降下す、暑中に冰雪を、沃ぐ樣で、壯快述るに、語は無いぞ、咦。

二百七十二　夾山示衆直須揮劍

舉。夾山示衆云。若論此事。直須揮劍。若不揮劍。漁父棲巢。虛堂拈云。夾山未得與物俱化。致令影草之流。認驢作馬。

夾山直須揮劍。揮劍卽是與物俱化。虛堂不肯之。則可惜許。雖然者老。寸鐵殺人。夾山示衆。有兩刃交鋒不須避底之手段。若見徹透。兼中至。則此話冰釋。儻不然。則難難。要之夾山虛堂。同道唱和。山僧試著語云。舜往于田。號泣于旻天。

是れは夾山の示衆ぢや。此事別に奇特は無い。只直に須らく吹毛を揮ふて斬去り斬來りて。盡すべし。斬盡したる當體。卽是れ好手還つて火裏の蓮に同じ。若し然らずんば。漁夫が樹の巢に棲むが如し。爭でか魚を得ん。漁夫の魚を得ざる殃ひなきも。此事若し劍を揮はざれば。煩惱百結天魔外道が。法身を害すと。是れ夾山の特に垂示する所なり。虛堂は之を以て。夾山は物と化せずと。評論し去るも。然れども。夾山底は。兼中至已下の境界あり。所謂無中に路あり塵埃を出づる底の樣子なれば。物と和せざるのみか。和泥合水的ぢや。虛堂別に仔細ありての事なるべし。

二百七十三　眞如冬節上堂

舉。眞如冬節上堂。一陽生萬物亨。短者自短。長底自長。老胡如會此。應不見趙梁。

一陽來復。萬物大亨。鴉不染黑。鷺不浴白。老胡如會此。應見趙梁。何故。三八九。

是れ眞如。冬至の上堂ぢやが。妙な處へ眼を著て來たな。一陽生ずる後ち。萬物咸とく亨り。長者は長。法身短者は短。法身で。別に變つたものはない。達磨祖師。浮として居たが。之を知らずに。西天より支那に來りて。武帝抔と商量したるは。笑止なりと。山僧は然らず。鴉は染めずして黑く。鷺は浴せずして白い。是れならば。達磨は是非とも武帝に逢はねばなるまい。

二百七十四　龍寶謝英都寺上堂

舉。龍寶十一月旦。謝英都寺。上堂。寒風匝地。塞鴈橫空。辨玉正按。磨塼旁提。頭頭都顯露。物物總現成。何故。蓋是英靈衲子。只爲向事上見。

者箇語話。托上乎抑下乎。道事上。事上。事上。竪拂曰。臨財不恪。計納知出。出納之吝。謂之有司。英也。非有司。具靈骨底衲子。事事無礙。事事融通。大燈謝勞固宜。而物物頭頭。所不可謂衲子如何著手。

工夫英の字より。得來りて。事を以て。理を奪ふぢや。蓋し英靈の衲子は。必ず事上に向つて見る。事無碍頭頭物物。現成底に於て。能く宗旨を擧揚する者は。卽是れ宗門の英衲。

と、謂つべしぢや、英都寺、這般の伎倆を、具するや否や、然れども、大燈は之を許可したり、山僧は未だ其英たるの事を見ず、蓋し或は、之あらんか。

二百七十五　大應法無定相

舉。大應國師小參。法無定相。迥緣卽宗。立處皆眞。隨方作主。離興德。到崇福。莫非其緣。建法幢立宗旨。不擇其處。直得風淸六合。月明四海。頭頭合轍。應用無虧。所以道。要知佛性義。當觀時節因緣。時節旣至。其理自彰。時節則諸人共知。且道。彰底理。又作麼生。良久云。吾無隱乎爾。

崇福老師。恁麼得拖泥帶水。建法幢立宗旨。今旣得其處。離興德。到崇福。也合其緣。乃知時節因緣熟。則師德應之。而衆望赴之。旣知時節。也隨知彰底。吾道裏卽不然。欲彰之則彌隱。父爲子隱。子爲父隱。且道。崇福不隱底。瑞阜隱底。相去多少。試辯看。

法幢を建て、宗旨を立つ、其處を擇まずや、大應も昨日は姪濱に住したが、今日は福岡に移る、頭々轍に合し、應用虧ること、無しぢや、新崇福底は、是れ舊興德底ぢや、大應は、彰はす底を、主張して、隱す底を、嫌ひ、吾れ爾に隱すこと、無しと、云はれたが、隱すも好し、怎で、彰はした底を、觀ることゝ、能はざる者は、隱したは、猶ほ見ることゝ能はず、隱すと、遂つて、見たがるぢや、隱すも亦可なり、然れども、本來隱す的の、法はない、頭頭顯露、物物全眞ぢや、直に見て、取れ、直に聞て、取れ。

二百七十六　龍寶因雪上堂

舉。龍寶因雪上堂。少林立鷲山坐。爲相逢不相知。趙老臥龐公指。只要知而故犯。若是我這裏。直饒銀碗裏盛將來。也是老鼠引生蟲。

少林鷲山。相逢不知。趙州龐公。知而故犯。龍寶老鼠引生蟲。也是巡人犯夜。瑞阜獨愛雪竇。脫體現成。無乎隱爾。乃云。夜深共看千巖雪。也是日中打午夜看看。

古來雪を拈じて、翫ぶもの多し、而して未だ其巴尾を、形はすを免かれず、龍寶は大に巧みぢや、然れども、巧に過るが、故に、翻つて、拙と成る、面白いことぢや、如何なるか、是れ龍寶の、拈雪底ぞ、少林は立ち、鷲山は坐はり、趙老は臥し、龐公は指す、各々面白い、獨り大德は、然らず、直饒ひ、銀碗裏に、盛り將ち來るも、乃公は、賞翫せぬぢや、なぜ賞翫せぬか、是れ亦鼠が、生蟲を、引き出して、咬り著くも、同じぢや、一向趣味は、無いと、爰で、大德を、取り、道がすな、此語の、棟れ、黴梅、搗ちん、味がある、大德に、亞いで、斯かる、好語を、出すものなかるべし、嗚呼、面白いことぢや。

二百七十七　眞如除夜小參

擧。眞如除夜小參。僧問一言道盡時如何。師云。老僧性命。在伊手裏。乃云。一言道盡萬法皆如。一句截流千差合轍。有時奪人不奪境。有時奪境不奪人。有時人境俱奪。有時人境俱不奪。袖短臂膊長。貧作富裝裹。六隻骰子滿盤紅。撒向君前活鱍鱍。良久。謾說北禪烹落地。風流出格讓眞如。

言鋒未擧逼人寒。不許蒼龍潭底蟠。握土成金猶可易。變金爲土却還難。難奪境奪人易。自看三尺吹毛跳出匣。峻機閃電玉走盤。北禪除夕烹落地。一梧分羹共飽餐。

是れは眞如の除夜小參ぢや。衲僧の命ち取りぢや。見損じな。箇の僧無眼子ではない間。處に骨がある。そこで佛光云く。乃公の性命は。己奴の手裏に落ちた。此處で佛光を見よ。油斷ならぬ。言句ぢや。乃云已下は。提綱ぢや。一言道ひ。盡したる當體。萬法皆如ぢや。臭氣鼻を掩ふに暇あらず。一句流れを截る。千差皆轍に合ふと。合頭窠裏ぢや。豈に這般の事あらんや。然れども。臨濟の四料簡も。之より運び出るぢや。今日眞如は。袖短かくして。臂膊形はれ露出して長く。貧乏の癖に。服裝を飾りたがる。おつと。有卦に入つたか。賽の目も。六隻ながら。盤上に。重六を撒た。是れで乃公も。勢がついて。來たぞと。氣餒を吐くか。

是れ何の爲めか出た〳〵。北禪の露地白牛が出て。だけれども。今日は風流出格。眞如が持ち切りで。北禪も遠慮するが。好いと。是れ什麼。佛法か賽の目か。但しは北禪と。眞如の角力を。取るのか。此等が見て來ないと。禪も面白味は。寡ないぞ。

二百七十八　崇福除夜小參

擧。大應除夜小參。年窮歲盡。瞿曇眼睛突出。臘盡春回。達磨鼻孔崢嶸。開眼也著。合眼也著。擧步踏著。伸手觸著。築著磕著。塡溝塞壑。頭頭顯露。處處逢渠。恁麼也得。不恁麼也得。恁麼不恁麼總得。山僧與麼告報。忽有人聽得出來道。我會也。崇福低低地。向他道。謝三郎秤金崇福與麼告報。也太奇。奈何臘月三十日。瞿曇眼睛。掛壁烏律律。達磨鼻孔。遂天登崢嶸。雖然今夜。山僧扳轉一過。老胡也不能誇其伎倆。塡溝塞壑。總用不得。何故。結交頭尾也討甚麼閑絡索。

臘月三十日は。釋迦も眼球を。轉廻して。債鬼に。趁立てらるゝ。一夜曉ると。達磨も鼻を高うして。氣燄を吐くであらう。眼を開く。暫間も得たり。眠りに就く。夜間も得たり。總て擧足下足。右往左往。藥草磕著渠に。出逢ふ。山にも。徧滿。野にも。充塞。爾うぢやと。云も得たり。爾うでないと。云ふも。亦得たり。大應如是の告報。早く是れ。淨地上に。屎を撒す。況して事

の忙はしき臘末、豈に我會せりと聽くの餘地あらんや、然れども、崇福風流面白い、爾う大聲で言ふな、彼謝三郎の、借金一件ぢや、是れ什麼、山僧は聞いて、直に急急如律令と云はん。

二百七十九　虛堂小參等是恁麼時節

擧。虛堂結夏小參。等是恁麼時節。何不便領取去。西天廣額屠兒。放下屠刀。我是千佛一數。可煞性燥。若約衲僧門下。猶是半提。而況立期立限。坐守化城。比擬張麟兎。亦不得。息耕叟尋常多是向三句前兩句後。放一線地。與諸人整頓手脚。若也知慚識愧。九十日內。不得忘却老僧。

息耕老人。思兒念孫。嚼飯養育。只是乳中有毒。九十日內。不得忘却老僧。者老賊咄。又道。三句前兩句後。太煞斬新。是什麼句。峋嶒崒嵂頭神禹碑。將謂由別人。賴逢自道。猶把琵琶半遮面。不令人見轉風流。何故。因思長慶陸太夫。解道。合笑不合哭。

是れは虛堂の、結夏小參ぢや、前回大應の、除夜小參は、三面六臂の忙がはしさに、塡へなかつたが、今ま息耕は、什麼と、道ふ、廣額屠兒は、屠刀を放下して、我れも亦千佛の一數と、絶叫した、皮下に血ある、衲僧家が、見れば、猶ほ是れ半分にも、屆かぬぢや、況して、九十日修證、九十日の間だ、沈著と、坐つて居る、何の役にも、立ぬぢや、麒麟を網の中に、入れんとして、一頭の兎も、離つて、來ぬ、息耕已下は、例の虛堂の、得意の、手が出たぞ、無闇に、歩くと、網に離るゝ、息耕は、三句の前、兩句の後に、向つて、諸人の爲めに、手脚を、整頓せんと、しつつあるは、好いが、九十日內に、老僧を、忘却するを、得ざれとは、是れ、怎ぢや、前箭は、輕く、後箭は、深し、如今、慚愧を、識るの、漢ありや、若し、無んば、怎する、山僧も、亦奈何する、能はず、此處は、人々の、腕前で、自知せよ。

二百八十　白雲上堂如何是白雲境

擧。白雲結夏上堂。僧問。如何是白雲境。師云。七重山鎖潺湲水。學云。如何是境中人。師云。來千去萬。學云。人境已蒙師指示。向上宗乘又若何。師云。面赤不如語直。乃云。此夏居白雲。禪人偶聚會。三月九旬中。尊卑相倚賴。粥飯與茶湯。精麤隨忍耐。逐意習經書。任運行三昧。彼此出家兒。放教肚皮大。

白雲老人。傾誠心來。供養大衆。使得飽滿。且道。圖箇放教肚皮大。而爲什麼。禪家者流。要膽大心小。志密行。亦密。功深悟。亦深。直饒呑雲夢八九了。依然太麟生。則何足爲用。須細心綿密。何故。從來把本修行。不敢棄捐。因與。雖然看看。白雲在什麼處。參。耕の結夏に續いて、白雲五祖和尚を紹介す、此上堂は、格別ぢや、面前人境を尋ぬる僧

が、向上宗乘を、問はれた、己奴健啖家めが、耻掻くより、正直に眞實の事を道へと、爰で五祖を看よ。乃云已下は、提綱ぢや、泰龍を履んだ、五古ぢや、要は禪坊主は、兎角腹が太いが好いと、九旬三月、麥飯麁菜に、湯茶を飲み、難難苦行、坐禪習經、隨分の苦勞ぢやが、何處を眺めても、中々難堪、修行ぢやが、兎角衲僧は、腹太が好いか、好いと云ふか、山僧は膽大心小なれと、云ふたは、何細あるぞ、志密になければ、行も亦密にない、功淺いと、悟は深くないぞ、只野猪に、介した樣で、向ふに進むのみでも、功は無い。

二百八十一　洞山寒暑到來

舉。僧問洞山。寒暑到來。如何廻避。山云。何不向無寒暑處去。僧云。如何是無寒暑處。山云。寒時寒殺闍梨。熱時熱殺闍梨。

洞山宗風。孤危峭峻。學者望崖而退。雪竇頌云。垂手還同萬仞崖。正偏何曾在安排。可謂知言矣。這箇公案。通身紅爐。徧身冰裂。則庶幾乎學道乎。蓋他設五位君臣偏正回互之旨。畢竟爲救學者病而已。凡不墮有則偏。無不墮凡情。則陷聖解。故先聖垂手。以除此諸弊。要但除其病。而不除其法。猶國家兵器。固出于不獲已焉。脫或不然。守株待兎。不啻辜負洞山。昧沒自己佛性。畢竟如何。君子愛財。取之有道。

是れは今日、此頃の樣に、炎天烈日の時で、あつたらうが、一人の坊主が、洞山に問ふに、暑い寒いを、避けられるで、あらうか、此樣の暑さは、何處に、避けたら、好からうと、洞山云く、左れば、にや、そんなら、何ぞ無寒暑の處に向つて、避けざるやと、面白い答ぢやが、此坊主は、無寒暑の處、別にある者と思ふて、又問ひ返した、凱漢め、洞山に附て廻つて、何をする、臨濟、德山ならば、直に棒が、降るが、洞山は、格別ぢや、左れば、にや、寒時は、闍梨を、寒殺し、熱時は、闍梨を、熱殺す、此語容易に、見ねぬぞ、只寒い時は、寒い、暑い時は、熱いと云ふ、一點張りの事では、上わ汁も、呑ねぬぞ、此の則は、五位を、透過した者で、無ければ、眞實に、見ねまい、以て洞山の宗旨、孤峻なるを知るべし、辯を著たいが、却つて學者の悟門を、妨ぐが、故に止める。

二百八十二　趙州參臨濟

舉。趙州行脚時參臨濟。遇濟洗脚次。州便問。如何是祖師西來意。師云。恰値老僧洗脚。州近前作聽勢。師云。更要第二杓惡水潑在。州便下去。

拈云。二老相見。龍袖拂開。全體現。州近前作聽勢。涅槃不繼。麟不磷。濟云。要第二惡水潑在。養鷄意在五更天。州便下去。白狼河北音書絕。丹楓城南秋夜長。然雖如是。西來不直半文。

錢唱。

山僧は此則はを、向上に摺り上げ、箭鋒相拄へた、もの以無いと思ふ、斯かる活劇活商量は、外に澤山は、あるまい、虚堂錄には、臨濟が趙州に參じた樣にしてある、先づ雙龍の珠を、爭ふの勢ひを見よ、趙州問ふ、如何なるか、是れ祖師西來意と、寶劍影動く、師云く、丁度好い、老僧が今ま、脚を洗ふ處ぢやと、龍袖拂開して、全體提起とは、爰ぢや、徹上徹下、拋げ出したぞ、州近前して、聽く勢ひを作す、是れ亦州の働らき、美事なものぢや、師云く、更に第二杓の惡水を、潑ぐを要すと、愚圖々々して居ると、小便を頭から、潑せ掛けるぞと、州便ち下り去る、此處は世間上より見れば、趙州は負けて、尾を下げて、遁る樣にあるが、此の下り去るは、重きこと、萬鈞ぢや、并汾絕信、獨處一方の樣子がある、此等の則は、末後の句を、練り上げた者で、なければ、容易に、見られぬぞ。

二百八十三　龐居士辭藥山

擧、龐居士辭藥山、山命十人禪客、相送至門首、居士指空中雪云、好雪片片、不落別處、時有全禪客云、落在什麼處、士打一掌、全云、居士也不得草草、士云、汝恁麼稱禪客、闍老子未放汝在、全云、居士作麼生、士又打一掌云、眼見如盲、口說如啞、雪竇別云、初問處但握雪團便打、

息耕拈云、雖則是兩掌、其間有搓有搦有收有放、雪竇云、雪團打、山僧卽不然、兩箇老漢、只觀翫雪、而未會其節在、龐老下山、漫漫之雪、雪上加霜、救之亦何益、況乎以干戈、言鋒相爭哉、故初問處、但道天候不穩、居士途中健在、則他亦首肯去、何故、禮之用以和爲貴、

龐居士、藥山を辭す、山乃ち十禪客をして、門首に送らしむ、居士が藥山に重せらるゝ、斯の如し、時方に雪降る、居士乃ち、空中を指して云く、好雪片々、別處に落ちずと、別に名語でも無いが、一機を含めり、此時若し藥山、茲に在りしならば、居士も亦滿面の慚惶なるべきに、幸ひにして、青小僧の全禪客で、有つた故あ、居士も思ひ掛けない、光明を爲した、そこで全禪客は、什麼の處に落在すと、拶したは好いが、全く居士の圈繢の內に墮在した、死語ぢや、居士の一掌に、全猶は悟らずして、己れも料簡ある爾う〳〵、無闇みに、龐棒は受けぬと、可惜許、青龍に駕興すれども、騎るとを解せずとは、全の謂なり、居士の善い、翫弄と爲るも、詮方はない、已奴禪客と稱するも、开れ的の禪では、闍老の面前に、鐵棒を遁るゝことは、能きぬと、丸で、臺座後光までも、引つ奪られて、又一掌に逢ふ、居士云く、眼見て盲の如く、口說て啞の如し、是れ全禪客に當つて、云ふ樣だが、居士爰に謂ふべからざるの機あり、雪竇云く、初問の處、但雪團を握つて、便ち打たん、是も雪竇の黑火坑ぢや、只滿目雪だらけにせよと云ふには、非ず、便打は雪を握るや否や、居士を打たん

と見るが爾うでない、是れは雪竇屋裏の秘訣ぢや、講釋はならぬ、山僧は別に見る處あり、拈評に擧げたぞ。

二百八十四　五祖上堂有一則因緣

擧。五祖上堂云。昨日有一則因緣。擬擧似大衆。却爲老僧忘事都大。一時思量不出。乃沈吟多時云。忘却也忘却也。復云。敎中有一道眞言。號聰明王。有人念者。忘卽記得。遂云。唵阿盧勒鷄婆婆訶。乃拍手大笑云。記得也記得也。覓佛不見佛。討祖不見祖。甜瓜徹蔕甜。苦瓠連根苦。下座。

這老沈吟多時不得。道什麽胸繫百萬軍馬。忘却了忘却了。作賊人心虛。記得也記得也。賊身已露。覓佛不見佛。討祖不見祖。梱載而往。垂橐而歸。山僧也有聰明呪。忘忽記得。逢佛說佛。逢祖說祖。一朝撞著于渠。卽捉敗了也。既而復失却。畢竟去什麽處。天竺茫茫討無處。夜來依舊宿乳峯。

此自由なる境界を看よ。昨日一則の因緣あり、大衆に擧似せんと、思ふたに忘れた、仍て沈吟暫時して、聰明呪を念じて、忘卽記得す、箇の什麽をか記得す、佛を覓めて、佛を見ず、祖を討ねて、祖を見ず、甜瓜甜苦瓠苦と、便ち下座、是れ什麽、一顆の明珠、盤上に旋轉するが如し、宛轉また快走、端倪すべからず、卽ち是れ、五祖の法に於て、自由なる處ぢや、而して看來れば、工夫只是れ、忘記の二字に在り。

二百八十五　定上座參臨濟

擧。臨濟因有定上座。到參。問如何是佛法大意。師下繩牀。擒住與一掌。便托開。定佇立。傍僧云。定上座何不禮拜。定方禮拜。忽然大悟。

拈云。定上座江北人。所謂北方之强。剛毅木訥。垂示爲人。全用臨濟機鋒。山僧曾有頌云。臨濟機鋒脫出新。江南江北殿烟塵。尿上鬼子捉將了。天下橫行不見人。他是當時被濟一掌。而佇立。風光可愛芙蓉不及美人粧。水殿風來珠翠香。

前則は五祖の忘卽記得の因緣ぢやが、是れは又面白い、定上座は、向北の人、木强剛毅、一方向きぢや、故に其所證は、亦端的也、敎に所謂直心是れ道場と、同じく、顧眄も、觸らずに、直進直行は、他の長處ぢや、臨濟の下繩牀、擒住與一掌、便托開に、依て、定上座、斗方に、暮れて、暫時佇立して、何の所作も、なかりき、是が、多年、禪定力の、熟した、證據ぢや、其處で、傍僧は、三聖に非ざれば、興化でも、有らうとの、評ぢや、氣を利かして、禮拜せしめた、定上座不圖、禮拜、面を、擡げた、拍子に、方りて、氣が、付いた、之を、三日も、四日も、立たして、置けば、猶ほ

面白かつたに、傍僧氣が、利き過ぎたは、惜いことぢや。

二百八十六　投子大死底

舉。趙州問投子。大死底人。却活時如何。投子云。不許夜行。投明須到。

問。既嶮峻。答亦峭絶。看作家相見。別有生涯。兩刃交鋒。以毒攻毒。雪竇頌道。不知誰解撒塵沙。果然祖眼佛眼。萬斛塵沙。撒來始好。卽今作麽生道。喏。

是れは前の定上座佇立と、似て居る。趙州が投子に大死底の人活きた時は、如何と問ふたに、投子の答へは、破天荒ぢや、夜行を許さず、明に投じて須らく到るべしと、明中に暗あり、暗裏の明と、明暗雙雙底の、時節ぢや、夜游びはならぬ、日中に道を歩るけと、投子何の見る處ありて、斯の如く云ふや、何處が面白い、大死一番底の人ならば、直に解るぢやが、煮ゑ切れぬ、半青半黄では、埒が開かぬぞ、最も本則の如きは、向上の機を弄した、投子の爲人、濟度底の機緣で、格別な故に、雪竇も頌中に、此趣むきを、活中有眼、還同死藥、忌何須鑒作家と、云はれたは、是れぢや、斯の如き孤危嶮峻なる則は、古佛もまだ言はぬ、誰か此處に、一握りの目潰しを打込て、悟りの臭味を、拔くものは無いかと、爰が面白い、投子ならでは、此働きは、能きぬとの意なり、學佛こゝに到らざれば、多くは外道の見に墮る

ぢや。

二百八十七　白雲上堂船上無散工

舉。白雲上堂云。船上無散工。時時事不同。昨朝城廓裏。今日白雲中。且道。不動尊在什麽處。自云。氣似囊袋。合人可愛。

咄。哉。拙郎君。巧妙誇多能。在白雲也眼睛烏律律。在於城廓也。三面六臂。自云。氣似囊袋。合人可愛。咄。這不動尊。合憎不合愛。

白雲は面白い、剽輕の和尚樣ぢや、囊袋の樣に、吐いたり、吸ふたりして、人と爭はぬ、圓應無方の境界ぢや、昨日は城下繁華の地に、徘徊したが、今日はまた、山中へ還歸して、白雲と居を、同ふせり、思ふて見れば、不動尊餘程氣儘な、出たり入つたり、何處となく、定めのなき境界ぢや、爰で白雲を看よ。

二百八十八　五洩參石頭

舉。五洩初參石頭。洩云。一言相契卽住。不契卽去。頭據坐。洩便行。頭云。闍梨。洩回首。頭云。從生至老。只是箇回頭轉腦。作甚麽。洩於言下大悟。息耕拈云。稠載而往。垂橐而歸。

五洩何不於石頭據坐處薦取第一頭已蹉過了後面方始瞥地也是英靈漢若不入草乎

見端的雖然山僧未横點頭在咄

箇は是れ五洩が石頭に參じたりし時の景況ぢやが、全體渠は眞個に悟つたか覺束ないぞ、石頭據坐の處にて、既に薦得的の場があるに、渠は漸く石頭に生より老に至るまで、只是れ者箇頭を回らし腦を轉じて甚麽をか作すと云はるに至つて、大悟したかも、知れぬが、疑訝しい、息耕も大層らしく、糊載せて往き、槖を垂れて歸ると、拈せられたか、斯う往けば、彼是れ無いが、中々爾う、甘くは往けまいよ。

二百八十九　趙州訪茱萸

舉趙州訪茱萸。萸云看箭。州云看箭。萸云過州云中。佛光拈云。一看箭二看箭。茱萸與趙州。闔髏成雨片。山悠悠水悠悠。閭閻聽小子談笑覓封侯。

瑞阜試和。以充供養。一箭更加一箭。茱萸與趙州。四海靜於鏡。將軍莫夢封侯。華山陽歸馬。桃林野放牛。

是れは一寸趣ひきの變はつた公案ぢや。佛光の拈弄が面白い。趙州と茱萸と兩片の髑髏ぢや。一看箭二看箭過や中也と、鬼窟裏に活計を作すは、則ちこれぢや、中々山も水も

遠いく、汗れより、まだしも、片田舍で、小供等が寄り合ひ話しに、己れは大將になるのぢや、己れも公爵に進むのぢや、己れは大臣に爲るのぢやと、云ふを聽くが、面白い噺し文げでも、活氣があるとさア、佛光怎な顏して、道はれたかを看よ。

二百九十　龍寶拈雲門六不收

舉龍寶冬至小參。僧問雲門。如何是法身。門云。六不收。拈云。諸人一向與麽領。相逢不出手。其或未然。前頭更有雪在。

雲門六不收。碧眼胡僧也數不得。大燈前頭更有雪在。猶是半提。畢竟如何看看。今日冬至節。晝短夜長。晝間九時四十五分。夜間十四時四十五分。咦。

是れは龍寶が大慈悲ぢや。一寸雲門の六不收を見て取り、冬至の節に取り合はした氣轉ぢや。雲門の法身を諸人一向ら、六不收と云ふ、一方に傾注して、此冬至が來ても、手を出さずに居る樣では、法身も死物ぢや。然し多數の中には、爾う云ふ見識のみ抱く者計り、寒がりて、手を出さぬ者が多い、左もなくば、前山に雪が有るを看て、寒氣を恐れ、戰慄するの徒ぢや。なんと薄志弱行ぢやと、大燈を看よ。面皮厚さ三寸。

二百九十一　趙州喫粥了

舉。僧問趙州。學人乍入叢林。乞師指示。州云。喫粥了未。僧云。喫粥了。州云。洗鉢盂去。眞如云。趙州只解順水推舟。致令後代兒孫。箇箇死在句下。

飯茶供爾老趙州。拈弄眞如轉自由。剛按牛頭教喫草。不風流處太風流。

是れは趙州が例の唇皮口吻禪ぢや。然れども。粥中に蟲あり。鉢裏に沙を藏す。大小大の眞如。拈弄して。州の老婆。係り平易に過ぎ。順水に舟を行る。故に。後世兒孫。句下に死在し。て。活氣なきを致すと。眞如の拶到。一應然りと雖も。之を以て。趙州を見と欲せば。蹉過了也。祖庭猶ほ隔つ。十萬八千ぢや。

二百九十二　巖頭三句

舉。巖頭示衆。大凡唱教。須從無欲中流出。三句只是理論。咬去咬住。欲去不去。欲住不住。或時一向不去。或時一向不住。應庵拈云。從上老漢。須得些子說話。息耕拈云。巖頭若行一丈。應庵只行八尺。巖頭行二尺。應庵只行二寸。何故。從來把本修行。不敢棄嫌因果。

巖頭云。咬去咬住。把住則山河失色。放行則草木生榮。欲去不去。欲住不住。在途中離家舍。

離家舍。不在途中。或時一向不去。或時一向不住。白狼河北音書絕。丹楓城南秋夜長。應庵拈云。從上老漢。須得些子說話。鴛鴦繡出呈君看。莫使金針度與人。息耕云。巖頭若行一丈。應庵只行八尺。一人順水張帆。一人逆風把篙。何故。從本把本修行。不敢棄嫌因果。坐水月道場。修空華萬行。瑞阜云。譬諸用兵。巖頭先鋒。一聯當千。應庵中堅。旗鼓整齊。息耕所謂。孟之反不伐。奔而殿者矣。三箇老將。汗馬蓋代勳高。而可惜許。勞而無功。咦。

巖頭の三句は。鶴林も八釜しく。辯せられた。先づ把住放行。把放自在の三に分つて看よ。天台の一心三觀。華嚴の四法界。臨濟の途中家舍。洞山の五位君臣も。要するに。此趣きを。出でぬぞ。然し宗旨は。活物なり。如何なる。妙法藏でも。活用の人が。無ければ。無用ぢや。活句に參せよ。死句に參する勿れと。あるちや。死句下に薦得すれば。自救不了ぢや。巖頭の三句も。亦然り。活句ぢやとて。之に參する者が。死人ならば。句も活きて來ぬぞ。應庵虛堂共に。此話に參して。活句を得たぞ。應庵は從上の老漢。須らく些子の說話を。得べしと道ふた。些子とは。什麼を指したぞ。虛堂は巖頭が。一丈ならば。應庵は八尺。巖頭が一尺ならば。應庵は二寸と道ふ。山僧は爾うでない。巖頭より。應庵が上ぢや。應庵より。虛堂が。一重其上ぢや。元來把本の修行ぢや。因果を棄てはならぬと。虛堂は何を把へて。道ふたぞ。應庵も巖頭も。皆因果の人ぢやと。道ふならば。且得沒交涉ぢや。是れには。虛堂も中々に。骨

を折られた見ゐるか怎ぢや、此處で宗旨の味を咀嚼せよ、水月の道場に坐じて空華の萬行を修す底は、稍相應するなるべし。

二百九十三　白雲自出化緣回

舉。白雲自出緣化回。上堂云。白雲海會院。足水乘柴炭。唯少麻與麥。衆人皆盡見。親去化檀那疎。却阿羅漢。且望大慈悲。一看佛面。大衆。佛身充滿於法界。且作麽生看。我道不隔一條線。

瑞草拈云。巡人犯夜。

白雲化緣より海會院に回つての、上堂ぢや斯う露骨に表白したは、面白い。水と柴炭は、澤山ぢやが麻と麥とは、乏しいで、一衆親化に出掛けた檀越方は、阿羅漢を輕忽にして、不可ぬよ。願はくは慈悲を垂れ、一々佛面を看んことを望む。五祖は助才の無い人ぢや、能く饒舌りて、佛身を演述す。佛身法界に充滿すとは、曾て聞く所なり。其佛身を看るは、一條線を隔てぬとさテ、へーい。五祖法演和尚は尊公か。咄盜人の皮め。

二百九十四　南泉一株花

舉。陸亘大夫。與南泉語話次。陸云。肇法師道。天地與我同根。萬物與我一體。也甚奇怪。南泉指

庭前花。召大夫云。時人見此一株花。如夢相似。

巖頭云。此是向上人活計。只露目前些子。如同電拂。本則之謂也。且道。大夫與南泉。恁麽說話。汝若何承當。大夫境界。是則是。可惜許。佛界則可入。魔界不可入者矣。猶是功勳邊事。謂之驢覷井。南泉則井覷驢。無功用之境界也。雪竇能見徹此端的。頌出。問見覺知非一一。山河不在鏡中觀。霜天月落夜將半。誰共澄潭照影寒。這箇頌。豈可以爾思量分別計較乎。且道。山河不在鏡中觀。誰共澄潭照影寒。擬議不了。則白雲萬里。

此一株花の則は、宗門向上。最後の些子ぢや、十成の人ならでは、容易に手に、入らぬぞ。功勳邊の事ならば、陸亘大夫の、境界にて可なり、奈何にせん、祖庭猶は天涯を、隔つるある。を、南泉云く、時人此一株の花を見て、夢の如く、相似たり、揑怪尤も甚し、近くべからず。南泉此一株の毒華を、持ち來て、大夫の庭前に、移し栽ゆ、陸亘は忠花を、賞翫するに堪へぬ、可憐生ぢや、大夫は曾て、佛界に入るの人、順を愛するも、今や此魔界の毒藥を、眼中に入れて殆んど瞎せんとす、面白いことぢや、此等の難透を、浴せ掛けて、眼膜を瞎却せざれば、俊介は生れ來ぬ、流石の南泉、毒を將て、毒を攻む、雪竇專ら無功用邊を、以て頌し盡す、亦是れ砒礪狠毒、人を殺す底の、手脚を看よ、眼皮綻ろぶる底の漢も、亦後ろに、瞠若するぞ。

二百九十五　臨濟十二面觀音

擧。臨濟因麻谷到參。敷坐具問。十二面觀音。阿那箇正。師下繩牀。一手收坐具。一手揭麻谷云。十二面觀音。向什麼處去也。麻谷轉身。擬坐繩牀。師拈拄杖打。麻谷接却。相捉入方丈。拈云。珠旋玉轉。擬向則背。麻谷轉身。擬坐繩牀。臨濟拈拄杖打。短袴長袖白紵巾。咿咿月下急推輪。麻谷接却。相捉入方丈。曲終人不見。江上數峯青。

臨濟麻谷兩人の活作略を看よ。美事なものぢや。肩に寸絲を掛けずして、接觸の處。電閃星飛。端倪すべからず。眼を眨ずれば。則ち蹉過す。此等の境界。中々五年十年の修行では、能きぬぞ。一放一收。雙放雙收。看んと欲ずれば。箭既に新羅を過ぐ。

二百九十六　風穴祖師心印

擧。風穴在鄧州衙內。上堂云。祖師心印。狀似鐵牛之機。去卽印住。住卽印破。只如不去不住。印卽是不印卽是。時有盧陂長老出問。某甲有鐵牛之機。請師不搭印。穴云。慣釣鯨鯢澄巨浸。却嗟蛙步驟泥沙。陂佇思。穴喝云。長老何不進語。陂擬議。穴打一拂子。穴云。還記得話頭麼。試擧看。陂擬開口。穴又打一拂子。收主云。佛法與王法一般。穴云。見箇什麼道理。收主云。當斷不斷。

返招其亂。穴便下座。

風穴出於臨濟之門。而機鋒峭峻。他曾畫策運籌。百戰功成。而意氣堂堂。擧揚祖師心印。換得盧陂。令跨鐵牛。可謂行祖令者矣。若夫祖印。則何破草鞋。一擲塵芥裏。而可也。雖然他是韜略相備。文武兼濟。臨機能制。收主亦這中人。當斷能斷。遂使風穴下座也好。卽今扶盧陂之一句子。如何擧揚參。

箇は是れ風穴鄧州衙內に在て、上堂垂示ぢや、穴云く、祖師の心印、狀ち鐵牛の機に似たりと、怎んな印かなア。風穴の擧底下に於て、直に薦取すべし、扨て此印は、去れば卽ち住まり、住すれば、卽ち破る、斯ういふ妙な印ぢやが、復た去らず、住まらざるときは、印を捺するが可いか、捺せざるが可いか、一言の挨拶を下だせ、重い口では、佳句は出ぬぞ、時有盧陂長老已下は、二重の公案ぢや鄧州衙內の、上堂ぢやから、收主幷に諸官僚も、出揃ひの事なれば、風穴の此提唱を、此儘にして、下座せしめば、何如にも殺風景ぢやで、そこで、盧陂長老が、衆中より出て、問はるゝ樣は、某甲鐵牛の機あり、請ふ師は、印を捺すことを、止めよと、穴云く、大鯨を釣らうとしたが、蛙が掛つて來たと、抑へた陂も、初めは、好かつたが、此處で怎う答へ樣かと、思案に沈んだ、それで、穴一喝して、長老何にとか、挨拶せぬかと、陂擬議して、躊躇ひぬ、穴拂子を打つて、猶も釣り上げんとして、還つて、記得するや、

試みに舉せよと拶著したで、陂は止むを得ず、口を開いて、答へんと擬した處を、穴又拂子で、一打したそこで、話頭が念が、入つて來た故、施主家の牧主も、仲裁の立ち場から、して、佛法王法と、一般ぢやに依て、私が挨拶しまず、先づ此事は、撤回了して、貰らひたいと云ふ、穴又箇の什麼の道理を見てか、如是道はるゝと、喰つて掛つた、牧主云く、私これにて、斷せざれば、色々面倒が起つて、來ますと、拶せられたで、穴も止むを得ず、下座せられた、是れで、局を結んだが、要旨は、一處ぢや、祖師心印、似鐵牛之機を、能く看よ、碧巖中で、これ程節角、諸訛の則はない、躊躇すると、蹉過了するぞ。

二百九十七　五祖幸然無一事

擧、五祖上堂云、幸然無一事、行脚要參禪、却被禪相惱、不透祖師關、如何是祖師關、把火入牛欄。

把火入牛欄、祖關行路難、日中打午夜、北斗面南看、我有向上曲、餂魚上釣竿。

是れは、五祖の親切ぢや、幸ひに閑暇で、一事も無ければ、行脚したり、參禪したりするが、却つて、禪に惱まされて、祖師の關を、透らすと、祖師關を、道いたい爲めの、枕詞ぢや、把火を、把つて、牛欄に入る、嗚呼面白い、五祖樣ぢや、斯樣に明暗雙々、事理一致を、一句に枉げ

出したは、堪まらん味ぢや、山僧も餘り、嬉しさに、此句を首に置て、次韻したぞ、此等は、筋骨を拔いて、研鑽せぬと、五祖の嚬鼻、彈にも、擊ることと、能きぬぞ。

二百九十八　息耕上堂擧長慶示衆

擧、息耕上堂、長慶示衆、撞著道伴、交肩過一生、參學事畢、拈云、也是靈龜曳尾、山僧自退之叅、託跡于茲、三歷寒暑、又勝他古人、著多矣、今過海山、可無擊感、綴成一偈、以表分違、斂形窮原、

偏出肩、曉雲如送、又如迎、因思執手經行處、幾聽沙泉遶砌鳴、

長慶可謂、癩兒引伴、息耕停、四長智、兩兩看來、乞兒拾得錫、

虛堂和尚、長慶示衆、道伴に撞著し、肩を交へて、一生を過さば、參學の事畢ると、云へるを、取り出しての、上堂ぢや、乃公も霞谷に、三年も住居、道伴と、肩を、交へたるも、今は退院移錫の、てとゝなりたり、洵とに名殘り多い、ことぢや、無情の雲も水も、情あるが如く、我を送るに似たり、之に付ても、分袂が、洵に懷かしい、ことぢやと、虛堂を取追がすな、斯うい、ふ處で、等閑に蹉過すると、盛の上で、負傷するぞ。

二百九十九　龍寶山僧爲人句子

舉。龍寶因雪上堂。諸人未來者裏記得山僧爲人句子。及乎到來者裏問著箇箇忘却。因甚如此。良久云。只因雪上加霜。

大燈國師因雪說雪。雪上加霜。吾這裏即不然。直饒銀碗裏盛來。依然是雪。何管記得與忘却。若夫爲人句子。山僧別有手段。只爲分明極。却使所得遲。

紫野の大燈國師ぢや、雲門の再來と、云はるゝも、盛美ではない、斯いふ名句は、前身の雲門も、吐かぬ好語說き過ぎた、罰が中りはせぬか、雲門が見たら、何と道ふであらう、吾宗を滅ぼす者は、龍寶ぢやと、道ふでもあらう、其龍寶の言を、まア聞き遣られ、乃公が前に、來らぬ前には、乃公が爲人句子を、能く諳じて、居るが、今問ふて見たれば、誰も彼も忘れたと云ふ、何に故ゑ、忘れたか、餘り詮議が、過ぎる、故ゑ、不圖忘れたと、龍寶雪に因ての、上堂ぢやで、雪上加霜が、出たか、實に好語ぢや、山僧は憎うて、堪まらん、何せか、可愛さ餘つて、憎さが百倍ぢやもの。

三百　眞如結制小參

舉。眞如結制小參云。有佛處不得住。荒草連天。無佛處急走過。鹿鹿遍野。一條路千人萬人共行。千人萬人不到。我今只要。諸人脫却籠頭。卸下腰帶。向無交涉處。盡力擔得板三十棒也。

不得。

超過有佛無佛。脫却籠頭。卸下腰帶。洒洒落落。向無交涉處。盡力擔得板三十棒。一棒也較不得。因甚如此。瑞阜也不會。莫有語。眞無語。畢竟如何。雲在嶺頭閑不徹。水流澗下太忙生。

是れは眞如の、結制小參ぢや、東山下の暗號令は、師の得意ぢや、然れども、山僧は、剗破了也。眞如一條の路子、千人萬人、共に行は好し、甚麽に因てか、千人萬人到らざる、豈に這般の事あらんや、若し是れ山僧底ならば、然らず、一條の路子、千人萬人の中、九千九百九十九人は到るも、只一人ありて、到らず、眞如拔山の力、蓋世の氣あるも、此一人をして、到らしむるを得ず、何故ぞ斯くの如くなる、山僧もまた會せず。

三百一　崇福上堂佛祖大機

舉。崇福上堂。佛祖大機。全歸掌握。人天性命。總在這裏。把定則乾坤失色。放行則瓦礫生光。把定放行則且置。如何是佛祖大機。人天命脉。竪起拂子云。見麽。見麽。認著依前還不是。參。

圓通大師。好笑好笑。若是佛祖大機。人天性命。今日在瑞阜拄杖頭上。千聖亦不能插手。諸人何處措足哉。忽然化龍去。上三十三天。衝著帝釋鼻孔。也入草成蛇去。蝦蚓蟻螘蠢蠢齊乞性命。見麽見麽。有意氣時添意氣。不風流處也風流。

崇福上堂、偉い物を持ち出したぞ、佛祖の大機、人天の性命と、最早此上へに出る者なかるべし、して崇福は、此佛祖の大機を、手中に握り、人天の性命を腰に著て、在ると云ふが、怎んなに、偉い人が、一皆しいたら、眼が潰れるであらう、爾して其佛祖の大機、人天の性命を引き締たらば、天地も色を失ふとさア、振り離したらば、石瓦も光を放つとさア、何如さま、偉いものぢや、到底も寄付くことは能きぬ、其大機命脈を崇福は、拂子を竪起して、之に集め込んだ、見よ〳〵と、見られませぬ、餘り見過ぎると、不可ないとさア、大應开んなら、怎うして好きか、國師云く、參、直饒ひ參じて、彌勒下生に到るも、依然として、不見ぢや。

三百二　盤山三界無法

舉。盤山垂語云。三界無法。何處求心。

三界無法。何處求心。關鳴悲不傷樂不淫。一聲兩聲鴈聲過。影落水中何處尋。湘之南潭之北。誰道莫不黃金。

碧巖一百則の中に、此則ほど、孤峻なる者、なかるべし、又見ねさうで見苦い者も、此の則なるべし、何故三界無法。何處求心と、理會も講釋もない、之に辯をつけて、堪つたものか、

一句下に、直に薦取せよ。雪竇云。三界無法。何處求心。白雲作蓋。流水爲琴。一曲兩曲無人會。雨過夜塘秋水深。大燈云。千山雨霽鎖寒烟。月落松窓羅屋前。欲寫等閑斯時景。一溪烟鎖水潺潺と、此兩頌で、盤山の本則を看よ。

三百三　雪竇龍泉刀斧

舉。雪竇示衆。龍泉與刀斧同鐵。利鈍懸殊。駑駘與駿馬同途。遲速有異。酌然酌然。一出一入。半合半開。平展之流。試辨緇素。息耕云。明覺一代龍門。只是取捨之心未泯。山僧毛凡道等。一月而歸之。何故切。

大小大息耕。批判未得。其當在。山僧卽不然。雪竇龍泉刀斧。殊其利鈍。駑駘駿馬。異其遲速。判明較著。息耕以爲。取捨之心未泯。取捨若泯。則與不取捨何異。惜哉。坐在者裏。何故。仁者見之謂之仁。智者見之謂之智。

雪竇の示衆。流石がに、一代の龍門ぢや、龍泉と刀斧と、利鈍懸かに殊なり、誰か正宗の名劍と、斬菜庖丁とを、同一視せん、金華山の駿馬と、駑馬と、同伍すべからず、虛堂は雪竇の取捨の心、未だ泯せざるを惜めり、然れども、雪竇の意は、取捨の心を存するを以て、明かに勝劣判然せるを賞翫せられたり、取捨を泯するも、時あるべし、然れども、今は取捨を

立つるを以て主と爲す、息耕の拈評、山僧は取らず、然れども、切の一字は、虚堂に非ざれば、發することと能はず。

三百四　眞如謝副寺上堂

舉。眞如上堂。謝副寺。至道無難。日應萬端。量柴數米。接官送官。是牛牽犂拽杷。是馬銜鐵負鞍。一句舉似大衆。入水也要占乾。頭上脚下漫漫。至道非易非難。珠旋轉玉圓珊。不用意處少失。求全還被人瞞。一句舉似大衆。好肉忝莫刀剜。

眞如副寺を謝する上堂。圓轉活脫。掌果を觀るが如し。至道無難。直下に是れ。萬端に應じて、滯はることと無きぢや。柴を量り、米を數へ、官を接し、牛を驅り、馬を使ふ。皆是れ副寺の、天職ぢや。而して眞如、大衆に舉似する、一句は、怎ぢや。水に入つて、乾くを占むるを、要すとは、是れ、什麼、爰ぢや。凡そ物、熱心無ければ、熟し難し。副寺も、亦熱心を要す。叢林を護り、大衆を養ふの職に當る者、之を舍て、豈に他あらんや。山僧云く切。

三百五　龍寶上堂拈雪竇偈頌

舉。龍寶上堂。嚴寶宵寒擁山帔。月高枯木霜禽睡。明覺雖是爲一代之龍門。爭奈坐在無事甲裏。何也良久云。臘月苦寒風雪吹。急急抽身已是遲。明覺棒頭短。龍寶馬鞭長。過猶不及。仔細看來。彼此梁成招箭。吾這裏逢景即賞。不作模作樣。畢竟如何。臘雪連天白。春風逼戶寒。

是れは龍寶が、雪竇の偈頌を、拈評して、無事甲裏に、坐在すと、云はるゝも、仁者は之を見て仁と謂ひ、智者は之を見て智と謂ふ。竇の句、一概に無事禪と、爲すべからず。却つて龍寶が、臘月苦寒風雪吹、急急抽身已是遲は、是れ無事甲裏に坐在するに非ずや、之を要するに、竇寶長あり短あり、得あり失あり、山僧は却つて、短處の趣味多きを、賞翫することになり。

三百六　崇福上堂參須實參

舉。崇福八月旦上堂。僧問。參須實參。悟須實悟。如何是實參。師云。參可始得。僧云。如何是實悟。師云。悟可始得。僧云。轉凡夫作賢聖。抑賢聖作凡夫。則不無和尚。師云。更有一著在。僧云。記得。仰山謂香嚴云。如來禪許師兄會。祖師禪未夢見在。此意如何。師云。言中有響。僧云。如何是如來禪。師云。鷄足山前風悄然。僧云。如何是祖師禪。師云。少室峯下雪猶寒。僧云。如何是和尚禪。

師云。還覺腦門重麽。僧禮拜。師乃云。蟬鳴高樹蛩唫草底。槿花凝煙白露垂珠。從來無法商量。只要現成受用。大乘。還委悉麽。良久云。種田博飯喫。伸脚牀上睡。

崇福老人。其實參實悟。敢聞矣。轉實聖作。凡夫亦聞之。如來禪與祖師禪。亦得聞之。然而和尚禪未聞。崇福還覺腦門重麽。莫乃所謂崇福禪乎。果然則猶是半提。雖然崇福道。從來無法商量。只要現成受用。大小大崇福。可惜許。坐在者裏。種田博飯喫。伸脚牀上睡。是則是瑕生也。何故。識法者懼。咄。

大應國師。八月旦上堂。師學の商量頗る蔗境に入る。國師の參じ得て始めて得べし。悟り得て始めて得べしとの答へは。切實なり。如來禪。祖師禪の下語は。尤も面白し。如來禪に。鷄足山前風悄然。祖師禪に。少室峯下雪猶寒しとは。事實ともに。相適して。的切なり。和尚禪に。至つては。還つて。腦門重きを覺ふやと。是れ什麽。再來の語なり。東海第一の祖でないては。吐くこと能はざるべし。己奴等種々なることを尋ねて。頭腦の重繁なるを知ゆたか怎うぢや。馬鹿め。乃ち云く。蟬蛩吟じ槿花露を含で。珠の如し。法の商量する者はない。即今現成受用ぢや。良久して云く。田を種ゑて。飯に博べて喫し。脚を伸べて睡る。是れが大應か。然れども。大應爰に。住すと。道はゝ。沒交渉ぢや。

三百七　長沙游山

舉。長沙一日游山。歸至門首。首座問。和尚什麽處去來。沙云。游山來。首座云。到什麽處來。沙云。始隨芳草去。又逐落花回。座云。大似春意。沙云。也勝秋露滴芙渠。雪竇著語云。謝答話。

長沙與首座問答。雪竇著語。看來。都盧一串明珠。盤上旋轉。阿轆轆地。就中有箜有瑟。一人打羯鼓。一人弄琵琶。一場歌舞。始終同調。而異曲。無限瀟湘景。和舟入畫圖。然雖如是。同坑無異土。三箇白拈賊。相牽入火坑。邪法難扶。咄。

此の則は舊參の上士も。動もすれば。蹉過する底の難透ぢや。長沙一日游山して回る。首座云く。什麽の處に。到り來る。沙云く。始めは雲英芳草の間を。興に乘じて行たか。歸りには。落花紛紜たる巷を。穿過して來たと。座云く。大に春意に似たり。汗れは〳〵嘸かし。春めかしい。お游びで。したなと。沙云く。左ればにや。秋露の蓮花にぱと〳〵滴り落ちたるよりも。面白かつたと。雪竇も。此樣子を見て。坦へられんから。首座に代つて。挨拶ぢや。難有う。御座る。お答へを拜聽したと。此語只是れ。尋常長沙が。游山より歸來したるを。首座が。門首で。迎へた茶話に。過ぎぬか。何處が賞翫で。雪竇は謝答話と云はれたぞ。此鹽梅がさア。初心の人では見ぬ。參究功熟すれば。自然と境界が。浮て出て來る樣に見ゆる。其

時を待て居れ、教へることは、能きぬぞ。

三百八　五祖我有一柄箒

擧。五祖上堂云。我有一柄箒。掃盡雪山雪。我有一張口。臨事無可說。我有一雙眼。和盲悖訴瞎。任意過平生。烏龜喚作鼈。處世學爲人。喫水須防噎。仰山曾道底。兩口無一舌。四海五湖人。當陽瞥不瞥。

謂之東山左遊底。吾不得而知焉。謂之暗號密令。吾不得而信焉。謂之大脫空。吾不得而疑焉。謂之爲人度生。吾不得而問焉。貴買賤賣。拗曲作直。賤如泥土。貴如金玉。讃也不得。毀也不得。是謂之東山老人。咄。

前章長沙游山は、幽微向上な、拈弄ぢやが、是れは又、五祖の一柄箒から、雪山の字を得て、工夫し來たものぢや、面目を得たる人は、自由なものぢや、怎うしていも、拈り廻はすとが能きる。雪山の雪から、一張の口となりて、無可說と饒舌した、一雙の眼より、盲に和して悖り瞎を訴たへた、意の欲するに從ふて、平生氣儘に送る、或時は烏龜を喚で、鼈と作したりする、世上に出ては、兎角爲人立てをする、水を飲では、噎かぬを、主となせ、兩口に一舌なしとは、仰山の語ぢやが、世の中の人は、種々ある、洒然するもせぬも、色々己が

まに〳〵ぢやと、是れ何の講釋ぢや、薩張り山僧は解せぬぞ。其筈ぢや、五祖も自から頌しながら、解かりまい、咄、笑止しや、是れでも、東山下の祖師か、大脫空此上に出る者、恐くはなかるべし。

三百九　趙州訪茱萸

擧。趙州訪茱萸上法堂東觀西觀。萸云。作甚麼。州云探水。萸云。我者裏一滴也無。探箇甚麼。州以拄杖靠壁而出。息耕云。盡道一滴也無。戢起滔天之浪。殊不知趙州平白失却一條杖子。

趙州探茱萸。却被奪一條杖子。茱萸家門不嚴。引賊而被濕。法堂之一隅。兩個老漢把不住。看來損不償得。咄。

傳燈の祖師中にも、趙州と茱萸の如き人も、希有ぢや、兎角平地に、浪を起したがる、癖がある、趙州は茱萸の、法堂に上りて、詮方がないから、水を持ち出して、法戰を挑む、茱萸は水の影も、見せぬが、既に趙州を、搖蕩して、三十三天まで、漂はしめた、虛堂は趙州平白に、一條の拄杖を、失却すと云はるゝが、此取り戻しは、何で著る、心算りであるが、詰り平地に、浪を起した結果で、大損した、勞して功無きぢや、面白い、水掛け論ぢや。

三百十　眞如正旦上堂

舉。眞如正旦上堂。新頒鳳曆下堯庭。山嶽齊呼萬歲聲。拄杖不知見甚麽。也來趁隊賀新正。却道。我雖栗栗枳枳。稜稜層層。要與爾東拄西拄。橫撐竪撐。撐撐拄拄。跳出窮坑。五湖煙浪裏。別有好商量。

歸去來兮拄杖子。跳出窮坑。五湖烟浪。有好思量。畢竟如何。羅籠不住。呼喚不回。于此于彼。隨緣赴感。圓應無方。莫留朕迹。要看麽。柳標橫擔不顧人。直入千峯萬峯去。

是れは眞如の拄杖子ぢや。前章は趙州が茶莫で失なふたと云ふが。今は眞如元旦の上堂で拄杖子何を思ふてゝか。唸り出したぞ。元正啓祚。萬物咸新で。芽出度限りないことぢや。拄杖子もまた例に依て。隊を趁ふて。新正を賀するが。何を思ひけん。我れ栗栗枳枳。稜稜層層の姿た。甚だ見苦きもまう。今日まで。東へ拄へ西へ拄へ。横に竪に。怎うか斯うか。歪みなりに。湯茶を濁し來たが。最早や眞如住山も。御免蒙むりたい。近き中には。此の窮境僻坑を。跳り出る。心算ぢや。爰ばかりに。月日が照らさん。四海五湖は廣い。好き思案の出る場所もあると。眞如退院の意を洩したぞ。霜を履て。堅氷至る。果して此年。太白に。移錫せられた。達人達觀。居住自在ぢや。これでなければ。衆生濟度は。能きぬぢや。

三百十一　大德佛涅槃上堂

舉。龍寶佛涅槃。上堂云。槨出雙趺。如日明。人間天上距藏韜。時流若具波旬眼。舞袖猶須在柳條。喝一喝下座。

世尊入滅。佛弟子悲。至教墮淚。乾滄海。波旬喜。徹舞袖。在柳條。一喜一悲。一親一疎。道得。波旬。不足爲貴。佛弟子不必爲賤。

大德。佛涅槃の。上堂ぢや。佛弟子の悲みを拂ふて。柳の梢ゐに。波旬の喜びを移して。舞袖と云ふたは。巧みでは無いか。世尊槨より雙趺を出す。人間天上。藏すことも韜むことも。ならぬ。三四に至つて。悲しみを轉じて。喜びとなしたは。大燈の眼ぢや。別を悲んで。花も涙を濺ぐ。此味を知らざれば。佛涅槃の眞味は。見えぬぞ。

三百十二　佛光小參種穀不生豆苗

舉。佛光結夏小參。僧問。如何是道。師云。種穀不生豆苗。乃云。食輪轉法輪轉。食輪不轉。法輪不轉。眞如今夏既是缺糧。佛法禪道。盡情束之高閣。有底道。是則是。換水養魚。未見尖新頭角。行者認取者僧。

眞如今夏缺糧。佛法禪道也新。有食處不得住。無法處急走過。只有大人能決去就。眞如腕頭非短。長袖善舞。而窮厨煎飢。厨吵何至此極。但是甕無一物。獻尊親何故。有錢有酒含笑。

無米無柴皺眉嚬。

佛光は東山下の古佛ぢや、前章の大德と、對照して看よ、孰れも同穴の狐狸ぢや、此小參の如きは、面白い、這の僧も、凡物ではない、道を尋るに對して、佛光は、殺を種て苣苗を、生せずと、佛光の面を看よ、乃云已下は、提綱ぢや、佛光は眞如の貧山に、七年間住持したが、仁義は貧處より、斷つぢや、庫下の思はし、からぬより、食輪轉せずして、法輪も轉せず、佛法禪道、高閣に束ねて、道福の二利、共に振はざるあり、衆中の一人躍り出て道く、爾かく水を換へ、魚を養ふ如く、骨を折てさへ、新たに頭角を、出す者を見ずと、挨拶する者あり、面白い、佛光乃ち、行者に命じて、箇の僧を、認取せよと云はれた、是れ什麽、行者此の饒舌の坊主を、能く見覺して居れと、斯ういふことを、道ふから、佛光御自身も、時宗に認取せられて、日本まで、御苦勞渡來と、なりたり、また是れ認取せねばならぬ、此僧ぞかし。

三百十三　趙州喫茶去

舉。趙州問僧。曾到此間麽。僧云。曾到。州云。喫茶去。又問僧。曾到麽。僧云。不曾到。州云。喫茶去。息耕云。趙州一處打著。一處打不著。萬松見僧亦不招茶。亦不相問。何故。自從賢聖法來。未嘗殺生。

趙州兩處喫茶去。息耕云。一打著。一打不著。山僧即不然。兩處打不著。何者。這般說話。可惜許。是趙州家常茶。固不足爲異也。雖然解其苦味者有幾箇。

趙州、僧を見れば、曾て此間に到るや、否やと問ふ、僧曾到と云ふ、州云く、喫茶去、又未曾到と云ふも、亦喫茶去と云ふ、息耕云く、一打著一打不著と、是れは則是と、雖も、是れ趙州の意に稱はず、州豈に打著不打著の處に、居らんや、果然として、州の意に非ず、如何が州の意、山僧は即ち道はん、喫茶去と、知るや否や、州の茶味を解して、其苦澀を知る者、幾個ある。

三百十四　靈雲見桃花悟

舉。靈雲悟桃花。頌云。三十年來尋劍客。幾經葉落又抽枝。自從一見桃花後。直至如今更不疑。

玄沙云。諦當甚諦當。敢保老兄未徹在。五祖云。說什麽諦當。更參三十年始得。

靈雲悟桃花。玄沙許其悟的。而道未徹在。五祖云。說什麽諦當。更參三十年始得。山僧云。自是龍門之下。仁者見之謂之仁。智者見之謂之智。仔細看來。五祖道底。也沒交涉。更參三十。

年亦決不可得也咄

靈雲桃花を見て悟る、一見便見此間だ嘴しを挿さむこと能はず、玄沙は未徹在、五祖は更參三十年始めて得べしと、二大老の批判、只靈雲の一半を見て未だ其全豹を悉くさず、是を以て靈雲を見んと欲せば、且得沒交渉ぢや、何が故ぞ、靈雲の意、果して桃花に在りとせば、敢て未徹在なるを、若し然らば、如何鹿を逐ふ者は、山を見ず、金を攫む者は、人を見ず。

三百十五　仰山問僧

擧。仰山問僧。近離甚處。僧云廬山。山云。曾游五老峯麼。僧云。不曾到。山云。闍梨不曾游山。雲門云。此語皆爲慈悲之故。有落草之談。

這箇向上之調。卽是文殊普賢境界。非思量計較所知。苟非爍迦羅眼照徹。爭得夢見。仰山云。闍梨不曾游山。雲門云。此語爲慈悲之故。有落草之談。隨邪打邪。相逐而入荊棘。雪竇老漢亦拗曲作直。其明暗雙雙底且置。寒山子因甚行甚早。咄其智也可及。其愚也不可及。

仰山僧に問ふ、近離甚れの處ぞ、第一門を開く、僧云く、廬山、箇の僧の答へも、亦一機を含み來る、山云く、曾て五老峯に游ぶやと、山雨將に來らんとして、風樓に滿つ、探竿影草、導びき去つて、第二門に入る、僧云く、曾て到らず、箇の僧茲に到つて、歩を轉じて、五老峯の影をも見せぬ、山云く、闍梨曾て游山せず、ア、なら、ば、已、奴は未だ游山したことは、無いぞと、是れ什麼、肚皮に毛無き、千年の老狸ぢや、此辣腕の圓活を見よ、雲門云く、此語皆慈悲の、爲めの故に、落草の談あり、愈よ出て、愈よ揑怪なり、此語路の細かなること、精米の如し、且く道へ、仰山の意、什麼の處か、是れ落草なる、恁麼な處に、雲門宗の寒き、手脚あり、此の按排は、言詞に述盡されぬ、是れが手に入ると、仰山雲門の二老に、相見が能きるぢや、而して箇の一絡索を、雪竇は巧みに頌して、白雲重重、紅日杲杲、左顧瑕なく、右眄已に老いたりと、是れ仰雲二老の境界、明暗雙雙底の樣子を、述べたぞ、暗かと見れば明なり、明中に暗あり、仰山を見ても、雲門を見ても、點の著け樣はない、そこで、竇また一線路を通じて、轉換し來る處、頗る面白い、十年歸ることを、得ざれば、來時の道を、忘却すと、寒山子を引證したは、妙ぢや、此語を、一枚見識と見ては、沒交渉ぢや、仰山雲門の樣子、此寒山の句にも、結び著けたぞ、爰等が、雪竇の妙處ぢや、言句に轉せらるゝと、見ぬぞ、眞個に此味を、咀嚼せよ。

三百十六　雲門對一說

舉。僧問雲門。如何是一代時教。門云。對一說。五祖拈云。對一說。卷盡五千四十八。風花雪月任流傳。金剛腦後添生鐵。

五祖可謂風流溫藉錦上鋪花。山僧也不免就邪打邪。乃頌云。對一說。算至六八四十八。碧眼胡僧知不知。舌頭三寸鑄生鐵。

一代時教を、該括して、對一說と道破す、雲門宗の寒き、言句を見よ、五千四十餘卷を、三字を將て說破す、然れども、猶は是れ迂曲なり、若し是れ山僧ならば、卽ち道はん「てつこんしよ、よういとせ」、五祖金剛腦後の硬鐵、中に於て花を見、月を眺む、碧眼の胡僧も、亦此風味を、解すること難し、闍梨何ぞ之を見るを得ん。

三百十七　德山因僧問

舉。德山因僧問。從上諸聖向甚麼處去。山云。作麼作麼。僧云。勅點飛龍馬。跛鼈出頭來。山休去。來日山浴次。僧過茶。山拊僧背云。昨日公案作麼生。僧云。老漢今日。方始瞥地。山又休去。明覺拈云。德山以己方人。者僧還同受屈。息耕拈云。盡謂恒山之蛇。觸之則首尾俱應。殊不知。一得一失。雪竇是則是。傍不甘。要見德山遠在。

拈云。德山大似無齒大蟲相似。觸著則咂。復敢無害。兩處休去。者僧敢捋虎鬚。至使弄爪牙。於德山面前。固屬兒戲耳。明覺云。以己方人。者僧同受屈。息耕云。一得一失。以是要見德山。便齊接竹杖。敲天月耳。

此の則は、明覺、息耕、二大老の、批評、面白い、然れども、德山兩處の休去は、箇の僧其憤鼻揮にも、攀躋すること能はず、此老漢昨日も、上機嫌、今日も、上機嫌にて、箇の僧を、茶話の對手にして、面白がつて居る、嚴下風生じて、虎其兒を弄ぶの觀あり、咄這の老漢、涅にすれども、緇まず、磨すれども、磷がず。

三百十八　眞如蒼龍翫珠

舉。眞如解夏小參云。提持箇事。如蒼龍翫珠。不墮於地。不住於空。收放自在。呑吐自由。四方但見光閃閃地。

瑞阜曾頌云。寶劍揮空空不傷。電輪掃過閃流光。等閑捕捉難留跡。卓豎寒毛六月霜。

眞如小參箇の事を、提持すること、猶は蒼龍の珠を、翫ぶが如し、地に墮せず、空に住せず、收放自在、呑吐自由にして、但四方光りの閃々たるを見ると、可惜許、大小大の眞如說き盡して、喩齊妙を得と雖も、然れども、若し夫れ、箇事ならば、吾王庫の內に、如是の刀なし。

三百十九　龍寶三月半游山回

舉。龍寶三月半游山回。謝首座維那。并龍翔塔主。上堂舉。長沙一日游山歸門首。首座問。和尚什麽處去來。沙云。游山來。座云。到什麽處來。沙云。始隨芳草去。又逐落花回。座云。大似春意。沙云。也勝秋露滴芙蓉。師云。奇哉怪哉。兩口一舌。山僧數日來游山回來。首座不必要問。山僧不必誣他。不是無其下意。只愼綱令有人。何故。爲祥爲瑞。龍騫鳳翔。

龍寶游山歸來。不怪無人要問。也不必誣他。風流儒雅。山僧老來懶於拽笻裳出游。較他長沙。龍寶輸却數步。而媿遜大。有春意何也。探春不必在烟花深處。

龍寶游山より回りて首座維那并に龍翔塔主を謝する上堂に、長沙游山の則を翻案し。て。新意匠を出す。妙云ふべからず。山僧游山より回り來る。首座必ずしも問ひを要せず。山僧必ずしも他を誣ひず。是れ何故に問はぬかと。トする意ないでは無いが。それでは首座及び龍翔塔主の綱令職務を侵害するの恐れあり。何が故ぞ祥たり瑞たり龍翔り鳳翔る故に差し控へて、之を尋ねぬのぢや。咄此老漢。什麽と道ふぞ。此上堂。花も紅葉も。皆封じ込めてある。長沙首座も遙かに其下風に立つの觀あり。嗚呼大燈は雲門の再來ぢや。仰瞻するより外はない。

三百二十　大應浴佛上堂

舉。大應浴佛上堂。僧問。佛未出世時。爲甚盤山有密旨。師云。天是天。地是地。僧云。佛已出世後。爲甚杳無消息。師云。指天指地。狼藉不少。僧云。出世不出世。則且置。卽今佛在甚處。師云。高著眼看。僧云。爭奈金屑雖貴。落眼成翳。師云。莫將眼看。僧云。只如雲門道。一棒打殺與狗子喫。是何心行。師云。家富少兒嬌。僧云。今朝大家出手。灌沐金軀。爲復是報恩。爲復是酬怨。師云。不是怨家。不聚頭。僧便禮拜。師乃云。降下閻浮。誕生王宮。九龍吐水。灌沐金軀。至今千古。雨洗風磨。金容妙相增光輝。照天鑑地。有何極。命根落在崇福手。一杓惡水。從頭澆。何故。齊之以禮。

世尊降誕。指天指地。一場漏逗。後來有雲門。物看主眼卓豎。欲包荒而却道。一棒打殺與狗子喫。益增狼藉。雖然他是看。何而道。擬金者不見人。獻佛不假香。多報恩乎。酬怨乎。國師斷云。不是怨家不聚頭。釋迦老子。免得雲門虎口。而爲國師舌頭所殺。其喜可知也。國師不管舌殺。一杓惡水。從頭澆。也使他命根落在崇福手。裏又重之以齊之以禮。適來打殺。而今以禮。一擬一擬。是則是。奈何太無饜生。左義右利。不奪不饜。瑞阜忍俊不禁。不得爲世尊雪冤。何故。辱莫辱多欲。樂莫樂無求。咄。

流石がに大燈の爺爺ぢや。此の浴佛上堂は、前章龍寶游山に倍する價値がある。箇の僧

の問ひも亦奇特ぢや、一寸反對に出て問ひ掛けたぞ、佛未だ出世せざる時、靈山に甚と
して、密旨ある、師云く、天は是れ天、地は是れ地と、僧は暗相を將て問ひた、師は明相で答へ
た、進で云く、佛已に出世後、何として消息なき、師云く、天を指し、地を指して、狼藉少から
ず、僧明相を問へば、師は暗相で答へたぞ、而して雲門の一棒打殺を、師は家富少兒憍る
と、面白い答へぢや、古來これ的の語を吐くものは、寡ないぢや、雲門を看破する眼なく
んば、此語は出でぬぢや、僧云く、今朝澁沐金軀、是れ報恩か、是れ酬怨か、師云く、是れ怨家
に非ずんば、頭を聚めずと、此等は再來の語ぢや、中々容易に出でる語ではないぞ、瞎驢
の命根、大應の手に落在す、一杓の惡水、頭上より澆ぎ、且つ之を齊うするに、禮を以てす
と、首尾相應、虎頭に騎つて、虎尾を收むとは、是れぢや、如是働きのある、浴佛上堂は、陽春
白雪、和する者は、少ないぢや。

三百二十一　大燈半夏上堂

舉。大燈半夏上堂今朝相逢。等閑問過。人人解道。今日半夏。阿呵呵。阿呵呵。山僧與麽道。是褒
諸人。是貶諸人。卓拄杖一下云。六月買松風。人間恐無價。

大燈半夏上堂阿呵呵。笑者什麽若。笑問過者則沒交涉。若笑道今日半夏者則也沒交涉。

而解笑者多。解哂者鮮。正眼看來。國師只解笑。而不解笑之節。六月買松風大好。雖然不如
與衆解其味。山僧卽不然。午風涼處剖寒瓜。銀盌添冰共飽餐。

等閑の問過。今朝相逢ふて、皆道ふ、今日半夏と、山僧は然らず、半夏何ぞ相報するの、如是
なるに至るや、既に是れ半夏、殊更に問過するに、及ばんや、然れども、事は丁寧より生ず、
人々半夏と云ふ聲を聞けば、又其覺悟を生ず、是れ乃ち怠慢を轉じて勇猛ならしむ、方
便なり、阿呵々、褒に非ず、貶に非ず、大燈を爰で看よ。

三百二十二　眞如謝衡叟監寺

舉。眞如謝衡叟監寺及新舊上堂凍合千林萬木僵。飢荒老鼠齧生薑。祖翁活計無多子。相與
扶持折脚鐺。

山僧和云。雪裏溪頭香水僵。麴塵買醉訝郎當。風流猶是揮雙臂。撣去拄來折脚鐺。

前章大燈半夏の報告に、六月松風を買はゝ、人間恐らくは、價なからんは、涼味滿身、今は
眞如監寺を謝す、寒霜零落、師翁の活計も亦風流、有る時は豐かに、有る時は儉に、其爲す
所、各々別なり、事一概なるべからず、圓應無方、朕迹を留めずとは、卽是れぢや、而して眞
如は、鼠の生薑を齧むと、折脚鐺を、扶持するは、一段の風流、吾れは點也に、與みせんのみ。

三百二十三　息耕佛涅槃上堂

舉。息耕佛涅槃上堂。今日則有。明日則無。釋迦老子。一生賣峭。臨死自納敗闕。致令後代兒孫。箇箇以假爲眞。萬松丈人屋上之烏。與之救看。拈起拄杖吹一吹。

今日則有。明日則無。釋迦老子。道什麽。烏之將死。其鳴也悲。這老漢將死。其言也善。休休容易扶起失錢遭罪。

萬松老人。佛涅槃上堂。釋迦老子の死を救はんと欲して救ひ得るの一句は、拄杖を拈起して、吹一吹。果然として救ひ得ず、試みに萬松に代つて、一句道ひ將ち來れ。傍僅かに口を開かば、則ち瑕生ずるなり。山僧忍俊不禁、力を盡して、傍助せんと欲して失錢遭罪。

三百二十四　五祖千古白雲山

舉。五祖上堂云。九旬三箇月。彈指瞥然間。忙者直然忙。閑者直然閑。事事無窮盡。千古白雲山。千古白雲山。風流闊也閑。榮枯何管我。一任放痴頑。

五祖和尚。好笑好笑。事々窮盡なきは、且く置く。千古白雲山は、蕭然蹉口せり。白雲山豈に是れ千古同調ならんや。朝に雲生じて山に衣あるかと思へば、夕べに月潭に落ちて水に影はない。咄々。鉗つて注脚を附す。拔舌獄に墮ること、箭の射るが如しなり。

三百二十五　臨濟四喝

舉。臨濟問僧。有時一喝。如金剛王寶劍。有時一喝。如踞地金毛獅子。有時一喝。如探竿影草。有時一喝不作一喝用。汝作麽生會。僧擬議。師便喝。

如何是金剛王寶劍。海神知貴。不知價。如何是踞地金毛。兩頭蛇見者死。如何是探竿影草。死諸葛走生仲達。如何是不作一喝用。漁老不知堯舜力。婆婆打鼓祭江神。畢竟如何。前山雨過後。新綠送清涼。喝。

臨濟已前に、臨濟なく、臨濟已後に、臨濟なし。臨濟を知らんと欲せば、此四喝を見よ。如何なるか、是れ一喝、一喝の用を作さゞるもの。擬議不了ならば、則ち劒去つて久し。

三百二十六　定上座問臨濟

舉。定上座問臨濟。如何是佛法大意。濟下禪牀。擒住與一掌。便托開。定佇立。傍僧云。定上座。何不禮拜。定方禮拜。忽然大悟。

定上座被臨濟托開佇立。一段風光描也難。就傍僧敎禮拜。無限瀟湘景。和船入畫圖。卽是

濟北的傳之些子也。定上座得法後接人。直入直出直行。如接彼雪巖欽。則全機與臨濟無異。即今定上座來也。山僧即掀翻禪牀。攔腰他去。喝。

參禪辨道、別に仔細あることなし、但須らく、直に見直に聞直に覺して、以て入るべし。定上座の臨濟に參ずるは、空手にして入り、空手にして出て、始終一貫、此外に別に、一法の提唱するを見ず、他は臨濟の、全機を得て、一模に脫出するの外、許多の伎倆なし、是れ他の脫の、境界にして、他に長處あるを見ず、傳燈錄に載する所の、定上座傳は、甚はだ簡略なり、他は一生出世せず、常に臨濟の機鋒を用ゆ、一時途上に、雪峯、巖頭、欽山の三人に逢ひ、赤肉團の話を提唱し、又一時齋より歸るに、三人の敎僧に、橋上に逢ふ、一人云く、禪河深き處、如何か底を究めんと、他即ち擒住して、水中に拋向せんと、しつゝあり、二人連忙して、援助を乞ふ、定上座云く、吾れ此尿上の鬼子を、水に投じて、底を究めじめんとす、是れ定上座たる所以なり、以て臨濟の用處常情に異なるあるを、知るべし。

三百二十七　五祖評五家宗旨

舉。五祖上堂僧問。如何是臨濟下事。師云。五逆聞雷。學云。如何是雲門下事。師云。紅旗閃爍。學云。如何是曹洞下事。師云。馳書不到家。學云。如何溈仰下事。師云。斷碑黃古路。僧禮拜。師云。何

不問法眼下事。學云。留與和尚。師云。巡人犯夜。乃云。會即事同一家。不會萬別千差。一半喫泥喫土。一半食麥食麻。或即降龍伏虎。或即摝蜆撈蝦。禾山唯解打鼓。秘魔一向擊杈。者箇一場戲笑。皆因拈花微笑。白雲隨隊。骨董順風。撒土撒沙。若無者箇腸肚。如何衣錦還家。且道還家一句。作麼生道。今日榮華人不識。十年前是一書生。

鶴林云。五祖分劃五家派流。天童如淨叱責不容。蓋五家各別。其家風宗旨非有別。會即事同。可謂知言矣。且道臨濟宗如何。晦巖云。大機大用。脫羅籠出窠臼。虎驟龍奔。星馳電激。轉天關斡地軸。負衝天意氣。用格外提持。卷舒擒縱。殺活自在。要知臨濟麼。青天霹靂。陸地起波濤。雲門宗者。截斷衆流。不容擬議。凡聖無路。情解不通。大約雲門宗風。孤危登峻。人難湊泊。非上上根。孰能窺其彷彿哉。曹洞宗者。家風細密。言行相應。隨機利物。就語接人。看他來處。忽有偏中認正者。忽有正中認偏者。忽有相兼帶。忽同忽異。示以偏正五位。四賓主功勳。五位君臣。五位王子。五位內外紹等事。大約曹洞家風。不過體用。偏正賓主。以明向上一路要。見曹洞宗麼。佛祖未生空劫外。正偏不落。有無機。溈仰宗者。父慈子孝。上令下從。倆欲喫飯。我便與羹。倆欲渡江。我便撐船。隔山見烟。便知是火。隔墻見角。便知是牛。大約溈仰宗風。擧緣即用。忘機得體。不過此也。要見溈仰宗麼。月落潭無影。雲生山有衣。法眼宗者。箭鋒相拄。句義合機。始則行行如也。終則激發。漸服人心。削除情解。調機順物。斥滯磨昏。種種機

緣不盡詳舉。觀其大槩。法眼家風。對病施藥。相身裁縫。隨其器量。掃除情解。要見法眼宗歷人情盡處。難留跡。家破從教四壁空。已上五家宗風如此。大都皆因拈華微笑。而五祖七穿八穴。眼裏耳裏撒土撒沙。是眞大供養也。不知諸人知諦否。衲僧不貴殊勝威儀。但要肚放大。有嗜却時人眼之辣腕。還家一句。作麼生道。荊棘叢中。荊棘圍繞。

是れは五祖が、參天の炬眼を將て、五家を論評したは、面白い、之に反して、天童如淨は、五家を判するを、叱責せられたも、亦面白いことぢや、五祖は、僧の問に應じて、臨濟を評して、五逆雷を開くと、云はれた臨濟に、器を掛て見徹透した、千古の批評ぢや、雲門下の事は、紅旗の空中に閃爍翻がへるが如く、只仰瞻すべくして、把るべからずぢや、雲門の機鋒の、近傍すべからざるを、評し得て、面白い、曹洞下は、書を馳せて、家に到らずとは、洞家は、語句成を、忌むぢや、恰かも書信を、寄らして、達せんとする、途中に在るが如しと云ふ、潙仰下の事は、斷碑古路に、橫ふと云ふ、斷碑なら、左程賞翫するに、足らぬが、去りとて、捨るも惜い、先づ保存して、置が好いと云ふ、これが、潙仰宗の風采、境致を以て、人を接する所に適する樣子ぢや、箇の僧、法眼下の事を、問はざるに、因て、師は、態々、喚び出して、如何と、問はれたるに、僧云く、其事なら、和尙に、御預けすると、云ふたは、五祖の氣に、入つた、仍て、五祖は、已、奴が、取りも直さず、法眼宗、其儘ぢや、巡檢の夜番が、自から、盜みをするも、同

じぢやと、五家の批評、五祖底は、斯の如し、而して、山僧の、五家は、然らず、如何か、是れ臨濟宗、云く、白拈賊、如何か、是れ雲門宗、四海只天子の、貴きを知つて、天子何の顏を爲すを、知らず、如何か、是れ曹洞宗、天下の憂に、先つて憂ひ、天下の樂みに、後れて樂しむ、如何か、是れ潙仰宗、禮は、玉帛に、非ざれば、表はれず、樂は、鐘鼓に、非ざれば、傳はらず、如何か、是れ法眼宗、鈎は、不疑の地に、在り、而して、若し趙州下の事、如何を問ふあらば、則ち云はん、徒らに、三寸を將て、帝者の師と、爲る、是れ山僧の、五家六宗の、妄評ぢや、人々自から、見るが好い、古人の糟粕に、附て、廻つて、何をか爲さん、五祖は、五祖底、山僧は、山僧底ぢや、宗旨は、人人の手裏に、在て、大小廣狹、各別ぢや、拘泥するに、及ばぬぢや、這般の批評、看來れば、淨地上に、屑を、撒するも、然れども、定盤星を、認むるは、猶ほ、不可ぢや、して、山僧、還鄕の、一句は、斯うぢや、文叔天子たりと、雖も、子陵只、舊時の、看を、爲す、大體、不立文字、敎外別傳ぢや、一法の人に、與ふるものは、無い、機位を、離ざれば、毒海に、墮入す、悟つたら、悟つた、臭味を、拔かねばならぬ、手に、白玉鞭を、將て、驪珠盡とく、擊碎せよ。

三百二十八　息耕上堂破家散宅

舉。息耕上堂云。破家散宅。毀祖滅宗。不挂絲。獨超象外。此人只會得接手句。未具透關眼。若

能洗面摸著鼻喫茶濕却嘴許汝半箇衲僧未全展鉢盂喫飯。

瑞阜拈云。比擬張麟兎亦不得。

前章五祖の、五家評論と、事は違ふが、息耕底は、また別ぢや、妙な事を、道はるゝぞ、破家散宅、祖を毀ち宗を滅す、條絲を挂けず、獨り象外に超ゆと、猶是れ透關の眼を、具せりとは、言はせぬ、直饒ひ面を洗ふて、鼻を摸著し、茶を呑で、唇るを濕はすも、十分に禪宗の飯を、食はせぬぞと、怎う、ぢや、是れが息耕の爲人親切か、山僧は冷笑一聲するぢや、解かつたか、解も不會も、都來皆錯ぢや、急に眼を、著けて看よ。

三百二十九　眞如臘八上堂

舉。眞如臘八上堂。乘王宮雪山坐。見什麽便恁麽。既恁麽。是什麽。黃金城廓草離離。天上人間付與誰。

天上人間付與誰。當年臘八出山時。妖星一見恁麽去。禍孽至今累好兒。

眞如臘八上堂ぢや、王宮を棄て、雪山に六年、坐して什麽を見てか、便ち如是なる、既に恁麽なるは、是れ怎ぢや、淨飯王宮は、草茫々として在る、天上人間の果報は、誰に付與することぢやと、何處で眞如を見る、眞如は、什麽の處に居るぞ、見んと欲すれば、一矢西天を

過ぐ。

三百三十　龍寶山僧渾是走作

舉。龍寶上堂云。一夏禁足安居。與諸人取證。山僧多是昏沈。今朝解開布袋。與諸人遨游。山僧渾是走作。所以道。佛手遮不得。人心似等閑。到村草步頭莫錯舉。

結夏中昏沈。解制後走作。嗚呼國師哉。雖然山僧未橫點頭在。塗毒鼓獅子吼。面上夾竹桃。肚裏荊棘林。知者多而會者有幾個。若有會者。不必以大燈獨爲東山下翹楚。咄。

眞如と云ひ、龍寶と云ひ、左顧已に老ひたり、右眄瑕なしぢや、怎う見ても、箇の兩個の老漢は、宗門の持て餘しものぢや、羅籠ずれども、住せず、呼喚すれども、首を廻らさぬぢや、就中龍寶は、尤も狠毒の肝腸を以て、白拈賊ぢや、油斷すれば、睫の毛も引拔るぞ、他の道破を看よ、一夏安居、諸人と與に證を取る、山僧多くは、是れ昏沈と、是れが怖しいぞ、今朝解夏、四方に分散す、各々布袋を、解き開いて、諸人と與に、自由に出游す、乃公は渾て是れ、走作ぢやと、此盜人の皮を、油斷すると、直に赤裸々に、剝奪に遭ふぞ、又云く、佛手も遮ぎることを、得ざるものか、人の心は、兎角に等閑なものぢや、皆は村逃れに行きて、無茶苦茶に、間違ひを、饒舌るなと、親に似て、親に非ず、疎に似て、疎に非ず、嫌な和尚ぢや。

三百三十一　法雲示衆

舉。法雲杲和尚示衆云。老僧熙寧三年文帳。在鳳翔府供申。當年崩了華山四十里。壓倒八十村人家。汝盡後生。茄子瓠子。幾時知得。大應拈云。高山流水。只貴知音。可惜當時一衆無人賞音。若是明上座。才聞恁麼道。拍手呵呵大笑。何故。詩向會人吟。

法雲年老心孤。只冀人唱和。而未得知音。茄子瓠子且置。老漢脚跟未點地在。如何續得佛祖命脉。且道。大應拍手大笑。也有節麼否。山僧只是冷笑一聲。咄。

瑞阜拈。云。法雲與麼の告報。什麼の處に於て。臨濟の宗旨を傳へ得たる山僧は箇の舊暦を繰り返へすことを欲せず。華山崩了四十里。八十村の人家を壓倒するの舊話は。法雲無きに非ず。之を語つて。什麼の要を做す。大應は流水高山和者寡しと云ふが。什麼の處に。法雲を見る。咄。兩箇の老凍膿。一生擔板。什麼の長處ある。是れ山僧の別語ぢや。

三百三十二　龍寶中秋上堂

舉。龍寶中秋上堂。僧問。靈山話月曹溪指月。意旨如何。師云。牛頭沒馬頭回。進云。寒山子底。又作麼生。師云。崑崙嘔生鐵。進云。玄沙爲什麼道。生死岸頭事。試甄別看。師云。和盤推出夜光珠。

進云。恁麼則天上人間。未出此光影中。師云。莫把商音作羽音。僧提起坐具云。者箇是爲光影中。未出光影中耶。師云。扁舟已過洞庭湖。乃云。藥嶠披雲笑王老。拂袖行。寒山不愁無口稜。長沙無由私路行。檢點將來。盡是在光影裏作活計。何也。中秋三五今宵月。爽氣遠浮銀漢清。

靈山曹溪藥嶠南泉。寒山長沙。未免話月。則且置。大燈以爲盡在光影中而作活計。自云。中秋三五今宵月。果然在光影裏而作活計。山僧一句。箭去兩岸猿聲啼。未住輕舟已過萬重山。

龍寶中秋の上堂。古人の月盡しを。叙述して。光影裏を出でゝと云ふ。來りて是非を說く者は。則ち是れ是非の人。や。龍寶も亦身を兼ねて。中に在り。然れども他は是れ光影中を出て。向上の一路を認め得たり。如何か是れ龍寶の一路を。扁舟已に過ぐ。洞庭湖。是れ他安身立命の處なり。然り而して。猶は是れ。半途に在り。畢竟什麼の處に至つて。古人と相見する。治世姦賊多く。亂世英雄稀なり。咄。

三百三十三　眞如一物不將來

舉。眞如冬至小參。僧問。一物不將來時如何。師云。羅公照鏡。僧云。莫便是和尚爲人處麼。師云。狗銜赦書。乃云。寥落叢林。拄杖子全無巴鼻。空疎活計。法堂前葉滿空階。逗到年盡歲窮。轉覺

寸長尺短。古人誰道有。今朝我亦不知當日事。有底問與麽道。只道山僧刀刮水洗。三十年前。也曾被老鼠咬破七條。

一物不將來。三十年前。也曾被老鼠咬破七條。和盤托出。莫道刀刮水洗。汝愛其羊。我愛其禮。年盡歲窮。寸長尺短。一有多種。二無兩般。眞如與麽說話。可謂頭上加頭。者僧不免眞如點檢。且道。眞如却免他點檢否。看來冬夜。供養缺乏。故致者破綻。畢竟如何。冬至月頭。賣牛買被。買牛。冬至月尾。賣牛買被。

眞如。一物不將來。問ひ來る僧に對して羅公鏡を照す。又是れ眞如爲人に非ずやと、問ふに對して。狗赦書を銜む。と謂つべし。眞如僅かに。其一半を答ふるに。過ぎずと。他は是れ寥落の叢林。空疎の活計。折脚鐺を拄へ。將ち來りて。窮厨煎し。餓厨吵す。素寒貧の極に至りて。猶は道ふ。寸長く尺短かしと。眞如の活計。只是れ刀刮り。水洗ふて。一物將ち來らずと。豈に料らんや。三十年前。曾て老鼠に七條を咬破らる。是れ什麽。此有難さ。膽に銘して。知るに非ざれば。圓覺開祖。佛光如來に。相見とは。道はれぬぞ。眞如は。活佛ぢや。算帳合して。錢足らずとは。是れぢや。是れが東山下の家風ぢや。三年前隣家に黑豆三合を貸したるを。思ひ出す位は。愚かぢや。刀刮り水洗ふでは。此境界を夢見ることが。能きぬぞ。

三百三十四　萬松上堂

舉。萬松上堂。放一線道。四方八面絕遮欄。收一毛頭。無邊刹海煙塵起。不收不放。萬松口似磉盤。是汝諸人。也須救取。

瑞阜卽不然。放一線道。蜂螫虎角。收一毛頭。鼠巢馬尾。可愛可憎。咄。

萬松老人。好笑々々。收めず放たず。口磉盤の如しと。何ぞ其不自由なるや。山僧試みに。救取せん。てつてんしよ。やうとてせー。是れで。一毛頭も。一線道も。四方八面も。收まり放つぢや。

三百三十五　白雲上堂祈好雪

舉。白雲上堂云。望天祈好雪。祥瑞難加。鵲噪青松上。變成白老鴉。紫騮牽出薄寒馬。金鐙敉成銀鏤花。苦苦。苦箇什麽。忽然變成雨。

白雲老人祈雪而成雨。寫得如觀。山僧亦成一頌。也太奇。今一白明。普賢戟化觀音迎。耳聞贏得圓通境。終日檐前點滴聲。

白雲上堂。雪を祈て雪降る。豐年の祥瑞ぢや。青松の鵲は。白老鴉と成る。昨日の黃驪は。今

朝の薄寒馬と成り、金鐙は銀鏤花と成る、面白い景色ぢや、是ならば、豐年の瑞徴此上も無い、芽出度か、苦苦ぢや、忽然變じて、雨と成る、百日の説法屁一つ、天公も好手ぢやが、五祖手を翻へせば、雪と成り、手を覆せば雨と成る、四。

三百三十六　麻谷持錫到章敬

舉。麻谷持錫到章敬。遶禪牀三匝。振錫一下。卓然而立。敬云。是是。雪竇著語云。錯。麻谷又到南泉。遶禪牀三匝。振錫一下。卓然而立。泉云。不是不是。雪竇著語云。錯。麻谷當時云。章敬道是。和尚爲什麽道不是。泉云。章敬卽是是。汝不是。此是風力所轉。終成敗壞。

麻谷持錫。到章敬南泉。遶禪牀三匝。振錫一下。卓然而立。太煞斬新。章敬云。是是。雪竇著語云。錯。南泉云。不是不是。雪竇著語云。錯。是是不是不是。錯錯。彼此唱拍相隨。兩鋩相對。中間無影。麻谷當時云。章敬道是。和尚爲什麽道不是。好一拶。南泉亦不肯許汝在。乃云。章敬卽是。是汝不是。此是風力所轉。終成敗壞。此語甚揑怪。山僧當時若爲麻谷。則直道。謝答話禮拜退去。雖然谷無語也好。圓悟下語云。果然被他籠罩。爭奈自己何。謂之被轉。却語脉裏看他麻谷與南泉。有二龍爭珠之勢。勝則總勝。負則總負。只有雪竇能見徹此段請訛。後面頌云。此錯彼錯。切忌拈却。四海浪平。百川潮落。古策風高十二門。門門有路空蕭索。非蕭索。作者好求無病藥。大意麻谷振錫卓立。人多邪解。以爲墮空見之坑。故雪竇道。此錯彼錯。切忌拈却。若夫竇之兩錯分明。則四海浪平百川潮落也。且如谷振錫。似帝釋宮十二門。門門有路空蕭索。佛祖亦不能窺之。可則雖可。爭奈墮我法二空之塹溝。故一轉道。非蕭索。且道無病藥者何。乃是拔佛病祖病底之藥也。而此兩錯。足以當之矣。龍牙云。夫參學人。須透過祖佛始得。新豐云。見佛祖之言教。如生寃家。始有參學分。若透不得。卽被祖佛瞞去。請深省察焉。

麻谷錫を持して章敬南泉に、到る機緣、尤も奇特なり、而して此請訛見難し、今之試みに、之を辯せん、麻谷章敬に到る、牀を迴る三匝、錫を振ひがら〳〵一下、章敬南泉の下働きを同うして、一は是是と云ひ、一は不是不是と云ふ、雪竇兩錯を下す、而して只異なる處は、章敬は是是、南泉は不是不是、故に麻谷、南泉に向て、章敬は是なるに、和尚什麽として、不是不是と云ふ、好一拶、而して南泉の答處、甚だ揑怪なり、是れ汝は不是、此は是れ風力の所轉、遂に敗壞を爲すと、是れ此則の見難き處なり、然れども、見徹すれば、麻谷、章敬、南泉、雪竇の四人、皆同轍なり、何となれば、當時若し南泉も、章敬と同じく、是々と道ふも、雪竇は依然として、錯を道ふべし、要するに、雪竇の兩錯は、此則の關鎖の在る所にして、錯とは什麽、麻谷、章敬、南泉とも、錯つたと道はゝ、沒交渉、此錯を見盡せば、此の則は直に

透過を得べし、故に頌中に、此錯彼錯、切忌拈却と云ふ、若し此兩錯を、會得せば、四海浪平らかに、百川潮落ちて、滯はりはない、何となれば、麻谷がら〳〵と、錫を振ふた端的は、帝釋天の十二門、門門を足下に、踏破つて、行く有樣あり、門々廓開して、空しく蕭索たり、然れども、蕭索に非ず、作者好し、無病の藥を、求むるにと、是れぢや、斯うなければ、嬉しくないぞ、空しく蕭索では、我法二空の見泥に、沈て出ることを、能はず、作家の漢は、病なきに、藥を求めて、佛病祖病の底を、拔かねば、ならぬぢや、麻谷の働らきは、凄じいものぢや、佛見も法見も、木葉拂ひで、美事なものである、爰らの骨合が、手に入ると、此の則は、吾物ぢや、左なくば、雪竇の兩錯も、麻谷の拶處も、見ねぬぞ、麻谷雪竇の働き、見ねねば、此則は、全然黑暗ぢや、能く吟味して、此場合を、承知するが好い、左なくば、無事甲裏に、頭出頭沒して、見泥を脫することが、能きぬぞ。

三百三十七　白雲石臺師兄至上堂

舉。白雲舉。石臺師兄至。上堂。僧問。如何是和尚家風。師云。鐵旗鐵鼓。學云。只有者箇。爲復別有。師云。采石渡頭看。學云。忽遇客來。如何祇待。師云。龍肝鳳髓。且待別時。學云。客是主人相。師云。謝供養。乃云。昔日先師頌臨濟三頓棒云。一拳拳倒黃鶴樓。一趨趨翻鸚鵡洲。有意氣時添意

氣。不風流處也風流。大衆。若到白雲門下。須要衆人助拳。

大衆若到白雲門下。須要衆人助拳。瑞阜試助拳。和尚今日有客。如其祇待之事。則請安之。衆等在焉。敢可不竭力哉。是山僧助拳也。古今人多向白雲頌中。要補助拳錯錯。

是れは五祖か、石臺師兄の、到來に就て、師學の問答を、舉げたぢや、面白い、先づ師の家風、如何との問ひに、鐵旗鐵鼓、動かすも敲くも、ならぬと、答へたか、然し此旗鼓は、融通の利かぬものではない、種々の方面に、働くぞ、采石渡頭でも、人を送迎す、客が來れば、龍肝鳳髓の饌膳を爲すぞ、扨て思ひ出したは、先師が臨濟三頓棒の頌ぢや、何んと己が家へ來たもの、一拳の助けを、賴みますと、是れ什麼怎いふ手傳ひを、爲したら、五祖の氣に、入るであらうか、爰らで、五祖の布袋腹を、見拔かねば、答へは、能きぬぞ。

三百三十八　虛堂赴雙林辭衆

舉。虛堂赴雙林辭衆。上堂。入息不居陰界。出息不涉萬緣。爲甚麼。葉萬松入雙樹。會得。拄杖子東之高閣。不然一生無定力。行藏多被業風吹。

七十猶移居辭馬腹。入驢胎。一出陰界。一涉萬緣。也是風流矣。若夫避鬧赴閑。縱有定力。終是塡閒守屍鬼耳。稽首東西南北息耕如來。

這の辭衆上堂、一應見れば、穩かなる、垂語ぢや、入息陰界に居らず、出息萬緣に涉らずと、は、樣に依て、葫蘆を畫いたが、然しながら、虛堂は時節因緣止むを得ずして、萬松より、雙、檮に移る、此旨を會得せば、拄杖子は、之を高閣に束ねて、高臥安眠も好いが、左ないくば、一、生定力ないの、悲さには、出ていたり、入つたり、業風の吹くに、任かせて、彼地此處と、彷徨す、ると、何處に、虛堂が居るぞ、見道がす、油斷すれば、這の老狸に、誑かされるぞ。

三百三十九　眞如拈四句百非

舉、眞如舉、僧問、馬大師、離四句絕百非、請師直指西來意、祖云、我不與汝說得、問取智藏、藏云、何不問、取和尙、僧云、敎來問、藏、藏云、我今日頭痛、問取海兄、海云、我到者裏却不會、僧回舉似馬祖、祖云、藏頭白海頭黑、師云、者僧雖是凱漢、馬祖父子、非但和賊納款、便是隱寄、亦被他勘將出來、山僧不會瓜田納履、大衆、各自歸堂。

馬大師離四句絕百非公案、諸方浩浩地、東說西話、而眞如檢覈不過、餘蘊矣、看看馬祖父子活機用、所謂於法自在者矣、大小大眞如、不會瓜田納履、而不出其證、可惜許、何故、禮非玉帛、而不表、樂非鐘鼓、而不傳。

這は是れ僧、馬大師に問ふ、四句を離れて、西來意を示せの則ぢやが、眞如が爰に、拈じ來

たは、格別の樣子があるぢや、此僧凱漢と雖も、馬祖の父子も、亦賊物に和して、納款する、而已ならず、餘り隱くし、過る故に、這の僧に、勘過し、將ち來らる、這の僧知らぬ顏の、半兵術で、其實馬祖父子の、屋探しをする、眞如は、开んな疑はしいことは、嫌ひぢや、其積りで、大衆、歸堂して、安心するが、好いと、浮かりすると、眞如に、睫の毛までも、數へらるゝぞ、別して此上堂、面白い、そこで、山僧は、眞如の瓜田に、履を納れぬ、證據を、出して、貰ひたいと、は、無理な、注文でも、なからう、都て、拈評は、斯う七穿八穴か、面白い。

三百四十　趙州南方火爐頭

舉、龍寶開、爐上堂、趙州示衆云、三十年前、南方火爐頭、有箇無賓主話、直至而今、無人舉著、師云、咄、倆、只要炙手助熱、誰家竈裏、火無烟、卓拄杖一下、

趙州火爐頭、無賓主話、一犬吠虛、千猩寶、只是有舉者、而無會者、龍寶大士、舉底且置、鵲林著語云、冰獸逐捧爐、是則是、可惜許、吾這裏則不然、謗斯經故、獲罪如是、阿呵呵、山僧老來無伎倆、只要爐下、暖似春、

昔し〳〵、三十年前に、老翁、爐が、爐邊で、茶呑み話しをした、ことがある、其話しは、主も賓も、頭も尾もない、面白い話しであり、たが、近頃は、絕えて、人の舉著するを、聞かぬと、是れ

は趙州の毒氣ぢや、龍寶は之に對しての挨拶は、面白い、咄、趙州老漢よ、尊公は只手を炙つて、熱くなることを、知つて居つて、火鉢を戀がるか、何處の家の竈にも、火の無い處はない、と。鶴林は、氷獸捧爐を逐ふと、著語した、辣腕は勝れたものぢや、此名句の後ちに、山僧は語を置く力は無いか、責めてのことに、老來伎倆ない、只爐下暖かに、春の如きを要すと、阿呵々、斯んな埋草では、沒交渉ぢや。

三百四十一　佛光上堂一氣循環

舉。佛光上堂。一氣自循環。萬化無終始。拄杖夜抽條。華開世界起。卓拄杖。老胡打失當門齒。

卓拄杖。老胡打失當門齒。咄。打失幾枚。達磨健在。今日瑞阜手中。依例栗栗枳枳。稜稜層層。食麥飯。喫莖虀。剝剝有聲。袖短臂長。東拄西撐。撐去撐來日又夜。何故。薩尸蘇世娑。

これ〳〵、是れぢや、佛光冬至の上堂、一氣循環、攀條の文句は、別に變つたことも無いが、拄杖を卓して、老胡當門の齒を、打失すと面白い、佛光で無ければ、出ぬ語ぢや、戛然たり。と、拄杖一下の聲に和して、達磨の齒が脫けた。何本脫けたか、怎ぢや、這箇の按排は、摸擬は能きぬぞ、山僧も種々に、遣つて見たが、中々屆かぬ、齒が脫けたに、依然齒音「サシスセソ」は發するぞ、まだ脫けて、居らないよ、一先づ安心。

三百四十二　寶林示衆指法座

舉。寶林示衆指法座。聚草積石。說有談空。取古尙賒。一時拈却。何故。別有一路子。

寶林老人。異哉有二路子通借問向甚處進步。吾這裏有白澤圖。無箇妖怪。何故。自從寶聖法未會殺生。

寶林の示衆、別に一路子の、通ずるありと、面白い、然れども、草を聚め、石を積み、空を談じ、有を說く、別に拈却するに、及ばぬぢや、然り而して、虛堂の一路子は、猶ほ通ずるを許すも、若し進前すと、道はゞ、彌天の罪過ぢや、咄。

三百四十三　白雲上堂日可冷

舉。白雲上堂云。日可冷月可熱。衆魔不能壞眞說。大乘作麼生是眞說。潑狐潑賴。若信不及。白雲爲個道。一要衆人會。二要龍神知。乃拈起法衣云。者箇眞紅色。剛然道是緋。

者箇是眞紅色。剛然道是緋。若山僧底。則道眞紅非緋。和尙莫謗斯經。何故。聽事不眞。喚鐘作甕。

道箇眞の紅色、剛て是れ緋と道ふと、五祖の鐵面皮を看よ、厚さ三寸ぢや、斯樣に、面皮厚

くなると、善く人を欺むくぢや、日は冷やかなるべし月は熱かるべくも、衆魔眞說を壞すること能はず、白雲故らに、衆人の會を要し、龍神の知を要し、人天公衆の前に於て證據を示さんとす、何等の白拈賊ぞ、山僧は好かぬ、這の老古錐祖師門下の、厄介物め、咄。

三百四十四　閩王請羅山

舉、閩王請羅山開堂、纔登座、以手斂僧伽梨衣、顧視大衆、便下座、王近前執山手云、靈山一會、何異今日、山云、將謂、倆是箇俗漢、虛堂云、羅山當時、下者一著、不妨驚群動衆、賴過大王是佛法中人、今日忽有人問新寶林只對他道、將謂無人知音、自然頭正尾正、

拈云、羅山大膽麤强、寶林小心細密、瑞阜若當時、爲羅山則答道、將謂大王忘却如來付囑、如是則不背他靈山一會、何異今日、而頭尾俱正、

這の閑絡索は、閩王が羅山を請じて、開堂陞座せしむる、句子ぢや、羅山手を以て、僧伽梨衣を斂めて、大衆を顧視して、便ち下座す、美事な上堂ぢや、これで事了だに、流石の閩王も、施主ぢやから、一應の挨拶を、爲なければならぬ、乃ち羅山の前に進んで、握手の禮を執り、且つ云く、靈山の一會も今日と別に變つたことが無いと、仁義道中、無くて協はぬ、挨拶ぢや、大に甘い、羅山そこで貴公は、今少しく見處あるかと見たに、矢つ張り俗人ぢやと、此語惡いではないか、忌諱に觸れたそこで虛堂は、肯はぬぢや、併しながら、羅山の倆是箇俗漢と云ふたは、侮辱したのではないか、虛堂の道破は、詞ばに圭角を脫して、瑕が無い、當時若し、山僧ならば、將に謂へり、大王如來の付囑を、忘却すと、思ひしに、相變らず、保護の恩政を、施さるは、辱けないことである、と云はんのみ、若然らば、首尾俱に正しからずや。

三百四十五　張拙秀才問長沙

舉、張拙秀才、問長沙和尚、百千諸佛、但聞其名、未審居何國土、沙云、黃鶴樓崔顥題後、秀才曾題麽、拙云、不曾題、沙云、無事題取一篇、眞如頌云、萬里中原暗板圖、中興事業隱樵漁、金鷄一拍扶桑曉、喚得英雄出草廬、

瑞阜和云、潛龍何用上林圖、未見大人遁野漁、劉備若微興漢意、孔明不肯出雲廬、

四維上下到る處溝に充ち、壑に滿つ、人天充滿の處、百千の諸佛、遨游せざるはなし、山あり雲生じて、衣を著け、水あり月昇りて、影を分つ、云ふこと勿れ、名ありて國土なしと、十方同聚會、是れは是れ、選佛場、心空及第して歸る。

三百四十六　大燈上堂是法住法位

舉。大燈上堂。是法住法位。世間相常住。蒻拈拄杖。卓一下云。者箇是龍寶拄杖。喚作是法。入地獄如箭。喚不作是法。亦入地獄如箭。是故世尊苦口。便道得住法位三字。雖然如是。又卓拄杖一下云。寒風凋敗葉。且喜故人歸。

是法道什麽。未在。更道。住法位。丁寧損君德。世間相常住。柳綠花紅。世尊苦口。憐兒不覺拖泥帶水。龍寶頭上安頭。卓拄杖一下云。者箇是龍寶拄杖。喚作是法。入地獄如箭。勘破了也。山僧卽不然。上天爲帝釋。鎭圭入地爲獄卒。鐵棒如喚不作是法。亦入地獄如箭。勘破了也。山僧卽不然。上天爲帝釋。鎭圭入地爲獄卒。鐵棒如今瑞阜牀頭。逢佛殺佛。逢祖殺祖。有時燈前打老鼠。有時扶過斷橋村。何故。自從賢聖法未曾殺生。咄。

龍寶國師。是法住法位。世間相常住。拈拄杖。丁寧反覆。盡せりぢや。箇樣に慇重にせざるも。是法は是法。住法位は。住法位ぢや。地獄にも入り。餓鬼にも入る。不自由は無い。這箇が面白いぢや。山僧は斯うぢや。拂子を擬つて。一下して。「思ひくよ〳〵。川ばた柳。水の流れと見て暮らす。」

三百四十七　眞如二月旦上堂

舉。眞如二月旦上堂。寧與狐謀裘。難與羊謀羹。喝裏抽橫骨。明中坐舌頭。卓拄杖。魯人不重東家丘。

瑞阜和云。利嘴穿輕裘。蚊軍不襲羣。玉堂幾群聚。喜刺貴人頭。又云。浴罷被羊裘。玉顏窺鏡羣。君王恩若海。欲朝幾搔頭。

眞如の上堂。向上に摺り上げた。亟示ぢや。怎うぢや。一つ取りにするならば。狐の裘ろを。相談するが可い。羊に與みして。膽羹となり。人の口に入ることは。否ぢや。人の知らぬ處にて。影辨慶を自慢するより。明相に出て。饒舌して。不調法するが。好ぢやと。眞如何處を見て。箇樣の事を。謂はるゝか。且つ拄杖を卓して。夫れぢやから。孔子と云へば。四百餘州に誰れ一人。尊ばざる者はないに。肝腎生國の魯では。東家の丘かと。一向重視せぬ。妙なものぢや。此上堂。何處に眞如が居るぞ。五年や。十年の修行では。香ひも嗅げぬぞ。

三百四十八　晏國師示衆

舉。晏國師示衆云。鼓山門下。不得咳嗽。時有僧咳嗽一聲。山云。作甚麽。僧云。傷風。山云。傷風卽

得。寶林拈云。是則是。染生招箭。若一向與麽。道絶人荒。

鼓山老婆。屎塊子一見生嘔吐。著箇話與狗子去。狗亦不喫矣。寶林云。若一向與麽。道絶人荒。是則是。雖然。播間枯骨。爭之不足。

鼓山晏國師の示衆ぢや。乃公が會下では。咳ばらひすることを許さぬと。一僧ありて咳嗽一聲した。山云く。甚麽を爲すぞ。僧云く。傷風にて咳が出ました。山云く。傷風ならば。許して遣ると。是れを老婆禪と云ふ。虚堂拈じて云く。梁生つて箭を招く。若し一向に斯ういふ風ならば。宗風衰微するぞと。虚堂も老婆ぢや。如是の禪は。兎角批評の價値もない。山僧は播間の枯骨爭そふに足らずと云はんのみ。

三百四十九　龍寶陞座

舉。龍寶祐德寺供養。陞座云。至道曠遠。幽致虚凝。佛佛以之匡持。祖祖以之保護。其要只在利度群有。隨處作主。脱體現成。隨物能轉。苟得其人。則匪啻自得。靈然爲慈悲動於中。隨順菩薩行願。豁開本有光明藏。賑濟五趣之貧兒。高低普應。前後無虧。遇緣卽宗。無滯一隅。

這一絡索。淨佛國土。成就衆生。底樣子。國師口說如瀉瓶矣。

是れは龍寶堂々たる陞座ぢや。是れが菩薩の佛國土を淨め。衆生を成就する。行願ぢや。

然り而して。高低普く應じ。前後虧ることなし。緣に遇て卽宗ぢや。決して一隅に滯はり。て融通せぬ樣なものではない。其油然として。慈雲を興し。沛然として。悲雨を降らすの勢は。廣大なものぢや。これでなくては。祖師と稱せられぬぢや。

三百五十　白雲上堂愛捩轉人鼻孔

舉。白雲上堂。僧問。如何是白雲。爲人親切處。師云。愛捩轉人鼻孔。學云。便恁麽去時如何。師云。不知痛痒漢。乃云。四海五湖。奇士圍繞。無狀村夫。只解拖犂拽耙。水草無底鉢盂。高懸羊頭賣狗肉。滅却黄梅宗。

白雲愛捩轉人鼻孔。山僧卽不然。父攘羊則子隱之。五祖高懸羊頭而賣狗肉。滅却黄梅宗。風不曾改過。却道無辜負老盧。咄。雖然等閑莫扶起家鬼爲祟。

白雲の爲人親切は。人の隆鼻を。捩轉するを愛す。便ち捩られた人は。怎うぢやと。師云く。痛さ痒さを知らざるものは。詮方がないと。爾うして。提綱は處韻古體を以て。して云く。白雲は四海五湖の奇士。圍繞せり。乃公が如き。禮儀を知らざる村僧は。只犂鍬を把て。牛を逐ふことのみより知らぬ。此牛の食たる水草は。底無しの鉢盂に。入れてある。して高

く羊頭を懸て狗肉を賣る、表面は立派に見ゆるが、内實は爾うでない、吾が此中には、精の鑑のとの、辨別は無い、斯の如く、佛の壽命を縮くと云ふが、誠なる哉、天地の懸殊がある、ぢや、そこで誰そ、拔山蓋世の力を有するものありて、身を碁石に摺て、法の爲めに荷擔するものあり、有らば家も、築ゐるか、若し無きときは、祖師に申し譯は無いと、是れ什麼、是れが五祖和尚たるに負かぬ、山僧も履を把て、後へに隨行するぢや。

三百五十一　南泉參百丈涅槃和尚

舉。南泉參百丈涅槃和尚。丈問。從上諸聖。還有不爲人說底法麼。泉云。有。丈云。作麼生是不爲人說底法。泉云。不是心。不是佛。不是物。丈云。說了也。泉云。某甲恁麼。和尚作麼生。丈云。我又不是大善知識。爭知有說不說。泉云。某甲不會。丈云。我太煞爲爾說了也。瞻之在後。忽焉前。剔起眉毛。則電旋。明暗雙雙。無處討。說乎不說。任顏偏。兎馬有角。牛羊無角。政乎泉乎。是精識精。爲鬼爲蜮。邪法難扶。從上諸聖不爲人說底之法。泉云有。丈云。說了也。這裏收在。則那邊放過。午頭沒馬頭回。羅籠也不背住。千眼窺亦無路。咄。

前章は、白雲爲人親切の、垂示ぢやか、箇は是れ、南泉と、百丈との、爲人說不說の、機緣ぢや、此の則は、向上にして、一寸取り付きが、能きぬぢや、動もすれば、取り逆がすぞ、其筈ぢや、

君は深野の蟋蟀聲はあれども、形ちは見ゆぬ、さァとらまへたさァにげたとは、實に此の則ぢや、捕まへんとすれば、直に逆て、しまふぞ、先づ山僧は、斯うぢや、從上の諸聖還つて、人の爲めに、說かざる底の法ありや、此所問は、一箇の狼毒の肝腸ぢや、百二十斤の鐵鎚を、慕額に驟したぞ、そこで南泉云く、有りと、中々太い肚腸ぢや、此の有りは、容易に出でぬぞ、丈云く、作麼生か是れ、人の爲めに說かざる底の法と、斬り掛けた、泉云く、不是心、不是佛、不是物と、材料の豐富なるものは、仕事も大きい、丈夫に持ち出した、此度胸を看よ、そこで、流石の百丈和尚ぢや、人を殺さば、須らく血を見るべし、汗れならば、說き了る也と、南泉を、二鐵圍山の外に、拋げ出さんとしたぞ、南泉云く、某甲は只恁麼、和尚は作麼生と、敵の鏑矢を、把て、射返へした、勢ひがある、丈云く、我れ又是れ大善知識に非ず、爭でか說不說、あることを、知らんと、是れ什麼賊は、能く賊を知る、正宗の名劍を、慕額に驟した樣な、此揑怪の加減は、言語に述べられぬぢや、泉云く、某甲は一向不會と、一本綱で動かぬ、南泉の答ぢや、丈云く、我れ太だ爾が爲めに、說き了れりと、不思議なる商量かな、丈は泉の語に對して、向きに說き了れりと云ひ、今また我れ爾が爲めに、說き了ると、此語訛の轉變、手を翻へすに似たり、呆れ果て、開いた口を噤むことも、能きぬぢや、實に奇妙奇天烈さり〴〵す、さァ捕まへた、さァ逆げた、此商量の始終、手に把て見る樣に、無けれ

ば宗旨の甘味は、嘗むること能きぬぞ、雪竇は、祖佛從來人の爲めにせず、納僧今古、頭を競ふて走るぞ、爾うして、南に向つて北斗を看る、斗柄の尻が垂れてあるか看やうとすると、見ぬ鼻孔を拈ねつたかとすれば、口を失つたと、斗柄と云ふものは面白い前に在るかとすれば、忽焉後へに在り、南泉百丈の問答商量此通りぢや、捕まへて見よ、捕まへんとすれば、遁る、此處に在るかとすれば、彼處ぢや、彼處かと思へば、斗でもない、急に眼を著て看よ、急に著けた處が、見ぬぞ、怎うぢや〳〵。

三百五十二　臨濟行業純一

擧、臨濟初在黄檗會下、行業純一、首座乃歎曰、雖是後生、與衆有異、遂去使問佛法的的大意於黄檗、三度發問、三度被打、後投大愚、其言下大悟云、元來黄檗佛法無多子、却來謁黄檗、黄檗見來便問、這漢來來去去、有什麽了期、師云、秖爲老婆心切、便人事了侍立、黄檗云、大愚有何言句、師遂擧前話、黄檗云、作麽生得這漢來、待痛與一頓、師云、說什麽待來來、即今便喫、隨後便掌、黄檗云、這風顛漢、却來這裏捋虎鬚、師便喝、黄檗云、侍者引這風顛漢參堂去、拈云、咄哉風顛漢、曹州邢氏子、破産而不爲家、山僧也他兒孫、寒貧學儞、只是杓柄短而不達泉家醜、句外揚老而猶不死、噫、

此の則は名高い、臨濟三頓棒ぢや、臨濟が黄檗の棒下に、疑團を興して、檗の命に依て、大愚に參じて、愚の言下に於て、黄檗の佛法多子なき、旨を領會し、却り來つて黄檗に謁して、前話を擧す、檗云く、作麽生か、這の漢來るを得て、待つて痛く、一頓を與へむ、師云く、什麽の來日を、待つとか、說かむ、即今便ち喫せよと、後ろに隨つて、便ち一掌を與ふ、爰ぢや、活きて働らく、臨濟を看よ、黄檗云く、這の風顛漢、却つて這裏に來つて、虎鬚を捋づ、師便ち喝す、埒の開いた時は、斯ういふ、無造作なものぢや、黄檗云く、侍者這の風顛漢を引て、參堂し去らしめよと、流石の黄檗ぢや、始めあり終あり、一放一收の美事さ、手に把て、見る樣ぢや、這箇の始末を、能く呑み込め、修行に筋骨を、拔かぬと、爰等の按排が、自由に往けぬぞ、

三百五十三　巴陵祖意教意

擧、白雲擧、僧問巴陵鑒和尚、祖意教意、是同是別、鑒云、鷄寒上樹、鴨寒下水、師云、大小大巴陵、只道得一半、白雲即不然、掬水月在手、弄花香滿衣、

巴陵白雲、俱是好句、祖意教意、同別、則未在、山僧即不然、牛飲水成乳、蛇飲水成毒、

臨濟機鋒の作略は、前章に盡したが、是れは雲門宗の曲調ぢや、臨濟巴陵對照して見る

と、配合面白いぢや、而して五祖の拈評、また調が高いぢや、巴陵の鵝寒して樹に上り、鳴寒くして水に下る面白い、然るに五祖は、掬水月在手、弄花香滿衣、まだ〳〵、其上ぢや、斯ういふ言句は、中々容易に出る者でない、祖意教意、一括して、古人に倍する言句を吐て看よ、山僧は風吹柳絮毛毬走、雨打李花蝶飛。

三百五十四　息耕上堂箇箇頂天履地

擧。息耕上堂、箇箇頂天履地。爲甚麽蹈著二千年前底影子。便做一動子不得。莫有不蹈著影子底麽。卓拄杖。有則有。只是今日不來。

老老大大息耕。道則道得。猶是蹈影子底。若夫全提將去。則奚要待來日。卽今大圓覺爲伽藍。身心安居。平等性智。可惜許。既是觸乎他諱。

二千年前の影子を、蹈著せざる底ありや、息耕拈して云く、有るは則ち有り、只是れ今日來らずと、依然として無きなり、若し有らば、何ぞ今日を要せん、明日も亦來らざるなり、山僧が這裏にも、這の影子を蹈著せざる底あり、適來既に呈似し了れり、卽刻村齋に赴むく、再問を要する勿れ、咄。

三百五十五　眞如佛涅槃上堂

擧。眞如佛涅槃上堂。引手捫胸云。眞如手摩胸。却與瞿曇別。當初只道得黃金。今日看來是生鐵。戶破家殘。百醜千拙。一回飲水一回咽。

瞿曇臨死。引手捫胸。咄。眞如也做鑿。不免傍觀者醜。瑞阜風流出格。不讓於他。何也瑞阜有三昧。却與眞如別。黃金自是價。黃金終是不混入生鐵。藥貴就賤。弄巧成拙。一任看他飲水咽。

此上堂は、丈夫自から衒天の氣あり、如來の行處に向つて、行かずぢや、眞如當時、謂へらく黃金を得んとして、生鐵に逢と、何ぞ知らん、鐵を變じて、金と爲すは則ち易く、黃金を變じて、死灰と爲すことは却て難しと、眞如戶破れ家殘して、百醜千拙、是れ眞如の妙處なり、山僧は讃歎し及ばず、何故ぞ讃歎す、今日は佛涅槃會。

三百五十六　世尊初成道

擧。世尊初成道。於普光寶殿。不離道樹。上須彌山頂。帝釋宮。帝釋化作一寶坊。爲說十住法門。龍寶拈云。世尊半夜日頭出。帝釋日午打三更。若是山僧開堂底。天平地平。卓拄杖一下。便下

座。

世尊初成道。咄。成箇什麼。莫謗斯經。雖然寒雲抱幽石。霜月照清池。於普光寶殿。不離道樹。達磨不來東土。二祖不往西天。上須彌山頂帝釋宮。說十住法門。言之甘者。其心必苦。大燈拈云。世尊半夜日頭出。帝釋日午打三更。夜半正明。天曉不露。賤如泥沙。貴如金玉。若是山僧底。天平地平。莫認常盤星。天傾西南。地陷東北。國師三面六臂無處用。卓拄杖一下。果然錯。

世尊成道。龍寶の拈語を看よ。世尊半夜に、日頭出て、帝釋日午に、三更を打す。明暗雙々底は、他に許すか。龍寶底は、天平らかに地平らかなりと。龍寶怎んな顔して、這箇の語を吐くぞ。卓拄杖一下。便ち下座。錯果然點。山僧邪に隨て邪を打するを好まず。遮莫あれ。此間だに且く。爐頭に就て、手を炙つて、熱を助くべし。

三百五十七　佛光浴佛上堂

舉。佛光浴佛上堂。瀉沸泥猪疥狗身。洋銅百灌恨方伸。眞如不惜湯添沸。要輟餘薪待後人。

瑞阜和云。傾海水瀉奈此人。洋銅灌去恨何伸。山僧不做眞如作。稽首紫磨金色身。

釋迦老子。厄介物ぢや。生も人を累らはし。死も人を累らはす。成道ぢやのと。又兒孫を累

はす。前章成道には。龍寶の手を累はし。今ままた。初生を頌して。佛光に迷惑を掛けたぞ。佛光も忍俊不禁ぢや。堪へ兼ての挨拶面白いぢや。乃公が此樣の泥猪や。癩狗の身を瀉ひ。頭から沸熱つた湯を。幾度も潑せ掛て。遣たで。少しは胸も收まつたが。自分獨り。此赤兒に浴せ掛けるが能でもない。薪を剩して。兒孫佛湯の用に供せんとする。心算ぢやと。噫。是れで。釋迦老子も滿足であらう。雖然山僧は然らず。香湯佛を澆き。且つ之を齊うるに。禮を以てす。

三百五十八　息耕上堂以壇拜將

舉。息耕謝頭首秉拂上堂。以壇拜將。爲求活國之英。以拂授人。要見枯心之士。雲黃峯下。龍象所歸。虛堂薄處先穿。引得證龜作鼈。

虛堂年老心孤。癩兒引伴。秉拂授人。要但在補綴薄處。也不爲證龜作鼈。畢竟如何。行盡水窮處。坐看雲起時。

是れは息耕頭首の秉拂を。謝する上堂ぢや。大將を拜するには。傲慢では。往かぬぢや。濠高の如く。先づ齋戒壇を築いて。禮を以てするは。畢竟國士名將を得んとする。爲めぢや。今ま叢林に。秉拂するのも。畢竟多年刻苦して。枯心淬厲。乃ち抱道の上士を。得んが爲め

ぢや、然るに雲黄峯下には、龍象聚會して居るが、肝腎なる、主人虚堂は、衣類の薄い處より、先きに破れる如く、一向襤褸を出して、所得が無い、仍て香林の如く、龜を證して、鼈と作すに、足るべき、頭首が、能きたは、芽出度となり、立派な上堂ぢやが、何處で、虚堂を見るぞ。

三百五十九　白雲上堂卓拄杖一下

舉。白雲上堂。卓拄杖一下。乃舉起云。拄杖子敢問汝。還說得如來禪麼。自云。說不得。還說祖師禪麼。自云。說不得。既說不得。白雲今日。出自己意去也。出自己意。小兒子戲。人天衆前。討甚巴鼻。

五祖拈鼻孔失却口。若有人問山僧則答道。拄杖子。如來禪說了也。祖師禪說了也。若道如何說了。和聲劈脊便打。何故。語忌十成。好語說盡。人必易之。

是れは五祖の上堂ぢやが、何處に捕捉する處があるか、捕捉すべからざる處に、妙を得て居るは、五祖ぢや、拄杖子既に自から、說得すと云ふ、止むを得ず、自己の意を出す、自己の意を出すは、小兒の戲むれぢや、人天多數の前には、出せぬと、宛然戲談ぢや、何處に、五祖は居るぞ、捕まへんと欲せば、君は深野の蟋蟀ぢや。

三百六十　興化四方八面來

舉。興化因僧問。四方八面來時如何。化云。打中間底。僧便禮拜。化云。咋日赴箇村齋。中路値一陣狂風暴雨。向古廟裏避得過。息耕拈云。興化被者僧拈出無及斧子。便乃高竪降旗。寶林當時若見他禮拜。便休去。何故。且教者漢。擔一片板。空過一生。

興化云。咋日赴箇村齋。避得狂風暴雨。於古廟裏。可謂臨濟正統嫡子矣。息耕以爲。興化高竪降旗。於者僧。又見者僧禮拜。寶林乃休去。何故。且教者漢擔一片板。空過一生。大小大寶林。太煞無慈悲。者僧禮拜也可。賴逢興化示衆。認得一條活路。何者他是干木隨身。逢場作戲底之作家也。故山僧爲雪寃。

興化四方八面來の則ぢや、化云く、中間底を打せん、爰に於て、興化を見るべし、僧の禮拜は、實に其當を得たり、是れにて、公案圓成せり、化云く、咋日箇の村齋に赴むく、譬喩、卽是れ注解なり、息耕の拈評、當時這の僧の禮拜を見て、便ち休し去りて、箇の漢に、一片板を擔いて、空しく一生を過さしむと、知らず、箇の僧、一片板を擔て、一生を空過するや否や、他は是れ、一方向きの者に非ず、寶林の批判、山僧は之を首肯すること能はず。

三百六十一　眞如結制小參

擧。眞如結制小參。欲去不去。被去礙。欲住不住。被住礙。元上座一條拄杖。尋常硬如生鐵。今日四稜蹋地。和身放倒。也要諸人知道。藏身處沒蹤迹。沒蹤迹處不藏身。江山盡永。殿閣涼高。綠陰未轉庭槐。清風先起蘋末。擊拂子。猛虎起屍。猫兒歃血。

眞如和尙。一條拄杖子。因甚去住。如此被礙。因甚四稜蹋地。和身放倒。吾這裏不做箇去就。他人住處我不住。畢竟如何。空山白日蘿窓下。聽龍松風午睡濃。

箇の結制小參の垂示は眞如の肝腸を傾むけた手腕を看よ。去らんと欲して去らざるは、去るに礙へらる。住せんと欲して住せざるは、住に礙へらる。底事ぞ去るも住するも。此方の勝手ぢや。遠慮するに及ばぬぢや。眞如藏身の處蹤跡を沒し沒蹤跡の處、身を藏さずとは、如何なる境界ぞ。斯うぢや。爰に居る處は、直に沒蹤跡ぢや。此沒蹤跡の處に、身を藏すには及ばぬ。結夏の今日は、盡も永く、凉氣も殿中に充ち、綠陰には、白晝日影も傾むかぬ。清き風は、庭池に起りて、蘋蘩の上に浮ぶと、好い氣候ぢや。これぞ骨を折らなくては、ならうまい。猛虎は人を食ふに、屍ねを起すの、能あるぢや。猫兒は血を歃ふて、殘さぬ功があるぢや。爾等衲子、豈に功能なくして、可ならんや。衲子功なかるべからず。而し

て大功は宰せず。無功の功、實に宗門の大功と稱すべし。

三百六十二　龍寶拄杖子有三件長處

擧。龍寶上堂。拈拄杖云。拄杖子有三件長處。第一疾程。朝到西天。暮歸東土。第二妙言。一句截流。萬機寢削。第三巧通變。作龍上天。爲蛇入草。若人善識得。還我話頭來。

龍寶拄杖子三件。咄。有什麽長處。吾這裏不做箇去就。第一殺人刀活人劍。自在無礙。第二入窟入細。說佛說祖。第三要若人識得。不妨上天作龍。入地成蛇。若識不得。再犯不容。

龍寶の拄杖子三件の長處ありと。第一疾程朝たに西天に到り、暮に東土に歸る、へーい。第二妙言、一句截流萬機寢削、へーい。第三巧通變、龍と作りて、天に上り、蛇と爲りて、草に入る、へーい。若し人善く識得せば、我に話頭を還へし來れと。猶ほ和尙に還歸する者ありや。在らば還へしませぬ。若し無んば和尙に呈似します。龍寶和尙、請ふ諒せよ。

三百六十三　佛光受日本請辭太白

擧。眞如在宋國天童山景德禪寺。受請辭衆。上堂。天童環溪和尙。付衣罷。師拈起衣云。世尊傳金襴衣外。別傳箇甚麽。以手指云。師兄過在。俯殃及我。遂就座。時有僧出問云。動若行雲。止猶

谷神。既無心於彼此。豈有象於去來。今日和尚遠赴扶桑。且道有心耶無心耶。師云。一片月生海幾家人上樓。進云。和尚大唐將東山宗旨示徒。今往扶桑。作何方便。師云。倆隔海聽取。進云。非但扶桑承雨露。大唐國裏亦霑恩。師云。將謂無人。

金地遙招手。江陵暗點頭。佛光國師祖元和尚。佩東山下心印。而西來。以手指云。師兄過在倆。殃及我。早是曹溪毒波浪。將流傳于扶桑。卽今發船句子。看看。鴆羽沈水魚隘死。我大日本帝國は。大乘教流布。年久しうして。禪法の興るは。先きに蘭溪あり。今や副元帥北條時宗公は。使ひを遣はして。宋國天童山に在る。無學祖元和尚を屈請しいて。建長に住せしむ。師は吾邦に。東山下の宗旨を傳ふる。先導者なり。師の彼地を辭するに。方りての上堂に。環溪法兄は。無準鑑禪師の法衣を付して。遠游を送らる。師乃ち衣を拈起して云く。世尊金襴衣を。傳ふる外か。別に箇の甚麽をか傳ふと。師乃ち手を以て指して云く。師兄過ち。倆に在り。殃ひ我に及ぶと。是れ什麽。卽是れ曹溪の毒波浪ぢや。環溪何の過まちかある。師も亦何の殃いか。身に及ぶ。一箇狠毒の肝腸ぢや。此大根機ありて。始めて法幢を建てらるゝぢや。時に僧あり。問て云く。動く行雲の如く。止まる谷神の如しと云ふか。師は彼此に。心なければ。豈に去來に。象ちあらんや。然るに今ま。日本に赴むく。是れ有心か。無心か。好一摠。師の之に對して。一片の月が。海に出でたらば。何處も此處も。人が樓

に上りて見るぢや。乃公が日本に赴くに就て。多數人が目送して。吳れらると。僧云く。宋國の佛法。今ま東す。如何なる。方便を爲す。師云く。應爾うぢや。倆等は海を隔て。聽き取るが好いと。僧云く。若し然らば。只日本而已ならず。支那も亦雨露の恩に霑はひます。師云く。乃公は人無いと。思ふたに。倆等の如き者も有る哩と。是れ什麽。此一段落は。師が日本に。東山下の法を傳ふる熱血ぢや。仰信せよ。

三百六十四　臺山婆子

舉。臺山路上有婆子。凡有僧問。臺山路向甚麽處去。婆云。慕直去。僧總行。婆云。好箇師僧。便與麽去。趙州聞得云。待我去勘者婆子。州到如前問。婆亦如前答。州歸院云。婆子被我勘破了也。一息耕云。者婆子向寸草不生處。打箇陣子。趙州不施韜略。直欲破之。及乎交鋒之際。又却失利。道。被我勘破了也。大似別人棺木。扛歸屋裏哭。莫有爲趙州作主底麽。卓拄杖。勘過了一道打。

趙州勘婆所謂齊人墫間乞。餘而歸來。與以壓酒肉。驕其妻妾。一般。自君子觀之。則其妻妾不。羞。而不。相泣者。幾乎希矣。誰出來救趙州者。息耕云。大似別人棺木。扛歸屋裏哭。大燈云。失錢遭罪。兩箇老漢。果能救得乎。山僧未知其可。畢竟如何。含血噴人。先汚其口。咦。

五臺山路上に。一婆子あり。尋常僧あり。臺山の路。甚麽の處に向て。去ると問へば。婆云く。

慈直に去れ、僧便ち行く、婆云く、好箇の師僧、與麽に去る、是れにて婆子の勘破了れり、趙州風無きに波を起し、臺山の婆子、我れに勘破せらるゝと、州の意何處を見て、道ふたぞ、息耕云く、趙州大に、他人の棺木を扛し、屋裏に歸りて、哭するに似たりと、是は則ち是と雖も、息耕も亦身を兼て、内に在り、木伊乃取りは、木伊乃と爲る咄、這裏何ぞ勘破不勘破を說かん、慈直に去れ、僧便ち行く、勘破了也、勘破了也、後の論者蛇足を畫く、何の巴鼻かある、乃ち是れ丁寧君德を損する者なり。

三百六十五　馬大師日面佛月面佛

擧、白雲上堂擧、馬大師院主問云、和尚近日尊位如何、大師云、日面佛月面佛、師云、會麽、如不會、白雲與爾頌出、孚嬢女子畫蛾眉、鑾鏡臺前語似痴、自說玉顏難比並、却來架上著羅衣、白雲頌、日面佛月面佛、美如西施離金闕、嬌似楊妃倚玉樓、瑞阜卽不然、玉顏不及寒鴉色、猶帶昭陽日影來、與白雲底孰親孰疎、試甄別看、

是れは五祖が、馬祖の日面佛月面佛を、拈評したのぢや、雪竇は、日面佛月面佛、五帝三皇是何物と、頌せられたか、五祖は少女の鏡に對して、蛾眉を畫き、其玉顏に誇り、綺羅を著て、喜こぶ樣子を、頌せられたぞ、一は猛將豪傑が、拔山蓋世の勇氣も、猶ほ辟易するの態

あり、一は婦人女子の窈窕柔和の姿たあり、其相距る甚だ遠くして、兩個の老漢、意什麽の處に在る、日面佛月面佛は、親しみ愛すべきか、怖れて近づくべからざるか、這箇は人人の腕前で、見るが好い、定盤星を認めては、不可ぬぢや、這箇の話、馬師の活きて躍る的の境界を看よ、圓悟は下語に、三日の後ち亡僧を送らざれば、則ち好手と、道破したは面白い、此魂膽は、熟練の上ならでは、見ぬぞ。

三百六十六　百丈奇特事

擧、僧問百丈、如何是奇特事、丈云、獨坐大雄峯、僧禮拜、丈便打、

這僧問處、言中有響、百丈答處、句裏呈機、問在答處、答在問處、圓悟云、衲僧家須是未問以前意始得、這僧禮拜與尋常不同、且道、僧禮拜丈便打、石火電光、存乎機變、如何是機變、莫敎平生肝膽向人傾、相識還如不相識、

百丈の奇特事ぢや、是れは師學共に、揃ひに揃ふた、働らきぢや、這の僧大したものぢや、圓悟は美めて、機に臨んで、危亡を顧みずと、道ふたぞ、百丈云く、獨坐大雄峯と、乃公が此通り、坐り込んで居るは、難有からう、拜めく、と、能くも云ふたぞ、這の僧便ち禮拜したは、勝れたものぢや、斯う無くては、百丈を見ることは、能きぬ、然しながら、大に變たねば、